

ばり女ですもの、高宮さんにそんなに思はれたのかと思ふと、その時は決して悪い氣持はしなかつたのよ。どうもあの人の戀を受入れる事は出来ないとは思ひながらも、どこまで本心なのか、試して見る氣になつて、かう云つたのだわ……私はあなたがほんとに私を思つて下さるなら、私だつて決して悪くは思はないけれども、私は事情があつて、良人を持たない覺悟をして居るから、折角あなたのお言葉でもお断りする外はないと、體よく拒絶して見たのよ。」

「そしたら？」と、雪路は深い傷手を押包んで額の筋一つ崩さず、言葉少なに促がした。

「さうすると高宮さんは、自分は何もあなたに妻になつてくれと望むのではない、あなたが良人を持たないといふこそ何よりの幸ひだ、實は自分の心にはちやんと未來の妻と定めて居る女がある。だからあなたに決して妻になつてくれとは云はない、私達現代人は現在の生を享樂しようとする、本能的のどうする事も出来ない強い欲求を持つて居る、その欲求に共鳴する友をあなたに求めるのだ。私は不幸にして妻と思ひ定めた女には、靈的の愛は持つて居るけれども、ちつとも肉の愛を持つて居ない、その不足なものをあなたが補つてくれ、ばい、のだつて……まア、どうでせう、私、ほんとに驚いちゃまつたわ。私達の信じて居たあの人の性格と、全く反對な事をいふでせう。ですから今まで好意を以て聞いて居た私が、その詞を伺ふと、急にむら／＼と反感が起つて來たのよ。」

雪路の顔は土のやうに變つて了つた。残忍な女の毒舌は、更に進んで底止するところを知らない。

「だから私、腹が立つまゝ、面と向つてさう云つてやつたのよ。あなたは今迄素行の正しい、品性の高い方とばかり思つて居たのに、それはみんな猫を被つて居たのだ、あなたは驚くべき僞善者だつたのだ。あなたは修飾した口實のもとに、私を弄ばうとするのだ、私はいくら何でも人の慰みものにはならないつて……さうすると、何もあなたを弄ばうとするのぢやアない、弄ぶなど、いふ詞を使ふのが間違つて居る、あなたと私とが現在を享樂しやうといふまで、それは現代に活きやうとする現代人の赤裸々の要求ではないか。素行が正しいとか、品性が高いとかいふ事は、要するに舊道德に支配されて居るものゝいふ事で、われ／＼の道德の標準は別にある、自分は一度でもそんな事を標榜したこともなければ、従つて猫を被つた覺えもない、私はあなたこそよくこの現代人の心理を解するものと思つて居た、その上にあなたは私を愛して下さるものゝやうにも推測して居た、あなたが私を拒絶するといふことは實に意外だつて、それを眞面目に仰しやるのよ。私、馬鹿々々しいやら腹が立つやらで、……それは私はたしかにあなたに好意を持つて居たに違ひない、或はあなたを愛して居たかも知れない、だからもしあなたから、眞面目に奥さんになつてくれと申込を受けたのなら、假令私の主義がどうあらうとも、一應は考へて見たかも知れない、併し、今はもう考へて見る餘地も何もない、私

は無節操な賣春婦ぢやアない、心に極めた奥さんがある上に私に關係しやうとなさるあなたは、差づめ私達の性を侮辱するもので、新舊道德のいづれの立場から見ても、決して許される事ではない、あなたがそんな侮辱を私に加へやうとなさるなら、もうあなたの友として残るのも今日きりだ、私はあちらへ行きますつて、立去らうとすると、慌て、私を引止めて、この事をお嬢さんにいふつもりかどうかと聞くのよ。それはどうか分らないといふと、お嬢さんに云はれると、折角三春家に信用を得た私の地位もどうなるか分らない、何も三春家に對して、不正な事をしたといふやうな事とは性質が違ふから、是非秘密を守ると約束してくれと懇願なさるのだけわ。……私、何もそんな事を公にして、高宮さんを排斥する考へなどは、ちつともなかつたんですから、秘密を守ると云つてあければよかつたんですが、何だかこつちが強くなると、妙な意地が出て、そんな約束は出来ないつて刎つけて了つたのよ。」

艶子は雪路の顔色を伺ひながら、能辯にまた極めて巧妙に話しつゝけるのである。

「さうすると高宮さんは、私がつきりあなたに告口するものと見たのでせう、恐ろしいほど激昂なすつて、それなら自分の方にも覺悟がある、あなたと牧山さんと醜關係のあることを、お嬢さんに密告するといふのよ。まア實に驚いちまつたわ、いくら人に濡衣を着せると云つて、あんまりだと思ふ

ので、私も充奮しながら、あなたは實に恐ろしい人だ、私はあなたが恐くなつた。併しそんな根も葉もない事を、雪路さんに云つたところで、決して雪路さんが信用なさる筈がないから大丈夫だといふと、さう思ふのが間違つて居る、根も葉もない事でも何でも構はない、私はお嬢さんの信用を得て居るから、必ずお嬢さんに信じさせて見せる、もしお嬢さんが信じないとしても、私はあなたよりも誰よりも奥さんの信用を得て居る、それから朱雀野の御隠居の信用も同じやうに得て居る、信用の程度から云へば、私の方があなたよりすつと上だ、だから私の云つた事は、きつとみんなに信じさせて見せるつて、私を脅迫なさるのよ。……だけでも私も負けない氣になつて、私だつて雪路さんの信用があるから、今日の事を話せば私を信用して下さるから、あなたがどんな中傷をしても駄目だといふと、誰も證人のない事を云つたつて仕方がない、私それは中村さんの作り事だと云へばそれになつて了ふ、こゝはあなたの出やう一つで取返しのかぬ事になるから、あなたの利益のため冷静に考へて見るがよからうつて……さう云はれて見ると、私の混亂した頭にも、それはそれに違ひないらしく思はれて来るのよ、私と高宮さんの信用の程度は、實際比べものにならないんですもの……だから、私、悔しくつて仕様がなけれど、喧嘩分れをしたら、取返しのかぬ事になると……やつぱり女は弱いわねえ、自分に道理がありながら、ついするんぐに妥協して了つたのだけわ。……それで高宮さんは満

足して歸つてらしつたんですが、私、後になつて、どう考へて見ても、馬鹿らしくつて、悔しくつて仕方がないもんですから、そのまゝ泣いて居て、あなたのいらつしつたのも氣づかずに居たのですわ。」

さう云つて艶子はまたハンケチでその口惜しさうな涙を拭いた。

雪路の顔は今死人の如く蒼ざめて居るのである。彼女の心の搔むしられるやうな激しい混亂を、適當に表はす言葉は、恐らくは見出せないであらう。裏切られた怒、怨、絶望、嫉妬、悔恨、あらゆる感情が渦を巻いて彼女の小さい胸に蝟集するに違ひなかつた。艶子の前で、自分の感情を司配しようとする彼女の苦闘は、哀れにも悲壯なものであつた。艶子が居なかつたならば、彼女は堪得ず、その場に泣倒れもしたであらう。……けれども勝氣な彼女は、よく自分自身に打克つ事が出来た。

彼女は言葉少なに、けれども流石に聲を震はせて、

「高宮さんはそんな人だつたんですか。」

彼女にはそれ以上を云ふことは出来なかつたのである。

「だけでも雪路さん。」と、艶子は勝利の満足を押隠しながら、懇へるやうに雪路を見て、「高宮さんには私が申上た事、何にも仰しやらないで下さい。私、高宮さんにどんな事云はれるか知れないんです

から……。」

「そんな事心配するには及ばないわ。」

「でも雪路さん、後生ですから、あなたの胸一ツに收めて置いて下さい。……よござんすか。」

「それは誰にも云はないわ。……だけど……。」

「高宮さんにだけは決して……ね、よござんすか。雪路さん。」

「それは高宮さんに云つて見ても仕方がないわ。」

「難有う……。それで私、安心が出来るわ。」と、艶子はにッと笑つた。

艶子と別れて事務室に歸つた脩の胸は、決して穩かでは有得なかつた。彼の恐れて居たものは遂に來たのだ、併しそれは早晚來るべきものが來たので、艶子が邪淫な慾望を捨てないで居る限り、二人の間に破綻の來るのは止むを得ない事だつたのだ。それは寧ろ早く來て了つた方がいゝとさへ脩は思ふのではあつたが、たゞ艶子がどんな復讐手段を取るかも知れないと思ふ懸念のある事と、艶子の自分を批難した言葉とが、よしそれは彼女の本心から出たものではないとしても、甚だしく脩の神経を刺戟するのである。

實際彼が黙つて聞捨の出来ないと思ふのは、雪路を手に入れやうとするために、彼が千秋を取入れ、梅野を取入れ、道子刀自をまで取入れ、更に進んで牧山の排斥運動を試みやうとして居ると、艶子が彼を攻撃した言葉である。それはさうした邪推を受ける可能性がそこにあるだけに、彼の神経は惱まされるのであつた。そしてそれは必らずしも艶子のみの邪推ではないと考へるところに、更に彼の悩みは深められた。彼に取つてはさういふ事を推測されるものとすれば、それほど苦しい事はないので、自分の潔白な心は、此際證明して置く必要があると、彼は切に思ふのであつた。

自分の潔白を證明し、また同時にすべてを解決する唯一の方法は、雪路と嘉三郎との結婚を、一日も早く成立させる事ではないか。——と彼は考へた。どうせ自分と雪路と結婚が出来ないならば、さうした豫定の結果に終る事が、自分の心に平和を招來する一番の捷徑であると思ふのだ。自分の潔白が雪路にも疑はれて居るなら、それは自分に堪へられない事ではあつても、雪路の幸福のため、そのまゝにして嘉三郎と結婚させるがいゝのだ。——さうも考へるのだ。彼は雪路と自分との結婚の不可能であるといふ前提の下に、雪路の幸福を計るの途は、その外にあるまいと信ずるのであつた。

彼は艶子の復讐といふ事について、無論氣にせぬではないが、まさかほんとに復讐もしまいとも思はれるのと、假にその邪推から、自分と雪路の間を裂くやうな行動を取るものとしても、もと／＼雪

路に野心のない自分には、深い影響を與へられるものではないと思ふので、大して氣にもかけないのであつた。また艶子がいくら自分に復讐をするところ、彼女が現在雪路に試みたやうな恐ろしい中傷を、彼に加へるとまでは夢にも思はない。その一滴さへ全身を麻痺させるほどの強烈な毒素が艶子の三寸の舌から、今ごろ雪路の心臓の奥深く注射されて居るのだと、知る由もない彼は、假令どんな中傷を艶子が試みたところで、一點の疚しいところのない自分は、少しも恐れる理由はないと多寡を括つて居るのである。彼は艶子が一個の石で二個の禽を打つて居る事を知らない、艶子の中傷が、深刻に傷手を與へて居るのは、彼ではなくて、却つて雪路である事を彼は少しも氣づかないのだ。——そして彼は案外平氣で居る事が出来た。

梅野

脩がなほ思索に耽つて居る時、女中が八ツ茶の迎ひに來た。脩は艶子と顔を合はせるのが不快に思はれたが、自分はどこまでも艶子の友だと云残した通り、よし艶子がどういふ素振を見せやうとも、こちらからは表面今まで通り、交際つて居ればいゝのだと考へながら出かけて行つた。

客室には老婦人と梅野と千秋とが居た。千秋は學校から歸つて來たばかりであつた。脩は千秋を相手に話して居る中に、艶子がたゞ一人降りて來た。艶子は妙に取澄して居たが、脩に敵意を見せるやうな素振はしなかつた。

「雪路は？」と、梅野に尋ねられて、艶子はたゞ無造作に、

「多分すぐいらつしやるでせう。」と、答へて、意味ありさうな眼で脩の方を見た。

併し茶が入つても、路は降りて來なかつた。

人々が茶を取つて居るところへ、嘉三郎が案内されて入つて來た。馬で來たらしく乗馬服をつけて居た。

脩が立つて快よく彼を迎へると、彼も宏量を見せて、友の如く脩と挨拶を換した。

「千いちやん、牧山さんもおいでになつたからと云つて、姉さんと呼んでおいで。」と、母親が千秋に命じた。

千秋は二階へあがつて行つたがすぐ降りて來ると、

「姉さんは頭痛がするから降りて行かれませんか……。」

「どうしたのだらうね。」と、梅野は眉を蹙めた。

「いえ、決してお構ひなく……。」と、嘉三郎は云つたが、明らかに失望の色が見えた。

「何だか先ほど血色がおわるうございましたわ。」と、艶子が云つた。

嘉三郎は艶子の方を見て、心配さうに、

「どうかなすつたのでせうか。」

「さア、どうですか、やつぱり頭痛がなさるんでせう。」と、艶子はまた澄して答へた。

脩は別に氣にも留めなかつたが、嘉三郎が來たといふ事も、雪路を動かすに何の力もない事を、嘉三郎のために氣の毒に思つた。殊に彼が馬で來た事から察すると、明かに雪路を誘ひ出しに來たのだと思はれるので、いゝ氣味だといふやうな氣には決してなれなかつた。それほど今日は彼の心に嘉三

郎に對する同情が湧いて居たのである。

嘉三郎が止むを得ず尻を落ちつけたので、脩は彼とゆる／＼言葉を交へる機會を見出した。小さな平凡な人物ではあるが、性質のよくない人間でないと思はれる點が、見所であると思つた。雪路がほんとうにこの男を愛する氣にさへなれば、そこに幸福が見出されるであらうとも思はれるのである。

嘉三郎と艶子は、彼等二人のみの場合に、見せ合ふやうな態度や、言葉遣ひは、人前では決してしなかつた。二人とも客室ではあまり言葉を換さず、取澄して居るのが例だつた。

脩は二人の間を、或疑惑を以て見ては居るのであるが、——そして艶子が自分を誘惑しようとしたやうに、嘉三郎を誘惑した事も、當然有得べき事のやうに考へるのではあるが、併しさういふ疑を人にかけるには、まづ極めて慎重の態度を取らなければならぬと思ふ一方に、萬一その疑が確められるやうな場合が假にあるとすると、自分の嘉三郎に對する意見は、當然改められなければならないと思ふので、なるべくさういふ方面には觸れずに、目を眠つて居やうとするのである。

彼は人々より早く切上げて事務室に歸つた。

その日の晚餐の折、雪路は人々が食卓についてから顔を見せたが、血色は決してよくなかつた。母

親に尋ねられて、まだ頭痛がよく取れないのだと云つたが、脩は雪路の妙にいら／＼して居る様子から、何かあるのではないかと案じた。雪路がちつとも自分の方に目をくれないで居るのは、この前自分に含んで居た時と、少しも變らないので、ひよつとしたら自分の氣づかつて居た通り、艶子が何かの中傷を試みたのかも知れないと思つた。

雪路は食事も軽く済まして、人々より先へ、食卓からすぐ自分の居室へと歸つて了つた。

脩は明日になれば様子が分るだらうと考へながら、自分も客室ではあまり長く人々と話し合はずに長屋へ引取つて來た。

翌日になつても雪路の自分に對する態度は、その不可解であつた以前の折と少しも變らなかつた。彼女は脩を避けるばかりでなく、時々脩と見かはす眼の中に、許すまいとする色を見せた。艶子は何かはぬ顔をして脩に對して居るが、これも輕侮の色を見せながら、時々いゝ氣味だと云はぬばかりの眼つきをするのである。脩はいよ／＼艶子が何かの中傷を試みたのだらうと推測したが、差當りどうすることも出来なかつた。かういふ不快の日が二三日續いた。雪路は殆ど脩に話しかける事がないので、脩の方から話しかけると、簡単な返事だけはするが、いつも彼に與へて居た暖な微笑は永久に失はれて、峻嚴な批難の色が眼に宿り、多くの場合に彼の存在を無視する態度を取るのである。さうい

ふ状態の續く事は脩には堪へられないところなので、雪路に直接當つて見て、説明を求めやうかと考へて見た。……併し單獨に雪路を見出す事が困難なので、さう考へながらもそのまゝに過ぎて了つた。

脩はそれから森へ行く事も避けて、また農村めぐりに出かけ始めた。それはいつそ雪路をこつちからも避けて見る方が賢明であると考へたのと、今は雪路の一瞥一笑に、司配されることもないまでに、心の餘裕が出来て居る彼は、急いで彼女の説明を求める必要もないと考へた、めであつた。彼はさうして除草や、畑打や、田植前の準備などに忙しい小作農を日毎に見舞ひながら、彼等と醇々な談話をかはす事に、多大の慰藉を見出して居たのである。朝出ると夕方でなければ歸らず、時には晚餐の時刻に間に合はぬ事さへあり、實際雪路と顔を合はせる場合は少くなつて居たので、相變らず雪路の自分を見る眼に、永へに許すまいとする色が宿り、時には甚だしき憎惡の表示とさへ思はれる眼光に出くはしながら、雪路から説明を求める機會は、容易に捕へられさうに思はれずに過ぎたのであつた。

併し雪路の上に、彼が決して冷淡であり得なかつた事は、いふまでもない事である。彼は農村めぐりの合間に、千秋や重助から聞得たところを綜合して見るのに、このごろ雪路は、今までの快調さをすつかり失つて了つて、頭痛がするとか、気分がわるいとか云つては、自分の居間に閉籠りがちになつて居るらしく、母親の梅野もそれを心配して居るらしいのである。脩はさう聞くと、自分の事より、雪路の方が心配にもなり出した。そしてそれが艶子の中傷のためであるのか、他に原因があるのか分らなくなつて來た。併しいづれにしても、雪路に一通り説明を求める事が、雪路をその不幸な状態から救ふ上に必要であると、今度は雪路を主として考へて見るやうになつた。が、その機會は相變らず、見出せさうもなかつた。

脩が例の如く農村めぐりに出かけた或日、梅野は思ひ餘つた事があるらしく、道子刀自を訪づれた。そして暫らく世間話をした後、云出しにくさうに口を切つた。

「實は今日お尋ね申しましたのは、雪路の事について、いろ／＼案じて居る事や、またお力を借りて見たいなどと思ふ事もあるものですから、一應聞いて頂きたくつて、上つたのですが……いつまでも彼女の事が極らないもんでございますから……。」

雪路の事が話頭に上ると、刀自も膝を進めて、

「ほんとに早くお極りになりませんか、あなたもお大抵ではございませんわね。……あの雪路さんは

「このごろ少しどうかしてらつしやるやうでございますね。」

「はい、それでございますよ。あんなお轉變娘が、この節室にばかり籠つて居るやうになりましたね、血色もすつと優れないものでございますから、いろ／＼と氣が、りになりまして……。」

刀自も心配さうに、
「私もこの間お目にかつた時、血色もお悪いし、沈んで居らつしやるやうに拜見したのですが。……どこかお悪い譯ではございませんね。」

「いゝえ、そんな事はない筈でございます。私に聞かれると、やれ頭痛がするとか、氣分がわるいとか申しますけれども、それは只口實だけで、何でも考へ事をして居るんぢやアないかと、思はれるのでございますよ。」

「雪路さんが考へ事を……？」と、刀自は何か點頭きながら、「梅野さん、雪路さんがどんな考へ事をして居らつしやるのか、あなたのお考をお慮なく、仰しやつて見て下さいませんか。」

「はい……これは誰にも口外の出来事、あなたですから、申上げて見るのでございますが、……まだ娘の氣を引いて見たといふではなし、ひよつと私の邪推かも知れませんが、彼女はこの節高宮さんの事を思ひつめて居るのではないかと……そんなに思はれるんでございますが、……もし

それだつたら、どうしたらよいものかと、思案に餘つたもんでございますから、あなたのお考を拜借したさに……。」

刀自も流石に當惑の面色で、

「まア、さうでございますか、よく仰しやつて下さいました。……なるほどこれはありさうな事やうにも思はれます。あなたの御心配はお大抵ではございますまい……それでは雪路さんはこの節牧山さんをお嫌ひになつて居らつしやるやうな素振でも……？」

「それは牧山さんに對しては、別段際立つてさういふ素振が見えるといふのではございませんが……もと／＼彼女は牧山さんを嫌つて居ないといふだけで、好いて居るといふまで、はなかつたのですから、平生でも牧山さんには、氣の毒と思ふやうな仕打をよくいたして居りましてね、今度特別にそれが目立つといふほどではございませんけれども……それやこれやから判じて見ますと、どうも高宮さんの事を一圖に思ひつめて居るのではあるまいかと、思はれるのでございますよ。」

刀自は溜息を吐いて、

「さうでございますかね。……仰しやる通りだとすると、私の心持を申せば、雪路さんがよく脩さんを思つて下すつたと、お禮をいひたいほどでございますが、併し二人の添ふ望は逆もない事だと考へ

ると、そんな事を云つて居られはいたしません、ほんとに困つた事でございますね。」

「併し御隠居様、二人を添はせると申す事は、全く望のない事でございませうか。實は私とても娘が高宮さんをお慕ひ申すのは、無理もない事だと思ふのでございませう。牧山さんとて別に不足のない方だとは存じましても、高宮さんに比べたら、何から何まで見劣りのするばかりで、若い娘の目にそれが映らない筈は決してございせん。それに雪路はあゝいふ氣象ですから、並大抵の殿方では、氣に入りさうな筈がないので、高宮さんのやうな、人並優れたお方をお慕ひ申す氣になつたのは、全く娘の見上げた心だと……まア内心では思つて居ります位で……併し高宮さんは立派なお家柄の御相續人で居らつしやいますし、娘も同じ相續人の身の上で、このまゝでは全くどうする事も出来ないののでございませうけれども……私は何とかなるものなら、どうぞして娘の願を叶へてやりたいと……それで御相談にあがりましたので、何かよいお考はございませうまいか。折入つてあなたにお頼り申したいのでございませうが……。」

「さうでございませうね。私も雪路さんと脩さんなら、この上似合の夫婦はないと存じますけれども、……また私にも孫のやうに思はれる可愛い雪路さんのお望みなら、叶へてあげたいは山々でございませうけれども……脩さんが逆もね……。」と、溜息を吐いて、「甘露寺の家を興さなければならぬ責任を

持つて居る身體でございませうから……。」

「弟さんにお跡を取つて頂いて、來て頂たくといふ事も、逆も出来ない相談でございませうね。」と、梅野は云つたが、實はそれに一縷の望を屬して、刀自に頼らうとして來た譯であつた。

「それなら脩さんに話して見たところで無駄でございませう。自分の力で家を興すといふ固い決心を持つて居るのでございませうからね。」

あはやその一縷の望さへ、刀自の言葉に一蹴し去られると、梅野の口から出るものは、たゞ失望の吐息のみである。

「さうでございませうね。……それは由緒ある子爵家とわれ／＼どもの家柄とは、比べものにはなりませんから、もと／＼及ばぬ望ではございませうが、あんまり娘が不憫だと思ふものですから……。」

刀自は氣の毒さうに、

「併し梅野さん、これはどちらにしても、無理な事なのではございませうが、脩さんが三春家の人になると申すことは望みのないものとして、あなたの方にも千秋さんといふ方が、おいでになるのですから、雪路さんがどうしても脩さんをお斷念にならないやうな場合、脩さんの方へ雪路さんを頂くことは出来ないものでございませうか。……尤も脩さんは妻の財産で、家を興したと云はれるやうな結婚

は、決してしないと申して居りますから、承知をしてくれますか、どうかは分りませんが、たゞ私の念のためにお聞申して置くのでございます。」

「はい。」と、梅野は當惑しながら「それは私の一存では、何ともお答への出来ない事でございますが……第一父を納得させる事が、容易の事ではあるまいと案じられますので……。」

「さうでございませう。……さうするとこれはやつぱり、牧山さんで雪路さんを收めるやうになさるより外は……。」

「はい、さうするより外はないかも知れません。」と、またしても溜息を繰返しながら「たゞ雪路の不承知のものを、無理に押つけるといふ譯にもまわりませんから、それが何より……。」

「それはさうでございませうとも。……併しあなたはまだ雪路さんの決心を、お確かめになつたといふ譯ではございませう。」

「はい。……ですから兎も角折を見て、彼女の決心を聞いて見る事にいたします。……その上でまた御相談を願はなければならぬ事になるだらうと存じますが……。」

「はい、私も及ばずながらどんな御心配でもいたしますから……。」

「まさか勝氣の娘ですから、自分の望が叶はないと云つて、心得違もいたしますまいが……。」

「そんな事はありますまいけれども……併し雪路さんの生死にも關はるやうな事なれば、お互ひに何とか考へて見なければならぬ事でございませうからね……。」

「どうぞ此上ともよろしく願ひ申します。……そしてこの事は、どうぞ高宮さんには、仰しやつて下さいませうやうに……。」

「いゝえ申さないの段ではございません。……併し梅野さん、脩さんは雪路さんの心を、存じて居るのでございませうか。」

「さア、そのところは、何ともお答をいたしかねますが、……それにこの節は毎日小作廻りをして居らつしやるので、雪路とは却つて遠々しくして居らつしやる位ですが、若い同志の事ですから、察しては居らつしやる筈だと思ふのでございますよ。」

「脩さんにしましても、雪路さんにそんなに慕つて頂くと知れば、御一緒になりたいは山々でございませうが……。」

「まゝにならぬ浮世とは、よく申したものでございませうね。」

二人はまた溜息を合はした。

「實はこの前高宮さんの素性をお打明下さいました時、娘には仰しやつて頂かないやうにと、願ひ

いたしましたのも、かういふ事があつてはとの、心遣ひからでございましたが、彼女には何にも申聞かせません中に、やつぱりこんな事になつて了ひました。」と、梅野はまたしても愚痴に返るのである。

「梅野さん。これはいつそ雪路さんに、お打明けになつたらどうでございませう。却つて綺麗にお断念になるかも知れませんわ。尤も脩さんとの約束もあることですから、それはよくくの場合でなければ、お打明して頂たく譯にもいきませんけれども……。」

「高宮さんの素性を申聞かせさへすれば、それは屑よく断念めるだらうと存じますが、……併しさうまでして断念めさせるのは、なほさら残酷のやうに思はれます。出来る事ならこのまゝで……。」と、梅野は眼頭ににじんだ涙を指先で押へた。

刀自も眉の間を曇らせて、

「それもさうでございますね。」

二人の間に暗い沈黙が落ちた。

子故の闇

梅野が刀自を訪問した翌日は、雨ふりだつたので、脩は大方終りかけて居る小作めぐりを見合はして、事務室に籠城して居た。するとその中女中が来て、もし手隙なら奥様のお居室への口上なので、すぐ出かけて行つて見た。

「わざわざ来て頂たくほどの事でもありませんが。」と、梅野はいつもの親みの中に敬意を雑へた口調で、「今日は雨でお休みだと存じましたから、お呼立て申しましたので……毎日御苦勞様でございませう。それについて何か御巡回でお気づきの事でもありましたら、ゆるくお伺ひしたいと存じまして……。」

併しそれは梅野のほんとの目的ではなかつた。脩は問はれるまゝに、巡回中の所感を語り出すのであつた。

梅野はすべてを満足に聞取りながら、

「お蔭で小作人達もどんなにか喜んで居りませう。ほんとにあなたに来て頂いて、私共では、どんな

に仕合せをして居るかも知れませんが。」

「いゝえ、決してそんな事はございません。もとく小作人に對する、御當家の待遇がよろしいからの事でございます。……今度廻り歩いて見ましても、除草やら、施肥やら、すべての點に、いづれも乗氣になつて勵んで居りますから、今年の秋もきつと豊作でございます。近頃八釜しい小作問題もまづこちらには無關係で、何より結構でございます。」

「はい……當分はそれでようございませうが、併しいつどうなるものやら、分らない世の中になつてまゐりましたから、何とか世間より先に、よい取極めをしてやりたいものでございます。」

「左様でございます。私もその點について、いろいろ意見もございしますが、なほ小作人達とも此上へ分接觸して見ました上、私の考へを取纏めて申上たいと存じて居ります。」

「どうぞよろしくお骨折を願ひます。」

「はい、及ばずながら盡力して見るつもりでございます。……それではもう御用事は……？」

「一寸お待ち下さいまし。……なほあなたのお考へを拜借したいと思ふ事がございしますので……。」

「は……？」と、脩は不思議さうに梅野を見た。

「外でもありませんが、實は娘の養子の事で……。」

脩はハット思ひながら、黙つて梅野の顔を守ると、

「實は牧山さんといふ事で、話が少し運びかけたままになつて居る事は、うすく御承知かも知れませんが……。」と、梅野は逡巡しながら詞を切つた。

「はい。さういふお噂だけは伺つて居りますが……。」と、脩は何氣ない調子で云つたが、使用人などの關係すべき筈でない一家の重要問題を、梅野が何のため自分に話し出すのだらうと、怪しい胸騒ぎを覺えるのであつた。

「さうでございますか。それならお話も致しようございます。それは最初に牧山の方から話のありました事で、何もこちらから進んだ話ではなかつたのですが、私共ではこれまで随分諸方からの申込みに困りぬいて居りましたね……いづれも俗に申す長し短しで、それに肝腎の娘が、一向氣乗りがしないで居るものですから……まア相手にもしなかつたり、またお斷わりしたりして居つたのでございますが、その中だんく父の容態も思はしくありませんところへ、氣短になりました、早く極めて了ふやうにと申されますし……そんな折柄、牧山さんの方から話がありまして、先方はこの地方で聞えた家柄なり、當人同志も子供の時から知合だつた間柄なり、本人も評判のわるい方でもなかつたりするものですから、娘さへ承知なら、すぐ極めても差支なからうかと存じまして、父もいくらか乗氣にな

りましたところから、親々の間では、當人さへ得心すればといふところまで話が進んで、ついそのままになつて居る譯なのでございます。」

「は……左様で居らつしやいますか。」と、脩は梅野の言葉が切れたので、言葉少なに云つた。

「たゞ今申上げましたやうな譯で、先方へ承諾を與へたといふ譯でも何でもありませんので、只今の中なら、どうにでもなるのでございますが、……あなたのお考へを伺ひたいと申すのは、あの嘉三郎さんの事でございます。」

何だか梅野の言葉の裏には、脩の考へ一ツでそれを取消す事は何でもないのだといふ暗示があるやうに思はれるので、脩は梅野が何か云出すのだらうと驚きながら、

「は……。」と、外にはいふべき言葉もなく、その場つなぎの一語を入れた。

「あなたはあの牧山さんをどうお考へになつて居らつしやるか、腹藏のないところを仰しやつて頂きたいのでございます。何分私共は女の事で、人様を鑑定するといふやうな力が乏しいものですから、牧山さんにしましても、雪路の婿として、安心の出来るやうな方やら、出来ぬ方やら、……いろいろ考へて見るほど、なほ判断に迷ひまして……三春の一家は素より、雪路の一生に關はる大事な事でございますから、あなたのお眼鏡を拜借したいのでございます。」

脩はそれほどの一大事を、自分風情に相談しようとする、梅野の真意を測りかねる一方、自分の答辯には容易ならぬ責任がかゝつて居ると思ふので、ハタと當惑しながら、

「併し私のやうなものに、なか／＼人を見る鑑識などはございません。殊に牧山さんとはほんの昨今のお知合で、そのお尋ねには全く迷惑いたします。」

「いゝえ、それは御迷惑はお察し申します。……併しあなたはこの三春の家のため、また雪路の身の上をほんとお案じ下さる方だと信じまして、御迷惑と知りつゝ、お願ひ申すのでございます。あなたのやうなお方なれば、牧山さんとさう深くお知合にならなくとも、どういふ人物だといふ事は、すぐ御鑑定が出来ることだと存じます。……あの男では三春のためになるまい、雪路にも不似合の縁だと思召すならば、御遠慮なく仰しやつて見て頂きたいのでございます。」

脩はます／＼面くらひながら、

「それは私は御當家の御利益なり、またお嬢さんのお身の上をお案じ申して居る事は、誰にも譲らないつもりでございます。……併し牧山さんをお迎ひになつて、それが御當家のためになるまいとか、お嬢さんに不似合であらうなどは、少しも考へて居りませんことで、飛んでもない御推測でございます。」

梅野は追窮するやうに、

「それではあなたは牧山さんを迎へるのが、當家の爲で、また雪路にも似合の縁だと思召すのでございますか。」

「はい、……牧山さんのお家柄が、知られた名家で居らつしやるといふ事も、決してお見のがしの出来ない事だらうと存じます。云ふまでもなく、さういふ名家から、御養子をお迎へになるといふことは、御當家の誇りであらうとも考へられますし、いづれにしても御當家に御不利益の點はなからうかと思はれます。牧山さんの詳しい御性行は、一向存じませんが、お見受申しましたが、如何にも圭角の取れたお方で、立派な風采も持つて居らつしやいますし、高等の教育もお受けになつた上、外國でまで修養をおつみになつた方なり、性質も温順で居らつしやるやうでございますから、決してお嬢さんとお不似合といふ事はあるまいと存じます。」

梅野は不満足さうに、

「なるほど牧山さんは此地方での舊家でございます。併し私共はまさかに作男や大工の伴を、養子といふ譯にはまゐりませんが……私だけの考へを申しますと、家柄といふ事などは、そんなに重く見ては居ないのでございます。それはたゞ家柄のよいに越した事はない位に思つてゐるだけですから、牧

山さんの家柄が、如何によいと申しましたところで、そのため本人の足りないところも、辛棒するといふ氣には、なれないのでございます。何よりも本人が大事で、それはあなたの仰しやる通り、牧山さんの學歴や、御容子から申せば、決して不足に思ふところはございません。性質もなるほど温順でいらつしやるかも知れません。併し私には何となく物足らなく思はれます。あの方が娘の一生なり、三春の家を任せますには、頼りないやうに思はれてならないのでございます。私共は牧山さんには別段未練も何もないのでございますから、あなたのお心に思つて居らつしやる通りを、ほんとに腹藏なく仰しやつて見ていたゞきたいのでございます。」

脩は梅野が實際嘉三郎に、何の未練も持つて居ないだらうといふことは、容易に推測された。併し始めから未練を持つて居なかつたのではあるまい。それならその變化はどうして來たのか？……それは梅野が嘉三郎に優る候補者を發見したと思つて居るためではあるまいか？ 家柄などは問題でないと云つたりする前後の言葉の綾から察すると、すべてが自分に謎をかけて居るものゝやうに思はれるのだ。脩の心は恐ろしい緊張を感じた。併し梅野のさうした希望は、この上育てさせてはならない、培養してはならない、今の中に芽を摘んで了はなければならぬ——と脩は決心を極めるのであつた。

「併し、奥様、私にはあなたの物足らなく思召すといふところに、却て御當家の幸福の基礎がありはしないかと思ふのでございます。人間の慾望には限りのないものでございますから、なるほど牧山さんに御不足もございませう、大きな御期待をなさるには、物足りない方でもございませう。ですけれども御當家はたゞ在來御經營になつて居る御事業を、お守立にさへなればよろしいので、この上際限なく御發展なさるといふ事は、あまりお望みになつては居らつしやらないものと、御推測申上げますが、さうすれば御事業の上に、大人物をお求めになるといふ必要もあるまいかと存じます。たゞ小心翼翼として、現在の地位を守られるといふやうな御養子が、一番望ましい事なので、それには牧山さんがお望み通りの方なのではないかと思ふのでございます。第一お嬢さんが確かりして居らつしやるのですから、萬事お嬢さんのお指圖通りになつて、その上お嬢さんを大事になさるといふやうな方なればこれに越す御養子はないと考へますので、その點から見ましても、牧山さんがまづ理想に近い方ではないかと思ふのでございます。」

脩が容易に自分の思ふ壺へ入つて來ないので、梅野は溜息を漏らしながら、

「なるほどさう仰しやられると、さういふところもあらうかと存じますが……それはもと／＼此上財産を殖さうとか、手を擴げやうとか、そんな考へは少しもございせんので、なまなかいろ／＼の事

に手を出して見やうとするやうな、山氣のある養子に來られても、全く困るのでございますが……併し私は養子の人物次第では、——ほんとに見込のある養子ならば、すべてを任せて、發展なり、擴張なり、また外の事業を興すなり、存分に腕を揮はせて見たいと存じて居りますのですけれども、さういふこちらで見込んだ方に、逆も來て頂く望がないとすると」と、梅野は意味のある眼で、残り惜しさうに脩を見て、「やつぱり後生大事と今までの事業を守る養子を迎へるが、一番間違のないところなのでございます。併し雪路がいくら確かりして居ると申しましたところで、女の事でございませうから、自分の考へですべての事業を經營して行くといふやうな事は、思ひもよらぬ事でございます。それにこれからは地主として立ちますのも、なか／＼容易ならぬ時勢になつてまゐりましたから、よほど確としたものを迎へませんと、この三春の家も、養子次第でどうなるか分らないのでございます。それを考へますと、どうやらあの牧山さんでは……。」

「併し牧山さんも受のよい方のやうでございますし、第一小作人達から女神のやうに思はれて居るお嬢さんが、ついて居らつしやるのですから、地主としての御當家の地位は、決して動くやうな事はございませぬ。その點はお案じになる必要はないかと存じます。」

「さうでございませうかね。」と、梅野は脩の顔を凝視して、「併し高宮さん、あなたはどうか思召しま

す。肝腎の雪路が少しも牧山さんを愛して居りませんでも——、牧山さんを迎へる氣がなくとも、家のため犠牲にさせなければならぬものでございませうか。」

脩はハツと當惑の眉を擧めながら、
「併しそれは別問題だらうと存じます。お嬢さんを無理にお強申すといふ事は、如何でございませう。御養子問題は三春家が主か、お嬢さんが主かと申しますと、やはりお嬢さんが主であらうと存じますから……。」

梅野はその言葉に勇氣づけられたやうに、

「それなら高宮さん、私があなたに申上げて間違のないと思ひますのは、雪路が少しも牧山さんを愛して居ないと申すことと申すは、娘は外に愛して居るものがございませう。さうしたらこの問題はどうかしたらよいものでございませう。」

脩は思はず顔を染めた。が心の狼狽をすぐ押隠しながら、

「併し私はお嬢さんが牧山さんをお嫌ひになるものと考へません。人間は必らず愛するものと結婚しなければ、幸福の得られないものではございませぬ。決心と勇氣一ツでございませぬ。人間に絶対の自由といふものがない以上、われ々は社會のためか、家のためか、人のためか、必らず多少自分を犠牲

にする覺悟がなければなりません。……犠牲になる事を、人が強ふるのは悪い事でございませぬ。併し自から決心するといふ事は、貴といふ事でございませぬ。……これは私の例を申上げるので恐れ入りますが、假に私にも愛する人があると致しませう。私は其愛する人のため、時と場合によつては、或は身命を抛つやうな事がないとも限りませぬ。併し愛する人のために、すべてを忘れる事は出来ませぬ。自分の家のため、また或決心のため、愛人を捨てなければならぬ場合には——それが兩立しない場合には、屑よく自分の愛を犠牲にいたします。それは人間にそれと授けられた義務のある以上、その義務を盡す上において、いたし方のない悲劇でございませぬ。」

梅野は次第に動かされながら聞いて居たが、絶望の表情と共に、

「あなたのお立派なお考を伺つて、恥入りましてございませぬ。あなたの御決心はほんとお見上げ申しました。……併し雪路は女の事でございませぬから、あなたのやうな決心を持つ事が出来ませぬか、それが氣がかりでございませぬ。」と吐息と共に俯むいた。

「私は勝氣で聰明で居らつしやるお嬢さんに、そのお覺悟がないとは信じませぬ。」

梅野はさうは信じられないながら、

「さうでございませうか。」

「他からお案じになるやうなものではあるまいと存じます。」

梅野は脩がどうして雪路の心を見ぬいたやうにいふのかと、怪しみながら脩を見たが、そのまゝ黙つて了つた。

息苦しいやうな沈黙がそこにあつた後、梅野の方から、

「高宮さん、ほんとお引留しまして、はしたない親心を御覽に入れて了ひました。これも子故の間でございます。どうぞお笑ひ遊ばさないやうに……ではお引取下さいまし。」

「はい。……それでは御免を被ります。」

脩は何とも知れぬ緊張した心持で、梅野の前を辭すると、わが住む長屋へ歸つて來た。

彼には今こそ梅野が彼に懇請しようとした意味があり／＼と讀めた。梅野は既に雪路が自分に戀して居ることを見抜いて、娘の願を叶へさせやうと試みたのである。脩は自分がそれほどに見込まれて居たと思ふと、決して悪い氣持はしなかつたが、いよく空想の域を離れて、それが現實問題になつたのだと知ると、もう夢を見ては居られなかつた。自分は嚴肅な態度を以て、雪路の幸福のために、ほんとに努力しなければならぬ、それは雪路に屑よく自分を斷念させて、牧山の妻となる決心を固めさせる事だと思ふと、今日の今までも雪路から説明を求めやうとして居た自分の未練と愚さが、あ

り／＼と判つて來た。今更雪路の説明を求めたり、説明を與へたりする必要がどこにあらう。もし親子の中傷のため、雪路の心が自分から離れるなら、それは寧ろ幸であると思ふのであつた。

雪路の悩みを見て見ぬふりをする事は苦痛である。併しその苦痛を救へば、更に第二の苦痛を與へなければならぬ。そしてその苦痛の方が、更に深刻であるかも知れないのだ。……今は自分として三春家から雪路を奪ふ事はどうしても出來ない、それは全く梅野に對して出來ない事だ。自分は永遠に雪路を斷念しなければならぬ運命の下にあるのだ。

彼の胸には搔撈られるやうな苦痛と、悲哀があつた。雪路がさうして遂に牧山のものになつて了ふのかと思ふと、堪へられないやうな氣がした。

雪路の覺悟

梅野は脩を歸した後で、いよいよ脩が見上げた男だと思ふと、よし雪路が屑よく斷念めてくれるとしても、自分の方が却つて斷念められないやうな氣がするのだ。雪路の戀も叶へてやり、自分の望も遂げたいためには、或協定の下に、脩が雪路を貰つてくれるなら、雪路をやつてもいゝとさへ、今は切に思ふのである。それは跡目は千秋に立てさせるとして、千秋が成人するまで、脩夫婦に同棲して、財政の監督をして貰ふ事で、それさへ出来れば、雪路を出しても仔細なと思ふので、またその方針で專造を動かす事も、大して困難ではあるまいと信するのである。それには兎も角も娘の考へや、決心を一通り聞取つた上の事と、今度は雪路を自分の居室へ呼びよせた。

暫らくすると雪路は、母の居室へ入つて來たが、今日も血色は勝れては居なかつた。薔薇のやうな頬の色はいつからか失せて、眉のあたりには長へに霽れぬ雲が見え、明星のやうに冴えて居た眼にもどんよりとした曇と、焦々しさがあつた。

「お母さん、何ですの？」

母は憐れむやうに、娘の様子を見ながら、

「雪ちやんお前、今日は氣分はどうなの？」

「何ともないわ。」

「それならいゝけども……。まだ血色がほんとでないやうだね。」

雪路はそれを云はれるのが、厭でならないやうに、

「だつてもう何ともありませんもの……。」

「さうかへ、お母さんの氣のせいかも知れない。……お前を呼んだのは、外の事でもないがね、お祖父さんもこの節ぢつとおちついては居らつしやるものゝ、この冬は逆もむづかしさうだし、御自分でもその覺悟なので、氣をせて居らつしやることは、お前もよく承知のことだらうと思ふが……それについてお前の縁談のことですがね。……」

「はい……。」と、雪路は俯むいたが、その顔は心もちまた蒼ざめたやうに思はれた。

「私達は決してお前の進まぬものを、無理にどうかうといふのではありません。お前の心に思つて居る事があるなれば、それも包まず云つて貰ひたし、またお前の望も、若し叶へられるものなら叶へるやうに骨も折つて上げます。……三春の家のためただけけれども、私達は決して家のためや親のため

に、お前の幸福を犠牲にさせやうとは考へてゐないのです。何もかもお前が第一なのだからね、……山さんの方の話も、お前の進まぬものなら、断つて了ひます。たゞいつまでも極らず引ッばつて置くといふのでは、先方でも迷惑だらうからね。……二三日前にも牧山さんの方から何とかまだ返事が留めないものだらうかと云つて来た位で、今度こそよく娘の決心を確かめた上で、と挨拶をして返したのだが……さうく同じ事ばかりも云つては居られないから、断わるものならきつぱり断つて了はうと思ふのだよ。……私達は少しも牧山さんに未練がある譯ではないのだから、お前の考へ一ツで、どうにでも事は極るのです。」

雪路は俯むいたま、黙つて居るのである。

母は娘の心を察しやつたやうに、

「實のところお母さんも、牧山さんをお前の良人とするには、少し頼りのない方だとも思つて居ます。もつと立派な、確とした人があるなら、財産とか家柄とかいふ事は二の次にして、人物本位に、お前の願を叶へてあげたいつもりで居るのです。だからお前もよくお母さんの心を汲んで、思つて居る事があるなら、包まずお母さんに打明けておくれでないか。」

雪路の眼は火を點ぜられたやうに母を見上げた。併しそれは感謝のためではなく、寧ろ怒に燃ゆる

眼光のやうに見えた。

母は心づかずになほ詞を次いだ。

「それは私だけの考をいふのだから、この場きりに聞いて貰はなければならぬけども、家には千秋も居るしするから、それがお前の仕合せになるといふ事なら、是非お前に家に居て貰はなければならぬとも云はないつもりなのだよ。何もかもお前の決心一ツで極る事なのだから、遠慮なくお前の思つて居ることを、お母さんにだけ打明けて貰ひたいのです。」

梅野の言葉には、母としてのあらゆる慈愛が籠つて居た。……が雪路は母の情を難有いとは思ひながらも、或反抗的な考へが、彼女の頭を支配するらしく、母を見上げると、きつぱり

「お母さん、私は牧山さんと結婚いたします。」

母はわが耳を信ぜぬやうに、驚きながら娘を見つめて、

「雪路や、お前、それは何をいひなのです。」

それが母の望まぬ答であると、母の様子からハッキリ知る事の出来た雪路は、いよく思ひ當るやうに、決意と共に蔑すむやうな色をさへ見せて、

「牧山さんと結婚すると申上げたのよ。……それでい、でせう。」

梅野は自分の心が、娘に通じないのかと、齒痒いやうな思ひをしながら、

「それならそれで悪いとは云はないけれども……今もいふ通り私達は、お前のほんとに氣に入らないものを、強る氣は少しもないのだから、またお前の無理なら、通してもあけるつもりで居るのだから……お祖父さんにも、私にもちつとも義理立をするやうな考を、持つて貰ふには及ばないのでですよ。……私の意味を取違へないやうに……今もいふ通り家のためでもなければ、親のためでもない、全くお前のためなのだから、お母さんはお前に、少しも遠慮のない返事をして貰ひたいのです。」

「お母さんのお心はよく分つて居ります。……私は決してお祖父さんやお母さんに義理を立て、お返事するのではありません。」

「ではお前の本心から、牧山さんと結婚するとおいひなのかへ。」

「はい。」と、雪路の顔は蒼ざめては居ながら、きつぱりした決心を見せていふのである。

「さうかねえ。……併し雪ちゃん。」と、優しく、娘に反省させやうとするかのやうに、「私は何も今日すぐお前の返事を聞かうといふのではないからね、よく考へ直して見て、返事をしておくれ。……ね、よく考へて見てね、お前の一生の幸福に關する大事な場合なのだから……。」

子故の闇に迷ふ梅野は、今は却つて娘の返事を延ばさせやうとする、さうした矛盾した行動を平氣

で取るのであつた。

「お母さん、私は十分考へぬいた上の事なんです。この上考へ直して見る必要は、何にもありません、……どうぞ先方へお返事をなすつて下さいまし。」と、雪路は何の躊躇するところもなくいふのである。

母親はたまらない氣がするやうに、

「お前、先方へ返事をしてつたら、もう後からどうする事も出来ないのですよ。」

「はい。」

雪路はそんな事は、もう分り過ぎるほど分つた事だといふやうな顔をした。

梅野は雪路の心を見ぬくやうに云つた、先程の脩の言葉を思ひ起しながら、さうすると若い同志の間には、お互に固く斷念する了解が、成立つて居たのかと推測して、何とも知れぬいぢらしさと痛恨に、胸を打たれるのである。

彼女は溜息と共に、

「それならさうする外ないが……。併し雪ちゃん、お母さんはどうもお前が家のため、犠牲になる覺悟を極めて居るやうに思はれてならないのだよ。それならお前にモ一度思ひ返して貰はなければなら

ないのだから……。」

「私、何にもそんな覺悟があつてお返事するんぢやありません。自分を犠牲にするなどは、夢にも思つて居ない事ですから……。」

「それではお前に尋ねますがね、お前は牧山さんを愛しておいでなのかへ。」

雪路はハツと顔を伏せると、

「お母さん、どうぞそんな事はお聞きなさらさないで下さい。私が牧山さんと喜んで結婚すると云つたら、それでいゝぢやありませんか。」

梅野は眼を濕ませて、

「それ御覽なさい。お前は牧山さんを愛しては居ないのでせう。……自分の愛して居ないものと結婚するのが、犠牲になるのでなくて何です。」

雪路は伏せた顔を擧げると、

「私、何も牧山さんを愛して居ないとは申しませんが、また愛して居なくても、これから愛する事が出来ます。世間には愛のない結婚をして居るものが澤山あるぢやありませんか。何も犠牲になるのぢやアないわ。……お母さんはなぜそんな事を仰しやるのです。」と、批難するやうに母を見た。

雪路の顔には焦燥しさがあつた。——母は何ものかに籠絡されて居る、よし母が籠絡されても、自分分は決してそんなものに籠絡されない——さうした昂然たる様子が見えるのである。

「それはお母さんは、もしお前に外に愛するものがあるなら、どんな無理でもしてあげたいからいふのですよ。」

「いゝえ、私、外に愛するものなんかありません！」と、雪路は亢奮したやうに云ひ放つた。

母は臍に落ちぬやうに娘の様子を見たが、併し娘に反抗的の氣分が湧いて居るものとまで見ることは出来なかつた。飽まで本心を隠さうとするために、さうした様子を見せるのだらうと解釋して、いよく憐を催しながらも、俯の決心を動かす事が出来なかつたと同様、今は娘の覺悟をどうする事も出来ないと見ると、吐息と共に暗涙を呑んで、

「さうかへ。……それではお前は快よく牧山さんと結婚するとおいひなのだね。」

「はい。」

「それなら私達も安心だが……。」と、鼻をつまらせて「牧山さんの方でもさう返事をしてあげたらどんなにか喜ぶことだらう。……さうすると、今度は結婚の日取だが、それもお前、いつでも異存がないのかへ。」

「はい。」と、俯むいたが、その顛ひを帯んだ襟足から、恐ろしい煩悶が、全身に浸透つて行くやうに見えた。

梅野は涙を湛へた眼で、娘の様子を見て居たが、

「先方では返事をしてやれば、明日にも式を擧げてほしいやうに云つてくるかも知れない。……併しこちらではお前の仕度もまだ整つては居ないのだし、かたゞ延ばせるだけは延ばしたいと思ふのだが……。」

雪路は黙つて俯むいて居るのである。

「ではお前、もう用はないが、……併し牧山さんへの返事は、兎も角四五日過ぎてからの事にするか、お前もそのつもりで……。」と、梅野はなほ再考の餘地を與へるつもりで云つた。

雪路は何とも云はず、會釋して母の前を退ぞいた。

彼女は人に顔を見られるのを避けるやうに、急ぎ足に二階の自分の居室へ歸ると、今までこらへいらへてゐた涙の堰が、一時に破れたやうに、机に身を投げかけさま、聲を忍んで泣伏して了つた。

雪路の立去つた後、梅野がひとり、物思ひにくれて居るところへ、女中が道子刀自の訪問を知らし

て來た。梅野はいゝ折だと思ふので、早速自分の居間へ招じ入れると、

「御隠居様、いゝところへおいで下さいました。今日は後程またお尋ねしようと思つて居つたところでございます。」

「さうですか。それは丁度いゝ折にお尋ねいたしました、いづれ昨日のお話の事で……？」

「はい、さうでございますよ。まづお茶でも差上げましてから……。」

すぐ茶菓が運ばれて、梅雨の近づいて來た話、開放された中庭の、雨を帯びた柘榴の花、袖垣の根じめにしほらしく咲く未央柳、そんなものがつなぎの話題に上つた後、刀自の方から、

「それでは雪路さんのお心をお聞きになつたのでございますか。私も氣になるものですから、雨の小降になつたを幸ひ、あがつたのですが……。」

「はい、それもたつた今の事でございますよ。」と、濡りがちにいふ梅野の言葉に、刀自はまづ心を傷める風情で、

「それで雪路さんは……？」

「牧山さんと結婚すると申しますので……。」

「さうでございますか。」と、刀自はほつとしたやうに云つたが、併しその顔は決して晴やかにはなら

なかつた。

「實は高宮さんも雨で家に居らつしやるものですから、先刻雪路の胸を聞く前に、お呼び申しましていろ／＼お考へを伺つて見たのでございます。」

「それでは雪路さんの事も打明けになりました……？」

「それとお打明けは申しませんけれども、お心には通じたのだらうと思ひますが……私は何よりも高宮さんがお見上げ申したお立派な考へを持つて居らつしやるには、ほんとに感心したのでございますよ。」

さう冒頭をして梅野は雪路の愛をそれとなく打明けて、判断を求めたに對し、脩の答辯の次第を語り聞かせるのである。

刀自は聞き終ると、左もこそと首肯いて、

「さうでございませう。脩さんの考へは私の想像して居つた通りでございませう。それで脩さんは結局牧山さんの方をお極めになるやう、お勧めした事かとも存じますが……。」

「はい、牧山さんの事についても、いろ／＼仰しやつて下さいました。あの方が牧山さんをその通りに御覽になつて居らつしやるかどうかは分りませんが、仰しやることには一々道理のあることとござい

ます。なるほど牧山さんを物足らなく思ふのは、限りのないこちらの慾目のためかとも思ふのでござい

ますが……。」

「脩さんは牧山さんの事をどう申して居りました？」
梅野はそこでまた脩が牧山のために辯護して語つた一伍二什を語り聞かせた。
刀自は一々首肯いて、

「私も牧山さんはその通りの方だと思つて居ります。決して御不足に思召すところはございませぬ。雪路さんを大事になさる事は請合ですから、それが雪路さんのお仕合せのために何よりでございませぬ。雪路さんが御得心といふ事なら、いよくお極めになつた方がよろしいかと存じます。……それでは雪路さんも、脩さんの方は、綺麗にお断念になつて居らつしやるのでございませぬね。」

「はい。」と、梅野は溜息を吐いて「雪路はもう牧山さんと結婚する決心を極めて居たのでございませぬ。……實はね、御隠居様、最初高宮さんのお考へを伺つた時、私が雪路は女の事で、逆もあなたのやうな決心を持つ事は出来まいから、それが氣が、りだと申上げて見ますと、高宮さんは、その心配には及ばない、雪路にも確かにその覺悟があるに違ひないと、何だか娘の心を見ぬいたやうに仰しやるのでございませぬ。私はそんな筈はないと思ひながら、娘を呼んで聞いて見ますと、その返事なの

でございませう。……ですからこれは高宮さんが、娘の心をお察しになつたところから、御自分の御決心を、それとなく娘にお知らせになつて居たものだらうと存じます。娘の方では高宮さんのお考へが分つたものですから、高宮さんをお断念めするため、煩悶を續けて居たのだらうと、始めて様子が分つたやうに思はれるのでございませうよ。」

刀自は深い吐息と共に、

「なるほどさうかも知れませんがございませうね。……でも雪路さんがほんとによくね。……」

「それは感心によく断念してくれたのでございませう。そしてその決心も随分固い様に思はれます。一度かうと決心した事は、押通す性分でもございませうから……。併し御隠居様、私は娘にさうして断念めさせて了ふのが、不憫でならないばかりでなく、高宮さんのお立派なお考へを伺つてから、私の方がますます高宮さんに未練が出たのでございませうよ。」と、淋しく笑つて「昨日あなたから、萬一の場合に、雪路を出す事は、出来ないものかとのお話のありました時、私の一存ではお返事の出来ない事でもありましたし、父を得心させる見込も、まアないやうに思つたものですから、逆も望のないものやうにお返事申上げましたが、だんく考へて見ました上、もし高宮さんが娘をお貰ひ下すつた上、千秋の成人するまで屋敷に居て下さる事が出来るなら、父も納得するだらうかとも存じまして、……」

尤も高宮さんが、そんな條件で娘をお貰ひ下さるかどうかも分りませんが、それはあなたにお縋り申すとして……兎も角こんな御相談が、もし出来る事なら娘に取つても、私達に取つても、こんな仕合せはあるまいと考へたものですから、それとなく娘に仄めかして見たのでございませう。」

刀自は膝を進めながら、

「それで雪路さんは？」

梅野は顔を曇らせて、

「併し娘は少しも私の心を汲んでくれませんので。……今更そんな未練がましい事は出来ない——と勝氣な娘ですから、さうした意地もございませう。深い決心をして居ると見えまして、牧山家の方へすぐに返事をして貰ひたいと申すのでございませう。全く途方に暮れて居りますので……。御隠居様、何とか致し方のないものでございませうか。」

「さうでございませうか。併し雪路さんの御決心は、ほんとに見上げたものでございませうね。」と、刀自は眼を瞬いたが、氣の毒さうに梅野を見て、「ですけども梅野さん、雪路さんがそれほどお立派な決心をなすつて居らつしやるなら、この上他から雪路さんのお心を動かすやうな事はどうかと思ひますよ。」

梅野は内心に刀自から、モ一度雪路に諭して貰はうと思つて居たのであつたが、刀自にさう云はれて見ると、もうどうする事も出来ないと思ふので、またしても吐息と共に、

「それでは牧山家に返事をしたものでございませうかね。」

「さうなすつては如何でございます。」

「はい……。」

暫く言葉の途絶えて居た後、

「それでは御隠居様、あなたからどうぞ高宮さんに、娘が決心して居ります事を、お傳へを願ひたうございます。」

「はい……。では歸りに寄りまして、申傳へますでございます。脩さんもどんなにか安心をいたしませう。」

刀自はなほ暫らく雪路の事で、話を雑へた後、母家を辭すると脩の事務室を尋ねた。

脩は刀自の姿を見た刹那に、刀自もきつと雪路の事で来たのだと思つた。ひよつとしたら梅野から何か頼まれて来たのかも知れないと疑つた。併し刀自が養子問題で、自分に勧めに来る筈はないと思ふと、その點は安心であつたが、何かしら不安な心持が、彼の胸には湧くのであつた。

「今まで梅野さんのところでお話をして居たのですが、今朝はあなたに梅野さんから、雪路さんのお話があつたさうですね。」

「はい、突然のお話で少々當惑いたしました。」

「さうでせう。……脩さん、實はね、昨日宅へ梅野さんが見えて、そのお話があつたのですよ。梅野さんはあなたが欲しくて仕様がななのです。」

脩は一十顔を赤めて、

「私に取つては非常に光榮ですが致し方がありません。……伯母さんは、昨日奥さんに何と仰しやつたのです。」

「それは……高宮さんは事情があつて、是非とも自分の家を立てなければならぬ人ださうですから、聞合はせて見るまでもなく難かしからうと申上げて置いたのですよ。」

「その事情といふのを仰しやりはしないでせうね。」

「それは云ひませんとも……。」と、刀自はいつかは脩に打明けやうと思ひながらも、今日はまだその機會でないと思ふので、飽までも偽つて了ふのであつた。

「さうですが、難有う存じます。……それで結局私の事は斷念して下すつたんでございませうね。」

「あなたを養子にするといふ事はもう望のないものと、すっかり断念して居らつしやいますがね、…併し養子の方を断念はしても、あなたなら雪路さんを出してもいゝと思つて居らつしやるのです。」
脩はハツと驚きながら、

「では雪路さんを廢嫡して、私に下さらうとまで思召して居らつしやるんですか。」

「えゝ、さうなのですよ。尤もさうすると、後が困るから千秋さんの成人するまで一緒に居てくれるならといふ條件ですがね。…併し脩さん、私はそのお使ひに來たのではありませんよ。そしてそれはもう濟んだ事のお話をするのですから…。」

脩は合點が行かぬやうに、

「濟んだと仰しやいますのは…。」

「雪路さんが牧山さんと結婚を承諾なすつたさうですから…。」

「え？ それでは雪路さんは承諾なすつたんですか。」

脩の奇しく輝やいた眼には、遠がに涙が點ぜられた。そして何とも知れぬ感慨が、胸に迫つて來るらしく、彼はすぐ首垂れて了つた。

刀自も脩の心を想ひやるやうに、暫らく無言で脩の方を見て居た。

「それでもう問題はない譯ですが、併し雪路さんの覺悟があんまりいぢらしいのと、梅野さんがあなたを思ひ切れぬとから、雪路さんに向つて、何もお前に愛のない結婚を強ひて、家のため犠牲になれといふのではない、お前の幸福になる事なら、お前を外へ出してもいゝのだと云つて、それとなく雪路さんの氣を引いて見たさうです。」

「併し雪路さんはそんな提議には耳も貸さなかつたでせう。」

刀自はやゝ驚き顔に脩を見つめたが、

「さうなのです。梅野さんは少しも自分の心を汲んでくれないと、愚痴を云つて居らつしやいました。併しあなたはどうして…。」

「私には雪路さんの心がよく分つて居ます。」

刀自は脩がどういふ意味で云つたかは無論知らない。たゞ梅野が云つたやうに、脩が何かの機會に、決心を雪路に知らしたので、雪路も自分の覺悟を脩に通じたものと、推測するのであつた。

「併し雪路さんがそれほど立派な覺悟をして居るだけに梅野さんにして見ると、なほ更不憚が増すのでせう。それで雪路さんがその氣でも、どうかなるものなら、雪路さんの思ひも逐けさせし、御自分にも未練があるしで、モ一度私にあなたと雪路さんの中に立つてほしいやうな口振なのです。私にはそ

れはよく分つてましたけれども、第一あなたのお考へもよく確かめた上の事でない、うつかりした挨拶は出来ないものですから、雪路さんがそれほど美しい決心を持つて居らつしやるなら、他からそれを動かすやうな事をなさるのはよくあるまいと、あなたの事は肩よく断念するやう、それとなく申上ては来たのですよ。……それでこれは念のため私だけが伺つて置くのですがね、あなたが雪路さんを貰つてあけるといふ事はどうでせうね。三春家がどんな財産家であらうと、取極次第では、何もあなたの良心に恥ぢるには及ばない事だと、私は思ひますが……。」

脩はさすがに怪しい胸騒ぎを覚えながら、

「併し雪路さんがそれほど立派な決心をなすつて居らつしやるなら、今更そんな御詮議をなさる必要はない事ではありませんか。」

「ですがさうして雪路さんを救つてあける事が出来たら、それに越す事はありませんからね。雪路さんはそんなにまであなたを戀して居らつしやるのですもの、あなたつてたゞあなたの立場ばかり考へて、雪路さんはどうなつてもいゝといふ譯にはいけないでせう。」

「それは勿論です。併し雪路さんは決して私とは結婚なさいません。……此際雪路さんの靈を救つてあけるといふ事は、雪路さんの美しいその御決心を實行させるといふ外にはないと存じます。私が富

豪の娘と結婚するといふ事は、必ずしも良心には恥ぢなくとも、私の信條には反きます。今更私にその信條を踏躰らせ、そして折角の雪路さんの決心を翻させやうとなさる必要が、どこにあるのでございませう。」

刀自は嘆息しながら、

「あなたの決心がそれまで固いのなら致し方ありません。私もさうとは思ひましたが、……梅野さんのお心の中もお氣の毒なり、もし出来る事ならと思つて、伺つて見たのです。尤もそのつもりで梅野さんの方には、止めを刺して来たのですから、別に梅野さんに、重ねてあなたの決心を傳へる必要はありません。……梅野さんからは、たゞあなたに娘の決心をお傳へして置いてくれとお言傳だけなのですから……決して私があなたにお勧めしに上つたとは思つてらつしやらないのです。あなたもどうかそのおつもりで……。」

「はい、承知いたしました。……併しいろいろ御心配をかけて恐縮でございませう。」

「……それでは雪路さんもいよく……。」と、刀自は自然に眼頭に潤む涙を指先で押へた。

「……運命がお極りになつたのですね。」と、脩が暗然として加へた。
彼の心には限りのない淋しさが湧くのであつた。

約婚

それより二三日過ぎての事である。

梅野の心はまだ迷つて居るので、牧山家へは何の使者も出さないばかりか、雪路の承諾した事を、まだ専造にも老婦人にも、話さずに居たのである。併し雪路が少しも反省しきような様子を見せないで、心を傷めながら、ぐづくの中に二三日が過ぎて了つたのであつた。

一巡小作めぐりも済した脩は、その日調べものをしながら、事務室に居たので、三時の八ツ茶の迎ひを受けた。

脩はその後梅野から何の話も聞かないので、牧山家へ承諾の返事が行つたものかどうかは知らなかつたが、それはもう彼にはどうでもよい問題に過ぎなかつた。

洋館の室へ来て見ると、雪路も艶子も降りて来て居たばかりでなく、今日は道子刀自までが来合はせて居た。千秋も學校から歸つて来て居たので、このごろに珍らしい位皆が揃つて居た。千秋は脩が来たのを見ると、誰よりも喜びながら、すぐ自分の椅子を、脩の傍へ持つて行つて坐つた。

「千いちやんは一番高宮さんが好きなのだね。お嫁になるといふ。」などと、老婦人に冷かされて、千秋は顔を赤くしたが、それでも脩の傍を離れやうとはしなかつた。

千秋を中心とした罪のない對話が、老婦人、道子刀自、梅野等の間に交された。客室の中に、何等の險惡な雰囲気はなかつた。

艶子は相變らず、冷笑するやうな眼で脩を見るが、それで居てちよいと脩に話しかけた。雪路の方はその後人前を繕ふだけの口は利くが、自分から脩に話しかける事は、滅多になかつたので、今日も雪路は黙まりで居た。併し脩は雪路の眼に宿つて居る敵愾心を明かに感じた。それはこのごろ雪路のさうした風の眼光には出あひなれて居ながら、今日は特別にそれを強く感じたのである。

脩の心は遠に暗くなつたが、併しそれを忍ぶ事を、自分の義務なのだと思へると、格別神経を悩ますまでには至らないのであつた。彼は雪路等とはなるべく離れたところに席を占めたので、そこで千秋と並びながら、多くは千秋を相手に語つて、雪路の視線を避けて居た。

艶子と雪路と、千秋と脩と、残る三人の婦人達と、おのづから三ツの集團が出来た形で、兎も角對話が滑らかに運ばれて居る時、女中に案内されて入つて来たのは嘉三郎であつた。

嘉三郎は扉のところで、一同に會釋した上、今度は梅野等三人の前へ来て、叮嚀に挨拶するのであ

る。

雪路の顔は、嘉三郎の姿を認めた刹那に、異様の緊張を示したが、忽ち發作的に何かの考へが閃いたらしく、嘉三郎が母親達に挨拶を済したのを見ると、つと立上つて、

「牧山さん！」と、呼んでその前に進んで行つた。

雪路の調子に變つた鋭さがあつたので、一同の視線が雪路の上に注がれた。

雪路の眼には光が點ぜられて、頬には亢奮したやうに赤味が上つて居るのである。

嘉三郎は喫驚したやうに、雪路を見つめた。

雪路は女王のやうな矜を以て、

「私、あなたにお返事しますよ。朱雀野の伯母さんや、みなさんの居らつしやる前で甲上げます。私、あなたと結婚します。——それが私のお返事なのよ。……い、でせう、お母さん。」と、勝誇つたやうに母を見返つた。

一同は雪路のこの思ひ設けぬ宣言に、呆氣に取られた。

嘉三郎はわが耳を信ぜぬやうに、茫然として雪路を見つめたまゝ、頓には言葉も出ないのである。梅野の顔色はその刹那に蒼ざめて了つた。

艶子も老婦人も、全く意想外だつたので、呆れたやうに雪路を見つめた。

刀自も追がに驚きの眼を睜つた。

ひとりそれを必然の事柄のやうに、顔の筋一ツ崩さず、泰然として見て居るのは脩であつた。それほどに彼の心はもう練れて居た。

嘉三郎はそれが稠人廣座の中なので面くらひながら、

「それでは雪路さん、……あなたはあの……結婚の御承諾を……？」と、顔を赤くして口籠りがちに云つた。

「え、さうよ。」と、雪路は嬌羞だも帯びず、昂然として云つたが、彼女の頬には最早亢奮のための赤味は失せて、舊の蒼白さに返つて居た。

驚愕から恢復した艶子は、雪路に惹きつけられた視線を、すぐ脩に移して、左も痛快らしく、皮肉な微笑を湛へて彼を見たが、脩の極めて冷靜な、自若とした様子を見ると勝手が違つたやうに、妙な顔をした。

雪路にどういふ複雑な心理作用が働いて、わざと人々の前で、彼女自ら承諾を與へたかを、疑つて見やうともせぬ嘉三郎は、たゞ何とも知れぬ嬉しさに包まれて了つたらしく、殆んど舉措を失するば

かりに、

「雪路さん、感謝します！……感謝します！」と、雪路の前で二三度頭を下けながら、その感謝の眼を、雪路から母親の方に轉すると、

「奥さん、お禮を申し上げます。」と、今度は梅野に、引きつゝいて二人の老婦人に、お辭儀をするのである。

もうすべては定まつて了つた。此上は是非がないと観念したらしい梅野は、嘉三郎に向つて、
「いづれ日を見て、こちらから使者を上げやうと思つて居つたところですよ。どうぞ此上は何分ともに……。」と、沈んだ調子で云つた。

嘉三郎はそは／＼四邊を見廻すと、忽ち脩と顔を合はしたが、もう誰の顔を見ても嬉しいやうな笑顔を向けて、脩にも會釋した。脩は立上つて彼の前に一歩進みよると、これまた満面に微笑を湛へながら、

「牧山さん、お喜び申上ます。お二人の將來の御幸福を、心よりお祈り申上ます。」

脩は明晰な調子と、悠揚迫らぬ見事な態度でそれをいふのである。

勝誇つた冷たい微笑を口元に漂よはせながら、この時始めて脩を見た雪路は、一個聖者の如き、犯

し難い強い人格をそこに見せて、心から嘉三郎を祝福して居るらしい、脩の思ひ設けぬ凛とした姿を見ると、解く事の出来ぬ謎に出會つたやうに、口元の冷たい微笑が、その瞬間跡もなく消えて了つた。

彼女は恐ろしい壓迫を感じたやうに、ふら／＼とよろめいたが、辛く足元を踏みしめると、傍の椅子に腰を落して了つた。

少しも雪路の様子に心づかぬ嘉三郎は、脩に祝辭を述べられると、他愛もなく手を伸ばして、強い握手を與へながら、

「いや、有難う！……よく云つて下すつた。君とはいつまでも友人ですよ。」

「どうかよろしく……。」と、脩は笑ひながら、その手を握り返した。

眉を擧めながら、嘉三郎のそは／＼した様子を眺めて居た艶子は、嫉妬も手傳ふらしく、時々唇を嚙みしめて、腹立しげに、また齒痒さうに彼を睨るのであつた。同時に彼女は脩に對しては、怒を雜へた驚異の眼を睜るので、彼女にも脩の態度は不可解であるに違ひなかつた。

嘉三郎が脩の前を離れると、

「牧山さん！」と、艶子は呼びかけて、眼は咎めるやうに、口元には皮肉な微笑を湛へて「お目度う

「ございます。」

「いや、中村さん、難有う……。」と、何か眼顔で宥めるやうな様子をして、すぐ艶子を避けると、千秋をそこに見出したので、

「お、千秋さん、あなたとも握手しませう。」

さう云つてひッ込める千秋の手を無理に握つた。

「あは、、、、難有う……。」と、彼は全く嬉しさを包むに餘る風情である。

その有様を苦々しげに見て居た梅野は、刀自と顔を見合せて、私かに溜息を吐くのであつた。

雪路は堪へられないやうに、つと立上ると、彼女の避難場であるピアノの前へ行つて了つた。……と見ると艶子もその後を追つて行つた。

「高宮さん。」と、千秋は小聲に云つて脩を見上ると、「姉さん、牧山さんのお嫁さんになるの？」

さも不平らしく囁やく千秋の顔を見ると、脩は俄かに暗い心を誘はれたが、何氣なく、

「さうです。」と、笑つて首肯いて見せた。

嘉三郎は雪路の後を追はうとするやうに見送つたが、追に極りが悪さうに差控へて、椅子を引きよせると、残つた人達の間を腰を落ちつけた。

「牧山さん。」と、刀自は彼を呼びかけて優しく、「どうぞ雪路さんを幸福にしてあげて下さい。これは私から特別にお願いして置くのです、私には孫のやうに可愛い人なのですから……。」

「それは私の願も同じ事ですよ。」と、大叔母なる老婦人もいつた。

「はい、それは申すまでもございませぬ。誓つて雪路さんの幸福のために努力いたします。どうぞ御心配遊ばさないやうに……また、私からも不束ものながら、末長くお見捨下さいませぬやう、皆様にお願い申します。」と、嘉三郎は殊勝らしく云つて、また頭を下けた。

「それでは嘉三郎さん、お話いたして置きたい事もありますから、後程どうぞ……。」

かう云つたのは主婦の梅野である。

「は、いつでも……。」と、嘉三郎は最後のお辭儀をした。

それから妙に氣乗りのしない對話が、人々の間に交され始めた。極めて目出度い陽氣であるべき客室の空氣が沈み勝になるのは不思議のやうであつた。もう雪路と嘉三郎の約婚については、何の話も出ないので、嘉三郎にはそれが不足なのであつたが、遺に自分からは切出し兼ねるのであつた。脩だけが勉めてよく口を利いた。彼の公明な態度は、この度こそ老婦人をも納得させたやうに見えた。

併し脩は例の通り人々より早く、客室を辭して、自分の事務室へ歸つて來た。

事務室の椅子に凭れたま、彼は先刻の劇的光景を靜かに思ひ繞らして見た。それは彼には分り過ぎるほど分つた事で、今更驚くべき事でも何でもなかつた。自分がよくその光景に對して、平然として居られた事にも、彼の自負心は満足された。併しいよく雪路の運命が決して了つたのだと思ふと、追に何とも知れぬ暗い氣持に襲はれるのである。この上どんな事にも堪へられるといふ確信は出来ながら、決して二人の約婚に無關心では居られなかつた。それは強ち自分のためではない。本心には結婚を自から決した、雪路の運命の悲惨を思ふと、そこに安んじられない何ものかあつたのである。脩はさうした傷ましい心を抱いて、何をすることもなく三十分を過したが、突然嘉三郎の訪問によつて驚ろかされた。

「お邪魔ではありませんか。」と、彼は玄關の玻璃戸を開けて、その三和土の應接室へ、機嫌のよい顔を見せて入つて來たのである。

「いゝ、え少しも……。」と、脩は自分もその三和土の室へ降りて行つて、「さア、どうぞおかけ下さい、粗末な椅子ですが……。」

二人は卓子を隔て、相對して座を占めた。

「實は今奥さんにお目にか、つて來たのですが、だんぐお話がありました……君が大變僕を推奨し

て下さつて、それで奥さんのお考へも極つたといふ事を伺つたものですから、お禮かたぐ上つたのですよ。」

脩はそれが梅野の、周到な用意の下に話されたのだと思ふと、決してわるい氣持はしなかつたが、何だかくすぐつたいやうな氣がしながら、

「いゝ、え、それは私から申上げたゝめに、どうかのといふ事はないに極つてますが、……それは奥さんはあなたを私が推奨したやうに仰しやつたのですか。」

「さうです、朱雀野の御隠居にも君がその通りに云つて下さつたさうで……それが間接に雪路さんを動かしたのだと、奥さんのお詞でした。實に感謝します。……どうか僕達が結婚しても、君には長く留まつて居て頂きたいもので、それは僕の最も希望するところですから、その點を承知して居て頂きたいのですよ。」と、大いに好意を見せやうとするのである。

脩はそんな事はどうでもいゝと思つたが、機嫌よく、

「いや、難有う……私も御不用に出来ない限り、當分まだ御厄介になつて居るつもりですから……。」
 「僕としては事業の方は、一切君に一任するつもりなのですよ。どうぞよろしく……。」と、主客轉倒したやうに彼は叩頭するのである。

「それで御結婚はいつごろになる御豫定なのでせう？」と、脩は何気なく尋ねて見た。
 「それはいづれ相談を要する事ですが、奥さんはこの秋にしたいといふ御希望を持つておいでのやうでした。僕としては一日でも早い方がいゝですが……」

「牧山さん、これはいらん事を申上るやうですが、私はお嬢さんの御幸福といふ事を、心より祈つて居る一人なのです。朱雀野の御隠居様もあなたに御希望なされたやうでしたが、私もどうかあなたがお嬢さんの幸福といふ事を、一日もお忘れなく結婚生活にお入りになる事をお願いいたしたいのです。特にこれをあなたに申上ります。」と、脩は極めて真剣な調子で云つた。

嘉三郎は無造作に首肯しながら、

「いや、よく云つてくれた。それは心配し玉ふな。」と、心易けな調子を雜へて、「僕だつてきつと雪路さんを幸福にしますよ。雪路さんを幸福にする事は、つまり僕を幸福にする事なんですからね。むづかしい事でも何でもありませんよ。」

「それは無論さうなければなりません。併しあなたの幸福は、必ずしもお嬢さんの幸福と一致しない場合があります。私はお嬢さんの幸福と一致しないあなたの幸福は、断然排斥して頂きたいと申上るのです。」と、意味ありけに云つた。

嘉三郎は驚き顔に、また脩の眞意を知らうとするやうに、

「……といふのは？」

「別に説明を申上けずともお分りになりませう。夫婦は全人格の結合である以上、あなたのみの眞の幸福といふものがあるべき筈はないのです。あなたの幸福は、奥さんの幸福でなければなりません。それは當然不可分のものであつて、始めてお二人の眞の幸福が成立つのです。……併し私はあなたが幸福といふ事を、もつと軽い意味に取つて居らつしやるやうですから、假にさう申上たのです。眞の幸福といふものは、眞實の愛と、それを培つて行く眞面目な努力なしには、さう容易く得られるものではないと存じます。」

「いや分つた。」と首肯いて、「君のいふ事は、つまり僕が妻に眞實の愛を濺げばいゝといふ事になるでせう。ね、君、さうだらう。」

「さうです。簡潔に申上ければ、眞實の愛を奥さんに濺いで頂きたいのです。」

「君、大丈夫……。そりやアね、僕も随分遊びましたよ、現在でも……」と、うつかり口を滑らして氣づいたやうに、「あはゝゝ、現在は潔白なもんですが、併しわれは現代人ですからね、清教徒のやうな偽善的生活は出来ませんよ。併し妻に對する愛はどこまでも眞實です、彼と是と決して混同するや

うな事はしません。」

脩は答めるやうに嘉三郎を見て、

「牧山さん、私は決してあなたの過去を咎めやうとはしません。併しあなたは夫婦間の眞實の愛といふものは、性的に雙方が純潔である場合にのみ生れる、美しい情操であるといふ事をお考へになりませんか。」

「いや、それは分つてますよ、理論としては如何にもその通り……、また僕にしても雪路さんを妻にする事の出来る以上、もう決して浮氣なんかしません。……併し君のいふやうな、上下をつけ合つたやうな夫婦關係といふものが、さうあるべきものぢやアない、現在米國あたりだつて、表面の夫婦關係は實に立派だけれど、内へ廻つて見ると、お座のさめた話で、それでも彼等はそれ〴〵幸福に暮して居るのですからね。……併しそれは例に取つて見たゞけで、僕が無論さういふ生活をしようといふのぢやアないですよ。」と、何もかも心得たやうな調子で云つた。

脩は眉を顰めながら、極めて嚴肅な口調で、

「勿論それは以ての外の虚偽な生活です。さういふ生活の、お手本にならない事は、いふまでもありません。……牧山さん、私はこの機會において重ねて申上ります。もしあなたが雪路さんの眞實の幸福

を、脅やかすやうな行爲をなされば、私は決してあなたの味方ではありません。それだけを御記憶なすつて下さい。」

嘉三郎は始めて傷むられたやうに脩を見た。併し深くは意に介しない様子で、

「いや、君がさう云つてくれるのも要するに好意からだ。大丈夫。……いや覚えて居ますよ。」

さう云つて彼は脩に握手を與へて事務室を出た。

嘉三郎の後姿を見送つた脩の口からは溜息が漏れた。彼は始めから嘉三郎を、小さな、平凡な男だと思つて居た事ではあるが、今日は少しでも見直すことか、ます〴〵その小さなところが裏書されて行くやうな氣がするので、失望と共に、彼を薦めた自分の責任をさへ感ずるのである。客室で見苦しいほどそはついて居た事や、自分が好意の助言を梅野にしたからと云つて、それを喜んで訪問して來る軽々しさなどを思ふと、雪路のため涙の出るやうな情なさを感じるのだ。わけても彼の戀愛に對する觀念の不眞面目さと、その輕薄な口振とには、何とも知れぬ不快を禁じ得ないので、殊に結婚そのものに對して、何等の内省も、敬虔の念も持つて居ない、無自覺、無抱負な彼の態度は、殆ど脩を憤慨せしめずには置かなかつたのである。

脩はもつと前に、今知つただけの事を知る事が出來たら、梅野にあゝまで牧山を推薦する筈ではな

かつたと悔んだ。もし雪路の結婚生活に破綻を生じた場合、自分は梅野に對して、決して責任がないとは云へぬ。既に牧山の人格に不信であり、不安を感じて居りながら、強ひてそれに目を塞いで、彼を推奨した自分は、その實一個の卑怯ものでなくて何であらう。なぜ牧山が不似合の縁であると云切つて、この結婚の不成立に勉めなかつたらう？——とさへ思つた。併し今はすべてが後の祭である。この上はたゞ雪路の幸福のために、嘉三郎を監視し、誠意を以て彼を動かす外はない。それが自分の三春家に對する責務であると思ふのである。

その日の晚餐の席上、雪路はいつになくはしやいで居た。併しそれは決して満足のためとは思はれなかつた。客室では千秋にワルツを弾かせて、艶子を促しながら、舞踏の真似を始めた。尤も雪路が舞踏を始めたと云つて、それは別段不思議な事ではなかつた。なぜなら脩はこれまで艶子が舞踏を教へると云つて、雪路を手引した事があるのを、一三度見て居たからである。……が雪路が今夜そんな事をするのは、特に彼の前で自己を欺むかうとする、自暴自棄に類した心理状態の表れであると、脩は見ぬいて暗涙を催すのである。

梅野も娘の心を知つたらしく、時々脩に同情を求めらうな眸子を投げた。それは娘のさうした心を憐れんでくれ、自分の力ではもうどうする事も出来ないといふやうに見えた。

千秋のワルツが間違つたり、何かするので、舞踏は巧く調子が取れなかつた。

「高宮さんに弾いて貰つたらいいわ。」と、艶子が意地わるい眼で云つた。

「高宮さんに弾いて頂きなさい！」と、雪路は脩の方は見ず、千秋にだけ焦立しさに云つた。

それは脩に對する侮辱であつた。少くも侮辱の意志でなされたのである。

併し脩は黙つて素直に千秋に代ると、ワルツを弾初めた。

雪路は艶子を引きするやうにして、亢奮的にまた踊り出した。

解き得ぬ謎

一兩日過ぎての八ツ茶の時である。脩が客室へ行つて見ると、そこには艶子と雪路だけが居て、外
 のものはまだ誰も見えなかつた。

脩が軽く二人の前で會釋すると、雪路の眼にはすぐ敵意が閃めいた。と見ると、

「高宮さん、あなたはまだ私にお祝ひも何にも仰しやらないのね。」

それは疑もなく脩に對する挑戦であつた。雪路は自分が嘉三郎に承諾を與へて以來、脩の表情に豫
 期したやうな失望の容子はおろか、怨若くは怒——さうした感情の片鱗さへも表はれず、全く痛痒相
 感ぜぬやうな態度を取て居るばかりか、時に憐れむやうな眼で彼女を見る事が、自分を勝利者だと考
 へやうとする雪路を、絶えず焦々させて居るのである。脩のそれ以來却つてますます打上つて見える
 氣品、悠揚迫らぬ態度、その男らしさ、強い人格——それは胸苦しいまでに彼女を壓迫するのであ
 る。それから逃れやうと藻掻く彼女は、如何に自分が勝利者であると考へて見ても、どうする事も出
 來ない口惜しさが、ひし／＼と胸元に込みあけて來るのである。

彼女のかうした挑戦は、彼女自らの弱さを糊塗しやうとする、劣敗者の自慰に過ぎなかつた。

脩は沈着いた調子で、

「私はお祝を申上げたいと存じて居りました。併しあなたは私にその機會をお與へ下さいません。そ
 の上私の一舉一動は、あなたの感情を刺戟するもの、やうに想像いたして居りました。それ故お祝を
 申上る事を、差控へて居りましたので……。」

脩は沈着いて答へるほど、雪路はなほ感情を害されるやうに、

「それは心にもないお祝の言葉は、あなたのお口から出にくいからでせう。」と、咎めるやうに見た彼
 女の眼には涙が光つた。

「お嬢さん、あなたはなぜ私にそんな残酷な事を仰しやるのです。」

「でもあなたは牧山さんと私の婚約に満足しては居らつしやらないでせう。あなたが男なら、正直に
 答へて下さい。」

脩は同じ態度同じ調子で靜かに、——そしてそれは同時に決して冷たくも、態とらしくも聞えぬ自
 然の調子で、

「私は衷心よりあなたの幸福を祈つて居ります。それはお嬢さんに對して、いつでも變らぬ私の感情

でございます。あなたの幸福であるべき御結婚に、私の満足せぬ道理がどうしてございませう。」
 「ぢやア牧山さんと結婚すれば、私が幸福だと思つて居らつしやるの？」と、自ら嘲るやうな笑を口元に漂はして云つた。

「私はさういふ信念の下にお祝ひ申上るのです。」

「嘘よ、嘘よ、あなたは幸福だと思つてはしないわ！」と、雪路は腹立しさうに亢奮して云つた。
 脩は悲しげに雪路を見て、

「お嬢さん、あなたがさう仰しやるならば、……またお心に觸るかも知れませんが、幸福だとの確信は持つて居ないと申上げませう。併し當然幸福であり得る事だと信じて居ります。結婚はいづれにしても、そこに多少の冒険性がございます。私はあなたの幸福の鍵は、たゞあなたのお心一つにある事だと信じます。そしてあなたの御幸福を切にお祈り申上ります。」と、やゝ謎めいて云つた。

——あなたなどに祈つて貰はなくともい、——さう云はうとしたが、脩の男らしい威厳を持つた姿を見ると、氣後れして、口から出なくなつた。彼女はそのまま、黙つて、脩を見つめて居たが、なほ最後の挑戦を試みやうとして、

「高宮さん、お母さんはね、牧山さんより外に誰か心に描いて居た人があつたのよ。……その人には

お氣の毒様ね。」

雪路は残酷に脩の狼狽する姿を見やうとした。併し脩の顔にはさうした表情が、毛筋ほども表はれないばかりか、却つて憐れむやうに雪路を見つめると、重みのある調子で、

「併しその人は誤解されて居ります。……それも『時』が解決してくれるまで、何の辯明をも試みないでせう。」

今まで黙つてにくくしげに、脩を見て居た艶子が、その時横合から口を入れた。

「あなた、辯明なさる事があるなら、すぐ辯明なすつたらどうですの。辯明を避けるのは卑怯だわ。」
 脩は許すまいとするやうに、

「私が何の辯明をするのですか。辯明すべき正體がなくて、私に辯明しろと仰しやるのは、可笑しいぢやアありませんか。いや、その正體を知つて居るのは、全體どなたです？」と、鋭く彼女を見つめた。

艶子は慌てたやうに眼を落したが、すぐしらくしげに、

「それは私に分つてるでもなし、分らないでもなし……まア、存じませんと申して置きませうね。それがあなたのお爲でせうから……。」と、云捨てるやうにファイと窓際へ行つて了つて、庭の方を眺めた。

傷もつ足の彼女は、さうして脩の追撃を避けたのである。」

脩は腹立しげに彼女を見送つたが、そのまゝ思ひ返して苦笑しながら椅子についた。

その瞬間、艶子と脩の様子に目を離さなかつた雪路の脳に、或恐ろしい疑ひが稻妻のやうに閃めいた。併し彼女はすぐその『解き得ぬ謎』に強ひて盲目であらうとした。

そこへ梅野と老婦人が入つて来た。お茶の間雪路はひどく沈み勝であつた。

或日脩は道子刀自を訪問して歸つて来る田圃道で、太郎と雪路に出逢つた。太郎は脩の姿を認めると、いつもの通り遠くから駈けて来て、彼に飛びかゝるのである。

脩が立留まつて太郎に愛撫を與へて居るところへ、雪路は別段厭な顔もせず近づいて来ると、淋しく笑んで彼に會釋を與へた。

「御隠居様をお尋ねになるのですか」と、脩は尋ねた。

「えゝ」と、雪路は沈んで答へて、「あなたは今お歸りですか？」

「さうです、御隠居様は庭の草引をしていらつしやいましたので、暫らくお手傳ひをしてまゐりました。」

「まだ引いて居らつしやいますか？」

「もうお止めになつて居らつしやいます。」

「さう……では後程……。」

「行つて行らつしやいます。」

雪路の姿には、今日は惱ましさはあつても、少しも敵意の表示はなかつた。この二三日それは脩の經驗するところで、かの『解き得ぬ謎』に惱んで居る雪路の眼光を、破は明らかに感ずるのである。時には雪路が大膽に彼を凝視する事も少なくなかつたが、それは脩の心の奥に潜んで居る何ものかを掴まうとするためであるらしく見えた。辯明する事があるなら、なぜ辯明しない？——さういふ批難の眼光のやうにもそれは見えたし、また、脩の方で彼女の辯明を求めらるなら、その辯明もいつでも與へやう——さういふ風にさへも解釋が出来た。……けれども脩は、自から辯明もしなければ、雪路の辯明を求めやうともしなかつた。それは雪路を焦立せると共に、やつぱり後暗いところがあるのだと思ふ彼女の疑惑をも固執させた。さういふ時に、彼女は鋭どい、許すまいとする批難の眸子を脩に投げた。かうして脩を對象とする雪路の機嫌は、その時々によつて變つた。併し脩のいつも平然として、雪路の氣分に少しも左右されさうに見えぬ事が、少からず雪路の自負心を傷つけるのである。一方に

はそれがまた彼女自らの意志の如何に拘らず、ぐんぐん彼女を脩に惹きつけて行く結果にもなった。今日は彼女の心の表現は、いふまでもなく甚だ穩かであつた。それは彼女の眼光にも、脩との對話にも見えた通りで、刀自の家へ入るまで同じ気分であつた。

すぐ庭から入つて行くと、刀自はいつもの通り、喜び迎へながら、座敷の方へ招じ入れるのである。

「今脩さんに逢つたでせう。」

「え、そこで……。」と、雪路は靜かに答へた。

「あなたがいらつしやると知れば、脩さんを引留めて置くところでした。」

雪路はさう云はれても、別段いやな顔は見せなかつた。

「高宮さんは伯母さんの草引のお手傳をしたと云つてましたよ。」

「え、一時間ばかり手傳つて下すつたので、お庭が綺麗になつたでせう。このごろはいくら引いても、引く傍から生えるんですもの……生えずともいゝものは、どうしてこんなに生えるんでせうね。」

「伯母さん、草引なら、誰でも家からよこしますのに……。」

「いゝえ、運動に引くのですよ。これで草を引くのはなかく楽しみなものです。少しづつでも自分

の手で引かれて、それだけが綺麗になつて行くと思ふと、なか／＼止められないものですよ。」

「私なんか、そんな面倒くさい事いやだわ、すぐ厭になるわ。」と、云つたが、ふと刀自の傍に小形の西洋封筒の手紙があるのに、目を留めて、「それ、どなたからのお手紙ですか？ 何だか伯母さんに不似合だわ。」

「あ、これですか。」と、それを手に取上げて、「これは私へ來たのぢやアないのよ。脩さんへ來た東京の弟さんからの手紙なのよ。」

「あら！」と、雪路の眼は好奇心に輝いて、「どうして弟さんの手紙を、伯母さんのところへ持つてらしつたんですの？」

「今度來たら見せて下さいと頼んで置いたからですよ。」

「だつて高宮さんの弟さんの手紙を、伯母さんが御覽になつてどうなさるの？」

「たゞどんな事が書いてあるかと思つたからですわ。脩さんが弟思ひの通りに、弟さんもそれはほんとに兄さん思ひですよ。この中にも兄さんを思ひ出しながら、一生懸命勉強して居るといふ事が、可愛らしい筆で書いてあるのよ。」と、刀自はいつか涙ぐんで云つた。

「伯母さん拜見してもいゝ？」

「さア、御覽なさい。」

雪路が封筒を手に取上て見ると、高宮脩の宛名が書かれて裏面にはたゞ滋しげとだけ自分の名が記されてあつた。それは甘露寺かんろうじの姓を決して書いて来てはいけなないと、嚴重に言渡されてある通りを守つて居るのであつた。

雪路は手紙を拔出して、目を通して居たが、いつかそれに動かされて行くらしく、

「ほんとに感心かんしんだわね。……そしてよく書いてあるわ。千秋なんか、なか／＼かうは書けませんよ。」

「でも千秋さんは二ツも下でせう。」

「それはさうですけども……。」と、雪路はなほ読みつゞけて居たが、

「あら、伯母さん、夏休みに来てい、かと書いてあるでせう。」

「え、それで脩さんは、先刻さつぱそれを見せかた／＼、どう云つてやつたらよからうつて、相談に來たのですよ。」

「伯母さんはどう仰しやつて？」

「脩さんはあなたの思惑おもわくなどを心配して、來ないやうに云つてやらうかと仰しやるので、そんな遠慮えんりょに

は及ばないから、是非來るやうに云つておあけなさいと、勸めて置いたところすわ。」

「弟さんと呼ぶのに、なぜ私に氣兼ねがなするんですの？」と、雪路は面白くなさ／＼に云つた。

「それは自分が大變お世話になつて居る上、弟まで呼んではといふ遠慮えんりょからなのですよ。何にも氣にするにはあたらないでせう。」

「それは氣にはしませんけども……。ぢや、呼んでおあけなさるのね。」

「それではお母さんのお許可おかしを願つてから、呼ぶ事にするよと云つてましたよ。」

「七月の十日まで、お休みになるとありますね。ぢや、あと一月ひとつきとはありませんね。」

「さうね。……千秋さんは友達が出來て、どんなにか嬉しいでせう。」

「え、。」と、答へたが、雪路はふといひ知れぬ淋しさに打たれて首垂うたれて了つた。

落つる日

次の日の午後梅野は、こゝから二里足らずの片田舎に居る彼女の乳母が、軽い中風症にかつたといふ報せを受取つた。もう七十をニツ三ツ越した女で、それでも今までは若いものに雜つて、立働いて居たほどの達者ものであつたが、この二三日前、庭先で躓つたのが原因で、病氣が出たといふのである。別に心配になるほどの容體ではないが、序があつたので報せるといふのであつたけれども、梅野はその報せを受けると、すぐに尋ねてやりたくなつたので、その仕度に取りかゝつた。もうその時は三時間近であつたが、殆ど日永の頂上ではあるし、宵月もあるから、暮れて歸つても仔細あるまいと、出かける事にしたのである。

併し俵を雇ふには二十町も先の町のあるところまで行かねばならぬので、脩が始めて着いた時、重助が迎ひに來た例の馬車で、行かうとするのであつたが、生憎重助は日歸りの旅に出かけ、外の下男も使に出て居るので、出入のものを誰か頼みにやらうとして居るところへ來合した脩が、重助が留守なら、誰を頼まずとも、自分が駈者代りをしようと思出したので、梅野も喜んでその好意を容れる事になつた。

なつた。

すぐ馬車の用意も整ひ、梅野も乗込んだので、今出やうとするところへ、女中が駈出して來て、一寸待つてくれといふのである、それは雪路が出來心で、俄かに同行する事になつた、めであつた。

五六分待つて居ると、荒い立縮のセルの單衣に、古代更紗の羽二重の帯を締めた雪路が、雪駄穿きで蝙蝠傘を片手に急がはしく出て來た。

「お母さんい、でせう、私も行つて？」

「お前も見舞つてやつたら、どんなに喜ぶかも知れない。」

「高宮さん、御苦勞様」と、雪路は脩に會釋して馬車に乗ると、母親と並んで、そこに敷かれた薄い毛布の上に腰を下した。

馬車は靜かに門前を轆り出した。

梅野の乳母の里といふのは、脩には全く知らない土地ではあるが、もうこの邊の地理には、可なり精しくなつて居るので、馬車を進めるに大した不都合はなかつた。

馬車の上で梅野は、その乳母の里の事や、乳母の話を脩にして聞かせた。一通り説明が済むと、今度は雪路を相手に、乳母の思ひ出話などを語り出して居たが、その話のきれた頃雪路が脩を呼びか

けて、

「高宮さん、私、昨日あれから朱雀野の伯母さんのところで、あなたの弟さんのお手紙を拜見しましたよ。」

脩は一寸當惑したやうに、

「さうですか。あんなものを御覽になつたのですか。」

「え、大變よく書いてありましたわ。」と、母親を顧みて、「ほんとお上手よ。そりやアどんなに可愛い事が書いてあつたでせう。」

「さうかへ、高宮さんの弟さんなら、よくお書きなさるに極つてゐるわ。」と、母親が云つた。

「なアに、手紙にも何にもなつてはしないんですよ。私の外には誰にも見られないつもりで、話をする通りの事を書いて來たんですから……。」と、脩は謙遜の態度で口を挟んだ。

「ですから可愛いんぢやアありませんか。取繕つたり、何かしないで、思ふ通りを無邪氣に書いてらつしやるから、拜見して動かされるのよ。」

あの手紙が雪路にそんな印象を與へたのかと思ふと、決して悪い氣持はしなかつた。その上今日雪路の機嫌のいゝ事も、彼の氣分を明るくした。それは決して母親の手前だけを繕つて居るものゝやう

には思はれなかつたのである。

「いゝえ、決してそんなに賞めて頂くやうな事が、書いてあるんでもありません。」

「それにこの夏休みに、こちらへ來てもいゝかと書いてあつたでせう。」

「はい。……實はそれで、朱雀野さんへも御相談にあがつたのですが……。」

「伯母さんは是非お呼びよせになるやうにと、お勧めして置いたと、仰しやつて居らつしやいましたよ。」

「はい、さう仰しやつて下さいました。……それで私も厚かましいやうですが、何れその中奥様にお願ひしました上、呼んでやらうかとも思つて居りましたので……。」

「それなら是非お呼びよせになつたらいゝわ。ねえ、お母さん。」

「え、く、さうですとも。……弟さんがこちらへいらつしやりたいと仰しやるんでございますか。まアね、いぢらしい。……お二人きりのお兄弟では、どんなにかお逢ひになりたいのでせう。ちつとも御遠慮には及びませんから、是非お呼びよせなさるがようございますよ。」と、梅野は心より云ふのであつた。

「どうも難有うございます。……こんなところでお願ひして恐縮ですが、それではこの夏休みに呼び

よせてやる事にいたします。どんなにか喜ぶ事だらうと存じます。」

「それに家でも千秋がい、お相手が出来て、大喜びでございませうよ。」と、母親の言葉に、

「千いちゃんはそのりやア大喜びに極つてるわ。」と、雪路も云つた。二人が快よく小さな弟を歓迎して呉れる事は、脩に取つて何とも知れぬ感謝であつた。

「弟さんはもう中學へお入りになつて居らつしやるんでございましたね。」と、梅野が尋ねた。

「はい、昨年曉星中學へ入りましたので……。」

「ぢや、もう二年級ね。……千いちゃんより二ツ上……でせう？」と雪路が云つた。

「はい、この春に二年になりました。年は十四になりますが、まだからツきし小兒で、連も千秋さんほどの智慧はありません。」

「そんな事はないに極つて居ります。家の千秋こそほんとに小兒ですから……。」

弟の話が切れると、脩は馬に一鞭あてた。途中で行違ふほどのものは、大抵梅野母子に言葉をかけるので、百姓が皆野良仕事に出て居る時節柄、その挨拶に忙殺されるほどであつた、脩も可なり顔が賣れて来たので、脩に挨拶するものも少くなかつた。

やがて一部落をなして居る民家の傍を過ぎる時、脩は雪路母子の對話にふと心を惹かれた。

「お濱さんの家はこの邊ぢやアなかつたかへ？」

この言葉を聞くと同時に、脩はお濱といふのは、重助の話に聞いた雪路が例の大枚の金子を恵んだといふ駈落もの、娘である事を、思ひ起したのである。

「え、さうよ……。彼處に大きな榎があるでせう。」と、雪路は右側の一町ばかり彼方、白い練堀の一構への邸内に、こんもり茂つた大榎を指さして、「ちよつと家根が見えますが、あの榎の後の方角にあるのよ。」

「さうかへ。久吉はもう退院が出来たのだらうかね。」

「二三日前お濱さんから手紙があつて、すつかりよくなつて、漸く退院が出来たからと、喜んで來ましたよ。」

「さうかへ、それはよかつたね。」

併し二人のお濱に關する話はそれきりであつた。脩は何とも口を挿まずに、黙つて聞流したのであつた。

それから三十分ほど過ぎて、馬車は梅野の乳母の里へ來た。

乳母の家は小さいながら自作農をして居るので、乳母の亭主はとうに亡くなり、乳母はもういゝ年

の息子夫婦や、孫等に取りまかれ、まづ不足もない生活をして居るのであつた。丁度農繁期に差ししかかつて居るので、家には息子の嫁と小さな孫娘が残つて居ただけであつたが、梅野母子の不意の訪問に、嫁は面くらひながら、二人を姑の病間へ通し、娘を野良へ走らして、父や兄を迎へにやるのであつた。

乳母の中風は軽い半身不隨で、自分でどうやら寝起も出来れば、舌も少しもつれる位で、話には差支ないほどであつた。梅野ばかりか、雪路までも見舞つてくれた事が、乳母にはこの上もない満足で、涙を流して喜ぶのであつた。兎角する中に、もう五十近くの息子と、長男の二十ばかりの若ものも、迎ひを受けて野良から歸つて來た。病間は急に賑やかになり、脩も呼入れられて人々に紹介された。

素樸な談話が換されるのが、脩には涙ぐましいやうであつた。

脩が遠慮深く、若ものを相手に話を試みて居る時、彼は梅野が乳母に向つて、雪路の縁談のいよいよ極つた事を話して居るのが耳に入つた。乳母もそれを聞くとこの上ない満足らしく、息子夫婦も頻りに梅野と雪路に喜びを述べるのである。雪路は詞少に受答だけをして居るのであつたが、脩は雪路の顔を見る勇氣はなかつた。

その中話も切目になつた時、梅野は脩に氣の毒と思つたらしく、

「高宮さん、お退屈でせうから、この裏の天神山へ登つて御覽になつたらどうでございます。大變にいゝ景色でございますよ。私の小さい時は、乳母の家へ遊びに来る度に登つたものですが、椎の木が澤山あるものですから、秋にはよく椎の實拾ひをいたしました。」

脩は梅野の好意を嬉しく、

「さうでございますか。それでは是非登つて見るといたしませう。」

「雪路や」と、梅野はすぐ娘に向つて、「お前も長く登つた事がないだらう、高宮さんを御案内していらつしやい。」

「そんなら己が案内しべえ。」と、若ものが云出したのを、雪路が引取つて、

「いゝえ、私もいつ登つたまゝか、もう忘れて居ますから、登つて見たいのよ。……私が御案内しますから……。」

さう云はれたので、若ものは遠慮して了つた。

脩は雪路に案内されるといふ事は、乳母の家の人々の手前、何となく後ろめたい氣がせぬでもなかつたが、雪路が若ものゝ好意も斥ぞけ、進んで案内するといふ一事には、この上もない満足を感じる

ので、私かに感謝しながら、雪路について乳母の家を出た。

天神山は乳母の家のすぐ背後に突立つて居る標高二百米突位の小山で、石骨のところ／＼樹木の間
に露出して居る、小さい割には険しさうな山であつた。

頂上には天神の祠があるので、麓から道が九十九折に通じて居るのである。

「なか／＼険しい阪がありますから、そのおつもりで……。」と、雪路は先に立つて身軽に進んだ。

麓の方は松やら雑木やら、熊笹やらが茂つて、道は岩石の間を通じて居るのである。靜かにそこを
登つて行く間、脩は立石寺の長い石段を思ひ起した。けれどもそれを雪路に語る事を躊躇した。雪路
もきつと立石寺の事を思ひ出したに違ひなかつたが、同じく何にも云出さなかつた。

その時の快澗だつた雪路の面影は、今どこにも求める事は出来なかつた。彼女は口數も少なく、冥
想に耽つて居るやうな、沈み勝な顔色をして先に立つのである。乳母の家の人達に、今度の結婚をさ
まざまに祝はれた事が、まだ頭に残つて居るためもあるのではないかと、脩は考へた。

雪路は時々思ひ出したやうに歩調を早めて、一人で先へ行くと、立留つて脩を待受けながら、淋し
い微笑を彼に與へた。

立石寺の時と違つて、少し急いても汗が出るので、二人はなるべくゆる／＼登つた。油蟬がじつと

鳴いて居るのも、暑さを誘ふやうに思はれた。併し道の兩側は立木が日の目を隠して居るので、ひい
やりとして居た。いくつかの鳥居を潜りながら、三四町上ると、祠のところへ出た。祠の前に古雅な
一對の高麗狗が据わつて、小さな祠ながら、淨らかに神寂びて居た。

その邊はや、潤い平地をなして居て、梅野が小さい時に實を拾つたといふ椎の木や、樅、楓、山毛
榉などの雑木林が、晝も暗いほどに茂つて居て云知れぬ涼味が溢れて居た。

二人は祠の前に稽首くと、暫らくそこに佇んで涼を容れた。

「汗をおかきになつたでせう。」

「え、少しは……。」と、雪路はハンケチで額から襟足の汗を拭つた。今まで蒼白かつた顔が、ほん
のりと上氣して居るのが、や、小暗い木下蔭に、氣高くも美しく見えた。

「なるほどこの邊には椎の木が澤山あるやうですね。あなたもこゝで椎の實をお拾ひになつた事があ
るんですか。」

「え、……でも遠い昔だわ、千秋位のころ……。」と、そのころの無邪氣な生活を羨むやうな恍惚とし
た眼で云つた。

「あなたのお母さんも千秋さん位のころにお拾ひになつたのでせう、あの乳母さんとても多分……。」

「椎の木は毎年新しく實を結んで行くのに、私達はさうして年を取つて、朽ちて行くんですわね。」
雪路は感傷的になつて、その眼には涙がにじみ出して居たが、それを隠すやうに顔を反けて、
「この裏の方へ廻つて見ませう。大變い、見晴らしがありますから……。」と歩き出した。

脩は黙つて雪路の後に續いた。

祠の背後がまた小高くなつて、そこには樹木がなく、小笹原になつて居り、三方の開いた明るいところであつたが、その一番高いところに、三段ほどに築いた石段の上に、自然石の日露戦役記念碑が立つて居た。

「こんな碑が建つたの、私、知らなかつたわ。」と、雪路は呟きながら、碑の傍に来て、眼を遠望に移すと、
「まア、い、景色だわ！」

それは景色などには無頓着だといふ雪路の口から、思はず知らず漏れた感嘆の辭であつた。それは全く如何なる人でも惹つけられるほどの莊嚴な自然の光景であつた。

「何といふ大きな景色でせう！」と、脩は思はず叫んだ。

丁度西に面した正面には、庄内平野が、果しもなく展開し、洋々とした最上川の流れが、帯のやうに新庄盆地を繞つて、庄内平野の方に消えて行くのである。左手の方に奔馬の如く起伏した山岳の間

には、手に取るばかり、名に高い出羽の三山を指摘する事が出来る。それだけの自然が既に雄偉である上に、今太陽は西平野に落ちやうとして、赤々と最後の光燄を揚げ、半天に夕榮を起して、最上の流れは火のやうに輝やき、三山の半面は黒く、半面は日に照榮え、自然は活々と躍動してゐるのである。

如何に美しい偉大な光景であらう！ 如何なる文字も、如何なる繪筆も、この大自然の偉觀を寫し出す事は出来ない。

その崇高な自然に威壓されたやうに、雪路はよろめきながら石段に腰を落した。

脩は立盡しながら、飽かずその光景に見入つた。自分達の通つて來た村や、道路は、一幅の鳥瞰圖を延べたやうに、指呼の間に見える。田や畑には大勢の男女や、牛馬が、まさに終りに近づいたその日の勞作に、最後の努力を試みて居る。すべては光榮に包まれた懐かしい生彩ある自然であつた。

脩は更にまた眸子を、足下の山裾の方に轉じた時、この天神山の裏手の、その山裾が切開かれて、この村の墓地になつて居る事を見出した。新らしく盛られた土饅頭、無造作に突刺された卒塔婆、雨に破れた天蓋、提灯なきが目に入ると、彼はそこに何とも知れぬ對照を感じながら、ふと雪路の方を見ると、墓地には心づいたか、あらぬか、彼女は今一心に自分達の來た方角を、凝視して居るのであ

る。

脩が雪路の視線を辿つて見ると、丁度そこにお濱の家の話の出た時、雪路の指さし示した、かの白い練堀に圍まれた中の、目印の大榎を見出したのである。雪路が果してそこを見つめて居たのかどうかは知らぬが、脩は雪路に向つて、話しかけて見た。

「お嬢さん、あなたがお濱さんの家だとか仰しやつた、あの大榎が見えるやうでございますね。」

「え、……。」と、雪路は答へたが、脩はその時彼女の眼に一杯の涙が宿つて居るのを見た。……見る間にその涙が一すぢ頬を傳はり落ちると、彼女はそのまま、堪へられないやうに、石段に肘を投げかけさま、顔を埋めて突伏して了つた。

それが如何にも咄嗟だつたので、脩は驚ろきながら、たゞ雪路の眞白な襟足を守つたが、同時に彼は嗚咽の聲を漏聞いた。

彼は何か言葉をかけやうとしたが、併し雪路の惱みに敬意を表して、靜かにそこを立退くと、數歩の此方に番兵の如く立つた。

數分間にして雪路は泣止んで、顔を擧げると、靜かにハンケチで涙を拭つた。

脩は近づいて、

「お嬢さん、あなたはそのお濱さんとやらに、同情の涙をお濺ぎになつたのではありませんか。」

雪路は一瞬間脩を見詰めた。……が、その眼は異様に燃えて、

「いゝえ、さうぢやアないわ。私の涙はあらゆるものを呪ひの涙よ。……高宮さん、私はね、今私達の居るこの山が裂けて、このまゝ、地獄の火の中へ落込んで了へばいゝと思つてゐるのよ。……御覽なさい、今、日は眞赤に燃えて、野の末へ沈まうとして居ます。……果しもない闇の中へ沈んで行く日——それは私の象徴です。そして私の運命は——私の運命は彼處にあるんです！」と、彼女は脚下の山裾に強い夕陽を浴びて、蒸れ返つて居るやうな、かの新墓地を指さした。

脩は愕然として色を變へながら、

「お嬢さん、あなたは何を仰しやるのです。あなたは青春の曙光に包まれて居らつしやるお身の上です。かりにもそんな忌はしい事を口になさるものぢやアありません。」

脩をきつと見た雪路の血相は變つて、

「私はその青春を呪ひます。自分の姿を呪ひます。財産を呪ひます。運命を呪ひます。……あらゆるものを呪ひます。世の中の男といふ男を呪ひます。私は——私は——」

「お嬢さん！」

雪路は亢奮しながら、つゞけるのである。

「男といふ男は、いろ／＼の假面の下に隠れて、あらゆる慾望を遂げやうとするのです。世の中には純潔な戀もなければ、貴とい愛もありません。女といふ女は、みんな醜い汚れた、男の慾望の犠牲になるのです。……青春が何です。私に今残つてゐるものは、たゞ幻滅ばかりです。結婚は戀愛の墳墓だといひますが、私は戀愛を知らずに、生きながらその墳墓へ入るのです。唯一人私をその墳墓から救ひ出さうとする人はありません。また私が救ひを求めやうとする人は一人だつてありません！……私は淋しく運命の犠牲になればいいんです。」

さう云つて彼女はまた顔を蔽うて、獻敬をつづけた。

脩は何とも知れぬまで激しく胸を打たれながら、小禽のやうに顫へて居る雪路を凝視した。

彼はどれほど雪路から一切の説明を求め、そしてどれほど自ら辯明したいと逸つたかも知れない。この惱める魂を救ふために、雪路の一切の誤解を闡明したいと、どんなに逸つたかも知れない。……けれどもそれはもう遅い。……一切の誤解を闡明するといふ事は、雪路を自分の強い胸に抱擁するといふ事ではなければならぬ。自分にはどうしてそれが出来やう？ 雪路は人の妻と定まつた女である。雪路の靈を救ふために雪路の身を滅ぼす事は出来ない。自分は飽くまでも沈黙を守らなければならぬ。

……

彼は雪路の獻敬の止むのを待つて、靜かに、

「お嬢さん、私はあなたの仰しやる事を辯駁はいたしません。あなたには滿腔の御同情を申し上げます。……併しあなたは生きながら墳墓へ入ると仰しやいますけれども、あなたの今後の生活を、墳墓となさるも、樂園となさるも、たゞあなたのお心一ツにあります。あなたの愛のお力で、鉛を黄金に化する事も、決して難くはありません。男の限らない慾望——さういふものがあなたの前に何です。あなたの愛の感化が、何ものにも及ばぬと思召すなら、それはあまりに御自分を軽く見てゐらつしやるのです。あなたの周圍に美しく暖たかい世界をお作りになるには、たゞあなたがその意志さへ、お持になればよいのです。あなたはさうした他人の持得ない天分を持つて居らつしやいます。どうか御自分の力をお信じなすつて、その暗いお考をお捨てになるやう、切にお祈り申します。」

雪路は顔を隠したまゝ、何ともそれに答へなかつた。脩もそれ以上は重ねて何も云はなかつた。五六分の後、雪路は涙を拭ふと、極めて不満足らしく脩を眺めた。彼女の眼には絶望と怒の色さへ宿つて居た。脩がその呪詛に對してすら、何等の辯明を試みぬ事が、彼女には限りなく不足なのである。

が、その怒の色もすぐ消えて、彼女は淋しく、
 「高宮さん、堪忍して下さい。……私、何を云つたかも、よく覚えて居ません。遅くなりましたから、
 歸りませう。」

日は西に沈んで、最後の餘光がなほ中天を彩つて居る。野の末は蒼茫として暮れて行き、山々の輪廓はたゞ黒くクツキリと、魔のやうに描き出された、脚下の藁屋からは、夕餉の煙が蒼く棚引き、天神山の森を掠めて、鳥が騒がしく啼始めて居る。

二人は一語も交さず、黙々として山を下つた。

中耳炎

二人が天神山を下り盡して、乳母の家の背戸から歸つて行くと、桔槔のついた井戸端の流し場で、若ものが一生懸命鰻を割いて居た。可なり手際よく割いて居るのを、雪路が若ものに話しかけながら、見物し始めたので、脩も立留つてそれを眺め入つた。

併し二人はすぐ庭口から、乳母の病間の方へ廻つた。そして脩が出發の用意を急がうとする時、梅野から家人が心盡しの夕飯を御馳走になつてから立つのだと聞かされた。鰻は珍客の饗應のために割かれたのであつた。

一行は食事が済むとすぐ、宵月の下を、馬車を走らせて歸つて來たが、その間雪路はあまり口を利かなかつた。

それから二三日は事もなく過ぎた。雪路は脩に對しては、何を云つたか殆ど忘れたやうに振舞つて居た。それは決して冷たくなつたといふ意味でもなければ、また暖たかさを増したといふのでもない。けれども雪路はそれが脩に關係する限り、事毎に注意を彼の方に引きつけられるのを彼女自からどう

する事も出来なかつた。

梅野の乳母の里の訪問後、四日目の晝飯に雪路は姿を見せなかつたが、それは朝から催して居た頭痛と不快な気分が、少しも取れないためであつた。午後になつても、その頭痛は取れなかつたばかりか、發熱と共にだんだん一方の耳の痛みを感じ出して來たので、例の脩を診察した醫者が迎へられた。醫者は耳の痛むといふところから中耳炎と見當をつけて、専門家の來診を求めらうにと、自分の責任を迴避した。それは醫者として賢い方法でもあれば、事實において忠實な方法でもあつた。そこで専門家とても素よりこの附近にはないので、早速重助を山形まで汽車で走らせたのである。

重助の迎ひに行つた耳鼻咽喉の専門醫が、今夜來てくれるといふ報告を齎らして、夕方重助が歸つて來た時には、雪路の耳は非常に痛み出し、熱も九度ほどに上つて居た。梅野は附切つて看護して居たが、病氣の勝手が分らないので恐ろしい掛念に閉されて居るのは無理もなかつた。脩もそれと知つた時には一方ならず痛心した。自分の病氣の時には、あれほど看護されながら、男の身でどうする事も出來ない事を悔んだ。病室を見舞ふ事さへ躊躇されるので、たゞ階下まで來て容體を聞取るだけであつた。

夜に入つて山形から専門家が來てくれたが、診察の結果それはまさしく中耳炎に相違なかつた。輕

い方ではあるが、早く根本的に癒すためには、直ちに切開の必要があるといふので、局部麻痺を行つた上、切開を試み、膿を取出した。醫師は當分毎日來診する筈で、手當その他の注意を與へ、なほ梅野の希望で、明日看護婦をも一人送る事を約し、二週間で全治の見込であるが、その間絶対安静を要する旨を告げて歸つたのである。

別に危険の伴ふ病氣でない事を告げられて、家人は安心したのであるが、たゞ當人の苦痛を忍ぶ有様は、他の見る目も氣の毒であつた。膿を取つた、め激しい痛みはいくらか薄らいだといふまで、なほ可なり強い疼痛が續いて居るのであつた。

翌日の午前、道子刀自は報せを受けて驚きながら尋ねて來たが、容體を聞きに來て居た脩と階下で出逢つた。

「おゝ、脩さん、雪路さんが大變ですね。」と、餘程心配に堪へぬやうな様子で云つた。

「はい、ほんとにお氣の毒です。」

「大變に熱も高いさうですね、肺炎になるとか、腦を冒されるとか、そんな心配はないものでせうか。」

「大丈夫です、中耳炎はそのために、餘病を起すといふやうな事も、生命に係はるといふやうな事

も、決してありませんから御安心なさいまし。尤も中耳炎から脳膜炎を起す場合が、體質によつて稀にはあるさうですが、それは全く例外の場合ですから……。」

「それなら安心ですが……。」と、ほつと一息ついて、「併し耳を切つたといふのでは、疵が残るでせう。」

「それも大丈夫です。一度私の友人も可なりひどい中耳炎で切開しましたが、疵といふほどのものは残つて居ません。耳の後を切るのでごく小さなものですから、すぐ分らなくなる筈です。」

刀自は一々安心が出来て行くので、緊張した顔に弛みを見せ、

「でも痛みがひどいでせう。」

「はい、非常に神経の鋭敏な場所ですから、堪へられないほどのお痛があるでせう、それだけは全くお氣の毒です。」

「まア、あの娘が可愛相に！」と、眉をよせて、「脩さんは見舞つてあげましたか。」

「いゝえ。」と、ためらつて、「お見舞したいは山々ですけれども遠慮いたして居ります。」

「では客室の方に待つてゐらつしやい。呼んであげますから……。」

さう云残して、刀自は二階の雪路の居間へ急いだ。

まだ山形からは看護婦が来ないので、梅野と艶子だけが枕頭について居た。雪路は半面に繻帯をされたまゝ、患部に氷嚢をあてられて寢て居るのである。——まア、何といふ可愛相な事だらう——さう思ふと刀自の眼には急に涙がにじんだ。

刀自が梅野から、昨夜の切開の様や、その後の容體などを聞取つて居る時、艶子が病室を出て行くかうとしたので刀自が呼びとめて、

「中村さん、あなた、階下へいらつしやるなら、客室の方に高宮さんが居ませうから、一寸上つて来るやうに云つて下さい。」

艶子はさう聞くと變な顔をしたが、

「はい。」と、面白くない色を隠して立上ると、仕方がなくて階下へ降りて行つたが、客室の入口から覗きこむと角立つた聲で、「高宮さん、朱雀野の御隠居様がお呼びですよ。」

さう云捨てると、廊下を庭の方へ降りて行つた。脩は雪路の部屋へ上つて行くのは始めてなので、多少の好奇心と共に、何か改まつたやうな心を感じながら、靜かに階段を昇つて、扉を叩いた。

梅野がわざ／＼開いてくれたので、彼は恐縮しながら中へ入つた。雪路の室としては、全く廣過ぎる感じを與へるほどの室であつたが、それは祖父の專造が自分の居室に作つたものであるといふので、若

い娘の居室として、決して相應しいものに思はれないのも無理はなかつた。清楚な装ひを凝らされては、あるが、建築の様式が輕快といふ點はなく、寧ろ重々しい、英吉利の貴族風の趣味からなつて、全體に男性的の感じを與へるものであつた。併し或點から云へばそれが雪路に相應しくも見られるので、纖細な媚かしい色彩などの加へられてない事が、或氣高い階調をそこに作つて居るやうにも思はれるのである。純白なレースの窓帷に外光を遮つた寢臺の上に、雪路は輕い羽蒲團を一枚投げかけたまゝ、横はつて居たが、今入つて來た脩を見ると幽かな微笑を彼に與へた。

刀自は雪路に向つて、

「雪路さん今階下へ來ると、脩さんが大變あなたの容體を案じながら、お見舞する事を遠慮して居ますから、待たしておいて呼んで呼んであげたのです。」と、辯明するやうに云つてくれた。

脩は靜かに寢臺に近づいて、

「お痛みはまだひどうございますか。」

「えゝ。」と、雪路は首肯した。

「お頭痛もなさいますか。」

雪路は黙つて首肯した。併し脩が尋ねてくれた事を満足するやうな色をその眼に見せた。

脩は梅野の與へてくれた椅子に一寸腰を下して、梅野から昨夜の手術以來の經過を聞取つた。

丁度そこへ山形から看護婦が見えたと、女中が知らして來たので、脩はそれを機會に病室を出た。

雪路の經過は極めて順調であつた。三日ほどつゞいて膿を取つたが、四日目には殆ど膿はなくなつた。併し疼痛と熱はなほ續いた。

脩は四日目にまた病室を見舞つた。雪路は多く語らなかつたが、無言の中に自分の満足を脩に了解させた。嘉三郎は約婚の間柄だけに、日毎に尋ねて來ては、自在に病室に通つて居た。併し雪路は決して彼の訪問を喜ばないので、母親や人々の手前、露骨に自分の感情を見せはしなかつたが、彼とはあまり言葉を雜へず、彼が見せやうとする好意を、多くは冷淡に受流し、焦々しさを隠すために、時には睡眠を粧ふ事もあつた。

密會

脩は連日連夜雪路が苦痛に堪へて居ると思ふと、雪路の苦痛に共鳴しながら、敬虔な心持を持續して居たが、その間に彼が、一度ならず二度までも、甚だしく不快な場面を目撃した事が、少なからず彼の感情を激せしめた。その一は或夜彼が町へ出て歸る時、宵の程であつたが、町の出外れた道傍の立木の影で、そこに佇んで語つて居たらしい、戀人らしい男女を驚かしたのである。月の夜ではあつても、一帯に曇つて居たのと、木立が蒼鬱として居たので、ハッキリ何ものとも知る事は出来なかつたが、たしかにそれは嘉三郎と艶子であると感じたのである。と彼はそれを確める何の證據をも擱めないのであつたが、この邊でも用ふる人のない、平生艶子が愛用して居る香水の匂を嗅いだ事が、確かに艶子である事を思はせたのである。二人はそれから町の方へ急ぐ様子であつたが、男の洋服の輪廓から、男はたしかに嘉三郎であると思はれた。脩はよつほど後を跟けて見ようとしたが、氣が咎めるので、そのまゝ歸つて來たのであつたが、歸つてから尋ねて見ると、果して艶子は居なかつた。それからモーツは邸の中の例の森で、二人が大膽に榻の上で摺れぐに寄合ながら、何か囁やき合つ

て居る有様を目撃した事である。

雪路が日夜病苦に呻吟して居る最中に、雪路と婚約の成立つたばかりである嘉三郎と、艶子が、雪路の病氣を利用して、屢々密會を続けると想像される事は、極度に脩を憤慨させた。彼は以前から二人の間を疑つては居たものゝ、十分突留めては居なかつたのであつたが、よし以前にはどんな事があつたとしても、嘉三郎がその目的通り、雪路と婚約を結び得た昨今、斷然その素行を改むべきであるのに、少しも改悛の様子がなく、艶子と密會を續けて居るものとすれば、假にそれが艶子の巧妙な誘惑のためであるとしても、斷じて許さるべき事ではない。併し今度とてもまた確に證據を擱んだといふのではないから、いよく突留めた上では、何等かの手段を取つて、必ず彼等に反省せしめなければならぬと思ふのである。

彼はさういふ考へを抱きながら、不快にまた幾日かを過した。その間に雪路の経過は次第によく、疼痛も熱も極めて輕微なものとなつた。併し安靜を要する事は無論なので、庭先へ出る事さへ絶対に禁ぜられて居た。

或日の午後脩は何心なく、森の裏手の方から、森の中へ入つて行つた。梅雨も上り、暑氣の募り出した昨今、森の中の涼味はまた格別なので、彼はそこで暫らく讀書に耽らうとしたのである。裏手の

方から入つて行くと、灌木の叢がちよい／＼あつて、展望を遮つて居たのであつたが、その灌木の叢を出た時、突然彼は釘付にされたやうに、そこに立留まつた。

それは嘉三郎と艶子の二人が、脩の來た事は知らず、榻を離れて立上ると、嘉三郎が艶子を抱擁して、接吻を與へたのである。接吻を與へた後、彼はそのまま、洋館の方を目指して立去ると、艶子一人が甘い夢を追ふやうに、男の後を見送つて恍惚と佇んで居た。

脩は遂に捕へるものを捕へたのである。怒氣の鎮まるのを待つて、彼は靜かに艶子の方に進むと、「中村さん！」と、聲をかけた。

夢から呼覺されたやうに、愕然として脩の方を見返つた彼女は、そこに脩の姿を認めた刹那に、土のやうに蒼ざめて了つた。

艶子は脩の激しい顔色を見て、ハッキリと自分の地位を知つたのである。

「あなたはいつからそこに居らつしやつたのです。」

「今來たばかりです。」

「何を御覽になりました？」

「見るべからざるものを見ました。」と、脩は鋭く彼を見つめた。

艶子は恥ぢるやうに眼を落して、ワナ／＼と身を顫はした。

脩は一步進みよつて、

「中村さん、あなたはよく私に復讐なさいましたね。」

「え……？」と、艶子は顔を擧げた。彼女の眼は恐怖に戦くやうに光つた。脩のこの言葉を疑もなく彼女に對する復讐の第一歩と見たのである。

「あなたは理由のない復讐を私になすつたのです。今更それを拒む事は出来ません。」

「私、何にも復讐なんかしませんわ。」

「復讐なさらない？……お嬢さんに私を中傷したのが、あなたでなくて誰です？」

「私、中傷なんかしないわ。」と、彼女は追に俯むいて抗辯した。

脩は嚴肅な調子で、

「中傷なさらないといふなら、それでよろしい。……併し私のいふ事をよくお聞きなさい。あなたはあの時、私があなただの意志の如何に拘らず、あなたの友として残ると云つた、私の言葉を覺えて居らつしやるでせう。私は今もその言葉をあなたに繰返します。あなたに卑劣な復讐を試みるやうな事は、斷じてしませんから、安心してお聞きなさい。……あなたは極めて巧に私を中傷なすつたのです。それ

はあなたが拒む事を許しません。私はいつでもその證據を掴む事が出来ます。お嬢さんが何のために悩んで居らつしやるか、あなたはそれを知らないとは仰しやれますまい。……お嬢さんはあらゆる機會において、私から辯明を求めやうとして居らつしやいます。お嬢さんが残酷に私にお當りになる時、あなたはそれを痛快として居らつしやるでせう。併し靜かに顧みたらば、あなたは決してそれを痛快とはして居られない筈です。お嬢さんが残酷に私にお當りになるのは、私に辯明を迫る手段に過ぎないのです。私が一言お嬢さんに向つて、「あなたは中村さんから何をお聞きになつたのです？」とお嬢さんの説明を求めたとして御覽なさい。あなたは一日も安心して居られない筈です。お嬢さんはまたその問が私の口から出るのを待設けて居らつしやるのです。……お嬢さんの胸には無殘な疑惑が宿つて居る事を私は否定しません。それはあなたの投げた毒なのです。私は日一日と夫を確めて行きつゝあります。お嬢さんの態度、お嬢さんの言葉の綾が、私に一々それを反映します。その恐ろしい毒は、あなたの舌からでなくて、どこから來たのです？……私に對するあなたの理由ない復讐の矢は、肝腎の私を射貫く代りに、お嬢さんの胸元を貫いたのです。……お嬢さんはその苦しみを誰に懣へるところもなく、たゞ一人悶えて居らつしやるのです。……中村さん、お嬢さんの苦しみを救つてあげる事の出来るものは、たゞあなたと私と二人あるばかりです。併しあなたにはそれは出来ますまい。それな

ら私が出るかと云へば……それも、う遅い事は御承知の通りです。中村さん、よくお聞きなさい。……私はお嬢さんがその苦しみから脱却して、新たな自己の創造される日を靜かにお待して居るのです。お嬢さんの悩みを見つめながら、またお嬢さんが絶えず私の辯明を求めやうとなさるのを知りつゝ、何等の辯明をも試みず、お嬢さんの現在の煩悶を、第三者のやうな態度で、傍觀して居るのはその爲なのです。……一言で云へば、私は牧山さんとお嬢さんの結婚の完成を、誠心誠意を以てお待して居るのです。……もしお二人の結合を破壊しやうと思へば、それは私の力でたしかに出来る事なのです。お嬢さんがこの結婚を自ら決せられた動機を靜かに考へて御覽なさい。……私がお嬢さんに向つて、一切を明かにした場合には、それがどうなると思ひますか？ あなたがその場合にも、なほ私を陥れる事が出来ると思つたら、それは大變な間違です、あなたの舌は最早お嬢さんを迷はす何の力もありません。その上私の一言で、あなたは最早や三春家に、一日たりとも留まる事の出来ない人になる事を、明かに御自覺になつたでせう。……併し私は繰返して云ひます、御安心なさい。私は決して何人にも漏らしません。けれども最も強硬な態度であなたの反省を求めます。私が一切自分の私情を没却して、當然辯明すべきことをも辯明せず、三春家のため、飽くまで牧山さんとお嬢さんの圓滿な結婚と、お二人の結婚生活の幸福を熱望して居る際、牧山さんとあなたとの間に、不純な關係を發見したといふ

事は、私に堪へられない事です。若しあなた方がこの上なほ、その不純な関係をおつゞけになるといふ事なれば、私は三春家のため、またお嬢さんのため、斷然たる決心に出なければなりません。……たゞ今日はなほあなたの友です。併し今度こそあなたの敵になります。……どうです。あなた翻然お改めになりますか。」

脩の嚴然たる言葉には、秋霜烈日の趣があつた。

艶子は青くなり、また赤くなつて、身を震はして聞いて居たが、漸く蒼ざめた顔を擧げると、

「高宮さん、あなたのお詞はよく分りました。……併し私は何も牧山さんと、醜關係を結んで居りはしません。今日は牧山さんが出来心で、私に接吻なすつたゞけです。」

脩は詰るやうに彼女を見つめて、

「あなたは事實の前に、なほ云逃れやうとなさるんですか。假に牧山さんが出来心であなたに接吻を與へたとしても、あなたはそれをお受けになつて居たではありませんか。……いゝ、加減に人を盲目になさい。私は今日の事だけでいふではありませんぞ。」

その外にも證據を握つて居るといふやうな氣色を見せたので、傷もつ足の艶子は、顔を赧めて俯むいて了つた。

「あなたが強辯なさる事は、あなたの利益ではないでせう。私は一度あなたの誘惑を受けて居ます。牧山さんがあなたを誘惑したか、あなたが牧山さんを誘惑したか、その位の判断が出来ぬ私ではありません。……併しそれを追窮しやうとはしません。私に三春家の恩義があるやうに、あなたにも三春家の恩はある筈です。殊にあなたはお嬢さんの友人として、お嬢さんの信頼を受けて居らつしやるとすれば、お嬢さんを裏切るやうな事は、決して出来ない筈ではありませんか。」

艶子はやゝ反抗的に、

「そりやア私だつて、雪路さんを裏切らうとはしませんわ。あなたが何と思つて居らつしつたつて、私、まだ牧山さんと醜關係なんか、結んでは居ませんもの……たゞ、辯解の出来ない破目になつたといふだけですわ。」

脩は苦笑しながら、

「それならいゝ時機に、私はあなた方を見出したのです。斷然その危険な位置から遠ざかつて下さい。……如何ですか。」

「それは大丈夫だわ。私、決して牧山さんとは關係しませんわ。」

「あなたはそれを誓ひますか。」

「え、誓ふわ。」

脩は少しも信じなかつたけれども、

「難有う……。それなら私はなほあなたの友です、その誓を決してお忘れないやう、……。それから牧山さんはまだ居られますか。お歸りになつたのですか。」

「居らつしやる筈です。」

「さうですか。私は牧山さんにも反省を求めなければなりません。」

さう云つて彼は、恥辱と憤怒に齒をくひしばつて見送る艶子を後にして森を出た。

脩は洋館を入つて階段の下まで来ると、丁度女中が上から降りて来たので、嘉三郎の在否を尋ねて見たが、来て居るといふので、一寸降りて来て貰ふやうに、女中に言傳てた。

女中が引返して行くと、嘉三郎はすぐ女中と一緒に降りて来た。

脩は極めて、穏かな調子で、

「少しお話し申したい事がありますので、恐れ入りますが、私の事務室の方までおいでを願へますまいか。」

「いや、行つてもいゝです。すぐですか。」

「はい、では御案内いたします。」

脩はそのまゝ、嘉三郎を自分の事務室へ伴ふと、例の應接室へ相對して席を占めた。

「牧山さん、今日はあなたに苦い事を申上げなければなりません。私は先刻あなたと中村さんを森の中で拜見したのです。」

さう云はれると、今まで何の氣もつかず、呑氣に構へて居た嘉三郎の顔色はさツと變つた。併し急に威嚴を繕つて、

「さうでしたか。併しそれがどうしたのですか。」

「あなたはそれを間違つた事だとはお考へにはならないのですか。」

「中村さんと森の中で逢つて、悪いといふ事はないでせう。」

「あなたはたゞお逢ひになつたゞけではありません。中村さんとお別れ際にあなたが何をなすつたかお忘れにならないでせう。」

嘉三郎はすつかり見て居られたのだと知ると、追に顔を赧くして俯いたまゝ、答へが出なかつた。

「私はお嬢さんの御病氣以來二三回あなた方をお見受けして居ます。四日程前の夜、あなたが中村さ

んと御一緒に、町の方へ行かれた事は、どうして御辯明になりますか。」

嘉三郎はぎよつとして彼を見上げた。併し弱みを見せまいとして、

「併し僕の行動を何も君が……。」

「さうです、私があるあなたの行動に干渉する権利は何もありません、もしあなたが三春家と何の交渉もない、以前の牧山さんで居らつしやるならば……併し今はお嬢さんの未来の良人としてのあなたです。そして私はあなたを推奨した責任者の一人です。三春家の忠實なる使用人として、またお嬢さんの眞實の友として、決してあなたの行動を看過することは出来ません。この前この室で、私があるあなたに何を申し上げました？ 若しあなたがお嬢さんの幸福を脅かすやうな行爲をなされれば、決してあなたの味方でないとし上げた言葉は、なほあなたの耳に残つて居る事だと存じます。御主人なり奥様なりがあなたのこの行動を知られた時、殊にお嬢さんがそれを知られた時、あなたの地位がどうなるかは、極めて明白ではありませんか。併し私はまだあなたの敵ではありません。なぜならあなたに反省の機會は十分あると信じますから……。」

嘉三郎は始めの擬勢にも似ず、蒼白になつて了つて居るのである。

脩は嘉三郎を見つめながら詞を次いだ。

「あなたは全體お嬢さんの御病氣に對して、何の同情もお持ちにならないのですか。お嬢さんの御病氣が、どんな意想外な反響をお嬢さんを知るほどのものに與へて居るとお思ひです。この一二里四方の可憐な農民達——幾百戸に住む人達が、お嬢さんの御病氣を、みな自分の娘や姉妹が病んで居ると同じやうに心配して、神に祈るもの、そこへ願をかけるもの、さういふもの、數々あるといふ事は、あなたもお聞きになつて居らつしやる筈です。現に毎日さういふ人達の、お嬢さんの御病氣を見舞ひに来るものが、門前に市をなすともいふべき有様ではありませんか。さういふ人達が、三春家の悲しみを自分の悲しみとし、お嬢さんの憂を自分の憂として居る醇樸な心情は、實に涙が滾れるほど貴いものとお思ひになりませんか。お嬢さんはそれほど小作人達の間に、人望を持つて居られるのです。またそれほどにお嬢さんの病氣が、共鳴を喚起して居るのです。あなたはさういふ人達に對してもお恥ぢになりませんか。……そのお嬢さんが病床に呻吟して居られるといふのに、當のお嬢さんの未来の良夫たるべきあなたが、その御病氣を利用して、不純な快樂を追はれるといふ事は、何といふ冷酷、何といふ非人情ですか。……それであなたはお嬢さんを愛して居られるのですか。あなたがあれほどまでに、お嬢さんとの結婚を熱望して居られたのは、何のためです。お嬢さんを愛するためではなく、お嬢さんを妻とする名譽、三春家の財産に對する慾望、——たゞさういふものがあなたを

動かしたのだと見られても、辯解の辭はないでせう。さういふお考へであるならば、この結婚はいふまでもなく、お嬢さんの幸福を脅かすもので、また三春家の平和を蹂躪するものです。私はあなたの反省の有無によつて、三春家のため、またお嬢さんのため、最も忠實と信ずる方法を講じますから、それを豫め承知して頂きたいのです。」

手酷しくいためつけられたので、嘉三郎は且恥ぢ且恐れ、土氣色になつて顫ひ出しながら、

「いや、反省します、たしかに反省しますよ。何も僕は三春家の財産を目的に、結婚を希望したのではなく、全く雪路さん愛するたためなので、雪路さんと結婚式を挙げた上では、無論生活を改める覺悟を持つて居るのですが……實はまだ結婚前であるところからついその……。これは艶子が悪いんです。艶子が頻りに僕を誘惑するもんですから、意志の弱い僕はとう／＼……。併し必ず關係を断ちます。僕大いに反省しましたから、きつと關係を断ちますよ。」と、懸命に云つた。

脩は苦笑しながら、

「あなたは多少し人生に對して、眞面目な考へをお持ちになる事は出来ないのですか。あなたは恐らく結婚そのものが、最も嚴肅な意義を有するものである事を、お考へになつた事もないのでせう。それなら私の申上げる事をよくお聞きなさい。結婚は夫婦の精神的人格の創造です。それのない結婚は

單なる遊戯に過ぎません。精神的人格の創造があつて、そこに人類としての高尚偉大なる使命が宿ります。而も最善の精神的努力と修養に待つて、始めて夫婦間の精神的生活在が創造されるのです。精神的創造のない、夫婦間の眞の幸福といふものは決してあるものではありません、その幸福を築き上げるには、眞劍の努力がいります。その努力の前には、如何なる誘惑も入つて來る隙はない筈です。……私はあなたにその努力を要求するのです。」

「いや、分りましたよ。僕も必らず努力します。艶子とは必ず關係を断ちます。どうかこの事は内聞に……。」

すべてが只上面を塗擦つて居るやうな輕薄な、何等の眞摯味のない態度に、脩は張合ぬけがしながらも、

「兎に角、私はあなたに申上げるだけの事を申しました。この上は只あなたの責任です。もしあなたがなほお改めにならなければ、その時こそ最早あなたの味方ではない事を御記憶下さい。私は二度とあなたの反省は求めません。どうかあなたも非常の決心を以て、御改悛を願ひます。さうすればあなたの御結婚に光榮がありませう。……此上申上げる事はありません。忌憚なき苦言を呈した段はあしからず……。」

「いや、感謝します。」

さう云つて立上ると、嘉三郎は追に鬱ぎ込みながら、悄然として事務室を出た。

脩はその後姿を見送つて溜息を漏した。嘉三郎がよし艶子と關係を斷つにしても、何等の誠意と、眞剣さがない以上、雪路が如何に新な自己を創造するにしても、彼を相手に幸福な、意義ある結婚生活を築き上げる事が、果して出来るかどうかを危ぶまれるのである。若し此上嘉三郎に見込のない事が明かになつても、なほ成行に任す事が、果して三春家のため雪路のため、忠實な方法であるだらうか？……彼は迷つた。少くも彼等二人の行動に、この先なほ盲目であらうとする事は、決して忠實な方法でないと信ずるのである。そして今嘉三郎に宣告した通り、彼がなほ目醒めずに、艶子と醜行をつづけるやうな事があれば、その時こそ斷然たる態度に出でやうと決心するのであつた。

脩が應接室の椅子に凭れたまゝ、敷島に火を點けて、なほ彼は思ひ繞らして居る時、跣足で泥手のまゝの重助が、のつこりそこへ姿を見せた。

「旦那、牧山の若旦那と何の話したかね。」

脩は答めるやうに重助を見て、

「なぜそんな事を聞くのだね。」

「私、今その畑を起して居たゞが、若旦那が蒼い顔をして溜息をつきながら、私の前を通つて行つたゞから、それで聞くだよ。」

「さうか。なに、少し苦い事を云つてあげたからさ。」

「苦い事つて何だね。」

「なにもお前にいふ事ぢやアないよ。」

「そんなら聞かねえだ。併し旦那、お前様が若旦那に何云つたゞが知んねえだけんど、私、旦那にいふ事があるだよ。」

脩は重助の思ひ込んだ様子を見つめて、

「私にいふ事といふのは何をね。」

「私、云はうかどうしべえかと思つて、今日まで延ばして居ただが、今日は思ひ切つていふだ。旦那にほかいふ事の出来ねえ事だが、若旦那と中村さんと出来合つてるだよ。」

脩は驚いて重助の顔を見た。併し自分の眼についた位だから、重助の眼につくのも不思議はないと思つた。

「重助どん、お前もそれを知つて居たのか。」

「とうから知つて居たよ。」

「お前の外にも知つてるものがあるか。」

「誰も知つてるものなかんべえと思ふだが……。」

「さうか、それならまだしもだ。併しお前はどうして知つたのだ。」

「私、始めから怪しいと思つてたが、いよく出逢場所を突留めたのは、十日ばかり前だね。」

「なに、出逢場所を突留めた？ それはお邸の森ではないのだね。」

「そんなところでねえだよ。」

脩の眼は瞼に燃えて、

「ウム、どこなのだね、それは……？」

「町外れの方だが、そこに一人もの、媼が寡婦暮をして居る一軒家があるだ。その媼は舊人の妾などをした女で、前から若旦那と由縁があるだが、そこで逢つてるだよ。」

さてこそと脩は前夜の事を、思ひ合はせながら、

「ウム、それで讀めた。己も町の手前で四日許前の晩に、二人に行逢つたのだ、先では氣がつかかなかつたのだが……。フ、ム……。」

「旦那、お嬢様が病氣で寝てござるのをえ、事にして、そんな不埒な真似、仕出かしてるものを、お嬢様の婚様にして、え、と思ふだかね。」

「併し結納まで取替はしたものを、今更どうする事も出来ないぢやアないか。若旦那に改心させるほかに道があるまい。」

「改心など出来る筈ねえだ。」

「世の中に改心の出来ないといふ人間があるものではない。現に今牧山さんに理詰めで懇々心得違ひを説いたのだが、牧山さんも目が覺めて、斷然中村さんとの關係を斷つと、私に誓つたのだ。」

「そんな事が當になるだかね。」と、重助はさも不満らしく云つた。

「男一匹が誓ふといふものを、その上どうすれば得心が出来るのだ。」

重助は苦り切つて、

「若旦那は手癖が悪いだから、あの手癖は癒りつこねえだ。私、また現場をきつと突留めて見せるだよ。」

「牧山さんとして馬鹿ではない、自分の地位が大事な事は知つて居る。今度こそ大丈夫だらうと思ふが……併し重助どん、お前がまた現場を突留めるやうな事があれば、その時は私にも決心がある。三春

家のため、お嬢さんのため、最早黙つては済まされぬ。……それだけをお前に云つて置く。」

重助の沈んだ顔は始めて輝いて、

「ウム、旦那、それでは私がまた現場を突留めたら、旦那は黙つて居ねえだね。」と、念を押すやうに云つた。

「お互にお家の爲めだ。」

「旦那！」と、彼は涙ぐんだ眼で、感激的に脩を見て、何か云ひたけに、口をもぐぐさしたが「……いや分つたよ。」

「分つたらそれでい、だらう。」

「それでえ、だよ。」

重助が満足して立去らうとする後から、

「重助どん、お嬢さんが早く良くおなりになつたのはお目出度いな。」

脩にさう云ひかけられると、重助の顔は見る／＼歡喜に變つて、またそこに立留りながら、

「こんなお目出度い事ねえだ。もう床上も二三日中だちうでねえか。」

「さうだらうと思ふ。お前の心配も大抵ではなかつたが、大勢の小作人達の思ひでも、早くお癒り

になる譯だ。」

「まだ日限地藏や薬師様へ、日参してる女達が澤山あるだよ。」

「さうださうだね。さういふ人達の眞心は、何といふ貴いものだらう。……一ツはお嬢さんの病氣が生命にも拘はるやうに、大袈裟に取られた、めもあらうが、併し何にしてもお嬢さんの人氣は大したものだ。考へても涙がこぼれる。」

「それを思つたら、不淨な眞似出来ねえでねえか。」と、重助はまた憤慨した。

「まア、そんなに腹を立てずともい、お嬢さんは結局お任せなお身の上となるだらう。」と、脩は思案顔に云つた。

滋

明日は雪路の床上の祝があるので、配りもの、用意や何かに、一家はざわつきながら、人々の顔には春のやうな喜びが湛えられて居た。

事務室に居た脩は梅野から、雪路の部室への迎ひを受けて、すぐ病室へ行つて見た。雪路はもう寢臺には居ないので、看護婦が手持無沙汰に、室の片隅に雑誌を読んで居り、雪路は母親と並んで据ゑられた低い肘掛椅子に、伊達巻姿のまま、腰を卸して居た。もう顔色も平生と異りはなく、耳だけの病氣の事とて、殆ど病上りといふ様子は無かつた。

「明日はお床上ださうでお目出度うございます。」

「はい、お蔭で早くよくなりました。」と、母親は満足さうに答へて、

「どうぞおかけになつて下さい。」

脩が椅子を引きよせて、遠慮深く二人の前に席を占めると、梅野が、

「あの弟さんはもう二三日にいらつしやるんぢやアございませんか。」

雪路の病氣の騒ぎにも取紛れず、弟の事を忘れずに居てくれたのかと思ふと、脩は心嬉しく、

「はい、いよく明後日の夜行で立つてまるる筈でございます。」

「おや、いよく明後日の夜行で……。さうでございますか、よくまアお一人でいらつしやられます事ね。」

「懐兒と違ひますから、どうにかまるるだらうと思ひます。」

「それはいらつしやるには極つてますけれども、感心でございますわね。……それで高宮さん、あなたをお呼び申したのは外でもございせんが、雪路の今度の病氣については、大勢の小作のものなどが、みな見舞に来てくれたり、いろいろ心配してくれたりして居りますから、何か全快祝ひに、小作人達を樂しませてやりたいと思ふのでございます。それで雪路とも今相談をしたのですが、丁度この二三日前から山形に名高い女の奇術師がかつてゐまして、西洋奇術の外に、喜劇などをいたして居るのが、大層評判だと申す事なのでございます。雪路の申すには、多分あなたの弟さんも、この二三日中にいらつしやる筈だから、丁度い、折だし、かたぐその奇術師を呼んで、一晚興行したらとの事なので、私も全く、思付だと存じまして、それであなたに来て頂いたのですが……。」

脩はさう聞くと雪路の志が、涙ぐましいほどに感謝されながら、

「さうでございますか。弟の事までお心にお留守さいますて、お禮の言葉もございません。弟などはどうでもよろこびますが、併し大變結構な思召のやうに存じます。興行させますとしますと、このお庭先でやも……？」

「はい、さうなのです。これまでもちよい／＼芝居などをさせた事もございます。それで頼むとしますと、その奇術師はまだ四五日は山形にかゝつて居るだらうと存じますから、濟次第一晩だけ繰合はして貰ふ事にしたいのですが、御迷惑でせうけれども、その掛合をあなたに願ひ申したのでございます。それには先方の都合もありませんから、早いがよからうと存じまして……。」

「はい、承知いたしました。それ／＼契約先もございませうから、一刻でも早いがよろこびませう。ではこれから早速まるる事にいたします。」

「どうぞ願ひ申します。費用のところは、無法の事を申しません限り、先方の申すだけを支拂つてよろしうございますから……。」

「はい、よく當つて見ました上で……。」

「こんなにお暑くなりません中でしたら、晝間の方が都合がよいのですが、何分野天の事ですから、夜分にする外仕方がございませぬ。」

「夏向ですから夜分の方が結構で、併し夜が短かいのですから、時間はなるべくお早く始めさせる事に打合せませう。」

「六時にはきちんと始めさせる事にいたしましたうございます。それでも五時間と見て、十一時でございますからね、それは三里も先から来る者もあるのでございますよ。尤もお寒い時と違つて、夜通し歩いて歸つても、苦にならないでせうけれども……。」と、梅野は笑つた。

「なるほど三里も先からまるるものもございませうね。……では早速出かけてまゐります。」

「高宮さん、ほんとに御苦勞様！」と、雪路が始めて口を利いた。脩にはその一言が何とも知れぬ嬉しいものに聞かれた。

脩と女奇術師一座との談判は、首尾よく整ひ、山形を打上次第、彼等は三春家へ乗込む事となつた。舞臺機敷などを作るために、三春家では早くもその準備に取りかゝつた。

今朝は弟の滋が着くので、脩は時間を見計らひ、重助を馭者に、例の馬車で停車場まで出迎へた。脩がプラットホームで待つて居ると、案じたほどの事もなく、學生服姿の滋は、にこ／＼しながら、まだつかぬ列車の窓から首を出して、兄を呼んだ。脩は列車の中へ入つて行つて、鞆を出してやりな

がら、共に列車から下立つと、

「福島でよく乗換が出来たな。」

「僕、心配したけども、車掌が教へてくれました。」

「荷物は別に預けたものはないな。着換も入つて居るか。」

「ウム、入つてる。四ツ谷の乳母が来てつめて呉れたんです。乳母がよろしくつて……。」

「さうか、乳母が来てくれたか。乳母は達者だらうな。」と、乳母の親切を思ふと、涙ぐましいやうな氣持になつた。

「達者だから心配しないでくれつて、さう云つてましたよ。」

改札口を出ると、重助がそこに待受けて居たが、

「え、坊ちやまだな。」と、見惚るやうに云つた。

むくつけな親爺にさう云つて見つめられると、滋は羞かんだが、すぐ脩が、

「滋、忠義もの、重助爺やだ。兄さんいろいろ世話になつて居るが、お前もこれから世話になるのだ。……重助どん、頼むよ。」

「私、出来る事なら何でもするだよ、どうせ届かねえ爺だけんども……。それぢや馬車に乗かつて貰

ふべえか。」

「お兄様、これ？ 面白い馬車だな。」

「坊ちやま、こんな馬車始めてだつべえ。少し尻が痛えだが、辛棒して貰ふだよ。」

滋は珍らしさうにその馬車に乗つた。馬車はすぐ勢よく走り出した。

馬車の中では久しぶりで逢ふ兄弟の、盡きぬ話がつゞいた。一時間ばかりで馬車は三春家の門前についた。馬車がつくと脩の弟が来たといふので、物見高くまた馬車のぐるりに人だかりがした。太郎もその仲間に漏れなかつた。滋はまづその大きな犬が目について、真先に太郎と近付になつた。

荷物は重助に渡して、脩は庭の方から廻つて洋館の方へ滋を連れて行つた。

洋館のポーチのところには、もう馬車の歸つて来た事と、脩が庭先へ廻つた事が知れたと見えて、梅野と雪路が待つて居るばかりか、道子刀自の姿までそこに見えたので、脩の眼には涙がにじんだ。午後には滋を連れて尋ねる筈にして置いたのであつたが、刀自はそれを待つて居れずに、逢ひに来てくれたに違ひなかつた。

太郎に構ひながら、兄について来る滋の姿は、梅野等三人の視線の焦點となつた。滋は兄の面影をそのまゝの眉目清秀な美少年で、自からに小公子の風采を具へて居た。

「何て可愛い坊ちやんでせう、お生れは争はれないものでございますね。」と、刀自に云つたのは梅野である。

刀自はこの上もない満足と矜ほこりを感じるやうに、

「やつぱり脩さんの弟だけの事はあります。」

雪路は謎のやうに、二人の言葉を聞いて黙つて居た。脩兄弟がすぐ近づくと、

「お、滋さん！」と、まづ聲をかけたのは刀自である。

滋は知らない上品な老婦人に、わが名を呼ばれて、不思議さうに刀自を見上げた。

「朱雀野の御隠居様です。」と、兄は弟に紹介した。

馬車の中で聞いた御隠居様はこれなのだなど、滋は思ひながら、や、羞はにかみ氣味に頭を下けた、

滋はそれから順々に梅野と雪路に紹介された。

「まア何といふいゝ弟さんをあなたはお持なのでせう。」と、梅野はつくづく脩に云つた。

「あなたに生寫しだわ。」と、雪路は脩に囁ささやいて、飽かず少年の姿を見入つた。

滋はやさしく雪路に見つめられて居たと知つて、顔を赤くした。

「さア、兎も角も客室の方へ……。」と、梅野が先に立つて、人々を導いた。

客室では暫らく滋を中心として、可憐な談話が交された。その中に次の間の食堂では、女中等が食事の準備にかゝり始めた。

艶子と例の老婦人が来たので、滋は二人にも紹介された。艶子はもう脩に頭が擧らないので、ちやほや滋にお世辭を云つた。

「もう千秋も歸つて来さうなものだが……。」と、梅野は妹娘の歸りが待たれた。

「千いちやんが男の見だとよかつたに……。」と、老婦人が云つた。

「そんな事ないわ、小兒こどもですもの……。」と、雪路は笑つた。

丁度そこへ學校から歸つた千秋が、好奇心かうきしんに充ちた眼色をして、臆病らしく入つて来た。

「お、千いちやん、待つて居たところですよ。高宮さんの弟さんの滋さんです。こゝへいらつしやい。」

千秋は滋の方を見ながら、極りがわるさうに母の傍へ近づいて来た。

「滋さん、娘の千秋です、お友達になつてあけて下さい。」

さう云はれて千秋が羞はにかみ笑あはれをみると、滋も極りがわるさうな顔をして首肯うなづいた。併し二人は話をしなかつた。

その中食堂が開かれ、千秋と滋が一緒に並ばせられた。食事が始まつても、二人の小兒達は、一言も云合はずに箸を取つて居た。

「千いちやん、あなた達は何です。花嫁さんと花婿さんのやうに、物も云はないで食た居ますね。」と、いくらか馴な軽かなところのある老婦人が云つたので、みなが笑つた。

小兒達は顔を赤くした。

食事が済むと梅野が、

「千いちやん、森からお池の方へでも滋さんを御案内ごあんないして御覽なさい。」

「それでは滋、涼しい大きな森もあるし、池には舟もあるから、千秋さんに見せて頂きなさい。」

千秋は立上つて小聲に、

「いらつしやい。」と、臆病おそびやうらしく云つた。

滋は黙つて立上ると、千秋について食堂を出た。

ボーチから庭へ降りて、自由の空氣に觸れると、滋が物珍らしさうに廣い庭を見渡して、

「君の家は廣いんだね。」

「え、廣いわ。あなたのお家は？」

二人はもう親しさうに口を利出した。

「僕の家？……僕の家なんかないんだよ。」

「さう、お家ないの？」と、不思議さうに「ぢや、どこから學校に行つてるの？」

「學校の寄宿舎きしゆくしやに居るんだ。……どこにお池があるの？」

「あつちよ。」

さう云つて、千秋は先に立つたが、滋は今頻こに小舎こやがけをして居るところへ出ると、

「こゝへ何が出来るの？」

千秋の眼は輝やいて、

「二三日たつと、こゝで手品てひなだのお芝居おしげだのがあるのよ。姉さんの病氣びやうきがよくなつたお祝お祝いなの。」

「君の家で手品だの、芝居だのがあるの？」と、滋は驚きの眼を睜まつて、「君のお姉様病氣お姉さまびやうきだつたの？」

「え、お耳がわるかつたの、もうよくなつたわ。」

「だつて病氣びやうきがよくなつたお祝お祝いになぜ手品てひななんかするの？」

「みんな小作人こさくじん達が姉さんの病氣びやうきを心配してくれたから、さうしてみんなに見せてやるんだわ。」

「小作人こさくじんてなに？」

「家の田を作らして居る人よ。」

「君の家には田があるの？」

「田もあるわ、山もあるわ、それから牧場もあるわ。」

牧場の事は兄から聞いて居たので、

「牧場はどこにあるの？ 僕行つて見たいな。」

「こゝから一里も先よ。あなた、馬に乗れる？ 私大好だわ。」

「君、馬に乗れるの？」と、滋はまた眼を睜つた。

「あなたも乗るといゝわ。私の小馬だと、あなたもきつと乗れてよ。」

「君の乗る小馬があるの？ 僕も乗せてくれる？」

「いくら乗つてもいゝわ。高宮さんに教はるといゝわよ。」

「高宮さんて、牧場に居る人？」

千秋は驚き顔に、

「あら、あなたの兄さんぢやありませんか。」

滋は小兒心にも自分の失策に心づいて、

「あゝ、お兄様か。」と、顔を染めて云つた。

白蓮紅蓮

滋と千秋が兄弟のやうに親くなるには、半日で十分であつた。滋は二日目には三春一家の寵兒となつた。千秋は學校から歸つて來ると、滋の傍を離れなかつた。滋は千秋に連れられて、雪路の部屋へも勝手に入つた。滋は誰とでも淡泊に、臆面もなく話をするので、皆に可愛がられた。

雪路は二人を自分の部屋に引留めやうとしても、二人はじつとして居なかつた。

「お船に乗りませうか。」と、千秋が誘ふと、

「ウム、乗らう。」と、滋は應じた。

「落ちたら危ないわよ、水は浅いけど、泥が深いから……。」と、雪路が云つた。

泥は深いと云つても、危険のある程度でない事は、雪路はいふまでもなく知つて居る。

「大丈夫だわねえ、滋さん。」

「ウム、大丈夫だ。……小母さん、泥だつて一尺位しかありませんよ。」

「さうですか。でも落ちたら、泥まみれになるでせう。」

「落ちないわよ、ねえ、滋さん。」

「落ちないとも。」

さう云つて二人の兒等は雪路の部屋を出て行つた。すぐバタ／＼と廊下を走る音がした。

雪路は淋しく二人の後から室を出ると階段を降りて、庭の方へ妹等の後を追つた。

池は森の彼方の邸の一隅にあるのであるが、餘り手の入れてない、五六畝ほどの廣さのものであつた。それは殆ど蓮池と云つてもいい、位蓮が蔓つて居て、紅白の花が今を盛りと咲始めて居た。大きな鯉や鮒がそこに養はれて居て、時々それが一家の食膳に上るのである。水は清水が絶えず流れ込んで、又流れ出しているの、心地よく澄み渡り、鯉や鮒がよく覗かれるのである。

雪路が來て見ると、二人の兒等はもう舟を池の真中の方へ乗出して居た。舟と云つても遊山のための舟ではなく蓮根を取つたり、魚を取つたりする實用的の、小さな舟なので、滋でもどうやら操つられるのであつた。併し巧くは行かずに、思はぬ方向に外れるので、千秋が金切聲を出したり何かした。美しい花のやうな少年と少女が、紅白の蓮華の間をわけて、舟をやる光景は、詩のやうに美しい。雪路はうつとりと、見惚れて居たが、ふと池に人影がさしたので、その方を見ると、十歩の彼方の岸に、いつか脩が來て立つて居るのである。

二人は相見て無言に軽い微笑を交はした。二人とも岸に立つたまま、暫らく小舟の方を守つた。脩はすぐ黙想をつゞけるけるやうに、岸を彼方此方に歩き始めた。

「危ない！ 滋さん、揺ぶつちやいや！」

千秋の叫び聲に、脩は夢から喚覺されたやうに池の面を見た。

「落ちたつて大丈夫だ、僕が助けてやるよ。」

「滋さんは泳げる？」

「僕、毎年江の島へ海水浴に行くから泳けるとも。」

「滋さんが助けてくれるなら落ちてもいい、わ。」

脩はその時雪路の數歩の傍まで来て居たので、千秋のこの最後の言葉の漏れた瞬間、不思議の糸で操つられたやうに、二人は顔を見合つた。二人の眼には何といふ譯なしに、熱い涙が沸いた。雪路はすぐその眼を落した。

脩は黙々としてまた彼方に遠ざかつた。

雪路は釘付にされたやうにそこに立つて居た。彼女には今複雑な感情が働らいて居る——自分達二人の姉妹は、どうして脩兄弟のために、そんなに惹つけられて行くのだらう。自分の姿を千秋がまざ

まざと、見せてくれて居るのだ。……併し自分は最早人妻になる身體である。脩に心を移してはならない。その上脩を許す事は、決して自分には出来ない筈ではないか。——

突然水の面を、棹でびつしやりと打つ音がした。

雪路も脩も驚いて池の面を見た。

「いやだわ、滋さん、衣服が飛沫だらけになつたわ。」

「滋！ お前は何をされるのです。」と、兄は鋭く岸から聲をかけた。

「お兄様、だつて今大きな鯉を打つところだつたんです。惜い事しちやつた！」

「馬鹿だな、お前は。鯉が人に打てるものか。」

「だつて半分背中を出したところですよ。」と、滋は悄氣ながら云つた。

雪路も追に笑ひながら、

「滋さん、鯉はあなたに取れないでせうから、あなたに取れるもの、私に取つて頂戴。」

「何を取るんです。」

「蓮の花よ、それなら取れるでせう。」

「ウーム、そんなもの！」

「取つて下さらない？」

「小母さん、ほんとに欲しい？」

「え、あなたが取つて下さるなら……。」

「紅ですか、白ですか。」

「滋さんのお好きな色。」

「僕、どつちも好きだ。」

「は、それならどつちを取つて下さつてもいいわよ。」

「だけでも僕、やつぱり白が好きです。」

「私、紅が好きだわ。」と、千秋が口を挟んだ。

雪路は滋に向つて、

「ちや、白取つて下さい。私も白が好きよ。」

「一つでいい？」

「え、。」

滋は半開の白蓮を、千秋は紅蓮を一輪づつ折取つた。二人は繪のやうに舟を、脩と雪路の立つた間

の岸につけると、滋は千秋を先へ下して、自分も後から下りた。

雪路は滋の手から、その白蓮を受取ると、

「有難う……一片はあなたの記念に、いつまでも押花にして置きますよ。」

「姉さん、これいらぬ？」と、千秋は自分の花を見せた。

「私、紅蓮なんかいらぬ！」

「つまらないわ、折角取つて来たのに……。」と、千秋は不平を云つた。

「千秋さん、それでは私が頂だきませう。」と、脩は此方へ進みよつた。

千秋はにつこり笑んで、花を渡しながら、

「高宮さん、紅蓮好き？」

「好きです、白はなほ好きですけれども……。」と、彼は笑ひながら云つた。

「あら、滋さんも、あなたも、姉さんも、みんな白が好きね。つまらないわ。……なぜ白が好きなのです？」

「白はね、千秋さん、純潔な色だからです。」と、脩は意味ありげに云つた。

「純潔つて何？」

「それはね。……お姉様に伺がつて御覽なさい。」

「姉さん、純潔つて何？」

「私、知らない。……だけでも世の中には、そんなものがあつても、何にもならないのよ。」と、見る間に雪路の顔は曇つた。

脩は憐れむやうに彼女の顔を見たが、そのまゝ千秋に向つて、

「千秋さん、純潔といふのはね少しも汚れない心をいふのです。それはあなたがお守りになるには、一番大事なものです。丁度滋にもそれが必要である通りに……。」

雪路は顔を擧げて、脩の心の底を探らうとするやうに、その顔を見た。それは同時に脩の矛盾を責めるやうにも見えた。併し彼女は何も云はなかつた。

脩も何も云はなかつた。二人の小兒達は手を取合ふと、

「千いちやん、どこへ行かう？」

「滋！」と、脩はたしなめるやうに弟を見た。

滋はなぜ兄に叱られるのか、分らないやうな顔をした。

「いゝぢや有りませんか。千いちやんと呼んで下すつたらいゝのよ。」と、雪路が云つた。

滋は兄の意味が分つて、恥づるやうに顔を伏せた。

「私の室へいらつしやる？ でなきやア森の中……。」

「森が涼しくつていゝでせう。」と、雪路が助言するやうに云つた。

「ウム、森へ行かう。」

二人は手を組んだまゝ、駈出したが、千秋が引きずられて行くやうに見えたので、脩が後から、

「滋、お前、亂暴な遊びをしちやアいけないぜ。」

「あなた、せめて小兒達は自由にさして下さい。」

脩は雪路の眼に宿つた濕んだ光を見ると、自分も何とも知れない悲しみに打たれた。

捨てられた女

女奇術師一座の興行の日は来た。小作人達はその日を、天國が近づくやうな思ひで、待設けて居たのである。

その日はもう四時ごろから、辨當持で出かけて来るものが多く、邸内は何とも知れぬ混雑を極めるのであつたが、五時頃には大方敷きつめた筵が塞がつて了つた。

時刻になると専造老人も、人々に助けられて棧敷に表れた。一家親族のものは、皆専造の周圍に居流れた。嘉三郎や嘉三郎の親達も招かれて棧敷に陣取つた、千秋の學校の先生やら、役場の人達も招待の數に漏れず、棧敷はもう一杯であつた。この外のダラ／＼上りになつた廣場には、千を數へるほどの老幼男女が、ぎつしりと詰つて、開場を待受けた。

時間が来ると、脩が簡單に、要領を得た挨拶をして、幕が開かれた。東京に根城を構へて居る、評判のよい一座であるだけに、その奇術は可なり洗練されたものであり、田舎の人達に驚異の眼を睜らせるには、十二分のものであつた。中に挟む喜劇も割合に垢ぬけのしたもので、見物人は譯もなく釣

込まれて大喜びである。いふまでもなくすべて大成功で、素樸な、幼稚な趣味ほか持合せない彼等小作人は、全く有頂天になつて見物するのであつた。多分彼等の今夜の印象は、語り合ひ云ひ囃されて、當分の間盡きぬ物語の種となるであらう。かういふ時宜に適した催ほしものなどで、時々彼等に善根を施す三春家が、人望をあつめて居るのは、決して偶然ではないと思はれた。

この興行は十一時過迄に大々成功の中に終りを告げ、何等の事故もなく一同は厚き感謝を擔つて解散したのであつたが、たゞこゝに書留めて置かなければならぬ簡單な事件がある。それは——脩はこの夜世話係なので、ゆつくり腰を据ゑる間もないほど、まめに立働いて居たが、さういふ忙しい間にも萬一を慮つて、嘉三郎と艶子の上に、注意を拂ふ事を忘れなかつたのである。ところが喜劇の幕明にふと彼は、嘉三郎と艶子と、二人ながら姿の見えなくなつて居る事に氣づいた。

何分非常な混雑ではあり、棧敷とても詰められるだけの人が詰めて居るので、舞臺に氣を取られて居る最中には、嘉三郎や艶子の一人や二人が見えなくなつても、そんな事に氣を取られるものは一人もなかつた。

二人はたしかにそれを知つて、この機會を利用したものだらうと、脩はすぐ考へたのである。併しまさかに邸を脱出しはしまい、すぐ歸つて來なければ、人の疑を受ける事は知つて居るから、邸内の

どこかで逢つて、喜劇の幕が閉ぢるまでに歸つて來やうとするに違ひないが、それには森を措いて二人の密會所はないと思はれるので、脩は幕が開いて居るため、自分も手際になつた機會を利用し、そつと森の方へ出かけて見たのだ。

彼が極めて用心深く森へ近づいて見ると、そこは全く別天地のやうに静まり返つて居たが、果して例の榻に嘉三郎と艶子の影を見出したのである。彼は到底二人に改悛の實のない事を知ると、且呆れ且憤慨しながら、そのまゝ、すぐ引返して了つたが、それから三四十分たつて丁度幕の閉る前に、二人は別々に氣づかれぬやうに、棧敷に歸つて居たのである。

それから三四日過ぎたの後である。夕食が済んでから、まだ一時間もたぬ宵の口、脩が事務室に一人歸つて居るところへ、重助が事あり顔に、息を切らしながら入つて來た。

「重助どん、どうしたのだ。」

重助は四邊を見廻して、

「坊ちやま、居るだかね。」

「千秋さんの室へでも出かけて居るらしい。なぜ？」

「坊ちやまが居なければ話が出来るだ。旦那！ 私、また現場を押へて來たよ。」

脩はぎよつとしながら、

「どうしたといふのだ。」

「私が夜食を済して、團扇を使ひながら、背戸に出て居ると、こそく出て行く中村さんの姿を見たよ、また逢引するだなと思つたから、私、そつと後からつけて行つたね。さうすると案の定、媼の家さ入つたよ。若旦那が來て居るか、まだかと思つて、暫らく様子を見て居ると、今度は若旦那が來て入つただ。それをちやんと見届けただから、私、旦那に證據を押へて貰ふべえと思つて、走つて來ただ。」

「さうか、それは御苦勞だつた。」と、脩は沈んだ語氣で云つて、「併し重助どん何も己が行つて見届けるには及ばん。お前が見たといふので澤山だ。」

重助は不満足らしく、

「旦那、お前様が見届けなくつてえ、だかね。私、お前様に現場を見せべえと思つて走つて來たよが……。」

「お前が見たのなら、己が見たのも同じ事だ。併し重助どん、かうして貰はう。お前は氣の毒でもこ

れからまた引返して行つて、何時何分に二人が立去るか、それを見届けて貰ひたいのだ、お前の懐中時計を持つて行つて……。」

脩は二十年も前に、専造から貰つたといふ、歩厚い大形の、今時滅多に見られぬ鍵巻の、併し機械は大分上等らしく、狂はぬが自慢の、彼の銀時計を思ひ出しながら云つた。

「さうかね、時間は時計を持つて見て置くだが、私が見たゞけで證據になるだかね。」

「お前の見た事ならば、どこへ持出してても證據になる。たゞ肝腎の時間を見て置く事が大事だ。よいか。」

「そんなら、一走り行つて来るだ。」

重助はすぐ引返して行つた。

脩は何とも知れない厭な氣持で、勇んで行く重助を見送つた。それは三春家のため、又雪路のために、必要であるとの信念は、少しも動かぬものゝ、何だか二人のさうなる事を待設けながら、卑劣な探偵めいた行動を取るやうで、そしてそれには潜在的な利己心の衝動があるやうな氣がして、可なり激しい不快な氣分に襲はれるのであつた。

彼はさうした不快な氣分を紛らさうとして、應接室の中を歩き始めたが、それだけでは歩き足らな

いやうに、今度は外へ出て事務室の前をぶらつき始めた。

一時間ほどして重助は歸つて來た。その復命によると、艶子が先へ去ると、それから正しく七分たつて、嘉三郎が立去つたといふのである。無論時間の正確を記憶しながらの復命で、彼等が媼の家に入つた時間は致し方がないが、嘉三郎が入るのを見て、重助がすぐ脩の事務室へ駆けつけて來た時の時間から割出して見ると、少なくとも一時間以上媼の家に居た計算が出るのである。重助はまたその間媼がわざとわが家を外した事實も、突留めて來てゐるのであつた。

重助はこの通りを復命すると、駄目を押すやうに、

「旦那、もうたゞは濟まさねえだんべえね。」

「分つてる。……もう何も云はんでくれ。」と、脩は沈痛な顔色をして云つた。

「私、この上にまだ氣をつけるだ。何度でも押へてやるだよ。」と、重助は力んだ。重助が立去つた後で脩はモ一度二人に忠言を試みたものかどうかと考へて見た。併しそれは威嚇にはなつても、無効である事は極めて明かな事だつた。假に一時彼等が遠ざかつて、無事に結婚式を済ました後、また密會を始めた時、どうなるかと思ふと、連も第二の忠言を試みる氣にはなれなかつた。もう此上はどういふ制裁が彼等の上に下つても仕方がないのだ。自分には彼等を庇護しなければなら

ぬ情義は何一ツないのだ。……併し、……と彼は考へた。さうして自分は何を待つのであるか、何を決心するのであるか、どういふ斷然たる處置を取るものであるか、もう斯うなれば致し方がないとして、その結果を自分に收める事が、誰に對しても耻ぢない行爲であらうか。……彼は暗い心を抱いて黙想に耽つた。

この事のあつた翌日、脩は梅野の居室へ呼ばれた。行つて見ると、梅野は極めて痛心な様子で、「高宮さん、今朝私にかういふ手紙が來たものですから」と、手にして居た一通の手紙を示して、「あなたに見て頂きたいと存じて、お呼び申しました。」

脩が受取つて見ると、それは如何にも拙ない、女文字で認ためられた手紙で、差出人の名もちやんと記されてあるのであつたが、至つてよみにくい、殆ど平假名ばかりの、殊にこの土地の方言まじりで書かれた判じにくい文面ながら、大略次の通りに意味が記されてあつた。

自分は牧山の若旦那に欺されて、自由になり、この二月子まで産落した。その子は自分で育てられないので里に出し、それについて若旦那から三十圓づゝ二度に六十圓貰つた。併しこの節ではもうとうに金も切れたので、里方の方からは子を返すと云出され途方に暮れて若旦那に逢はうとしたが、逢つてくれず、漸くの事で逢ふと、六十圓は手切の金だからもう此上やる義理はないと突放され、あ

まりの不人情に、今度は若旦那の親達に逢つて訴へたところ、劍もほろゝの挨拶で取上げてくれない。こちらは捨鉢になり、若旦那を途中で待受けて、いよく始末をつけてくれぬなら、恥も外聞もないから、この事を三春のお邸へ出て聞いて頂くといふと、大變驚ろいて、それは待つてくれ、こゝに十圓あるから差當りこれをやる、今度自分が三春さんへ坐りさへすれば、望み通りの仕送りはずきつとすゝる、行々は子供も引取るから、今度のところはこらへてくれと、言葉巧に云はれ、それもさうかと得心して歸つて來たものゝ、後から考へると、それは當座逃れに極つて居る。どうせ欺されるのなら、何もかも三春のお邸へ申上げて了つた方がいゝ、お邸でもそんな性惡と知ればお考へになるだらう。若旦那に欺されたものは、一人や二人ではないから……さう思つて一ツはお邸のため、また一ツは悔しさのあまり、わが恥を申上げるのだ、手紙では逆も思ふ事が云へぬから、お目にかゝれるものなら、その上で何でも申上げたい。……

脩は一通り目を通すと、梅野の心痛を思ひやり、暗然としてその手紙を卷納めた。

「高宮さん、あなたはその手紙をどうお考へになりますか。私は事實を申してまるつたのだらうと思ひます。」

「私には何とも申上兼ます。」

「嘉三郎さんにさういふ事があつたとしたところで、この土地の習慣では、結納まで取替はした以上、今更どうする事も出来まいかと思ひます。雪路がそれを許すといふなれば、それまでの事で、こちらから手切金でもやつて、處分をして丁外はないのですが、私の案するのは、たゞこの外にはもうこんな係り合がないかどうかといふ事です。今更後ればせの事ではありますが、こちらから手切をやりますにしても、一應はよく調べて見なければならぬ事です。あなたにお調べを願ひたいのでございます。またこの娘も何か外に知つて居る事があるのかも知れませんが、それからそれとお調べのつくだけの事はお骨折を願ひたいと存じまして……。」

「はい、承知いたしました。御痛心の段はお察し申上げます。早速その女について調べる事にいたします。どうか四五日の御猶豫を願ひたいと存じます。申すまでもないことですが、お嬢さんにはお漏らしのないやう……。」

「それは誰にも申す事ではございません。どうか秘密にお調べ下さいますやう……。」

「脩は女の手紙を預つて、梅野の室から歸つて来たが、まだ時間があるので、そのいやな役目を果すため、すぐ事務所を出て、その女の村に足を運んだ。」

「小さな一山隔てた字の違つた村で脩には初対面の場所であつた。女の家はすぐ知れた。荒物や駄菓

子のやうなものを賣つて居る小さな店で、店には女とその母親と十一二の妹娘が居た。家内はその外に十六になる息子があるきりで、父親は昨年亡くなり、母親とその女が働いて、細々一家を過して居るのであつた。

女の名はお新と云つた。まだ二十の娘で、百姓をしないだけに、どこか土の氣が取れて居り、色も白く、田舎娘の間にはいくらか目立つ纏綴であつた。母親は五十位の女で二人とも善良な型の、摺れて居るやうなところは少しもなかつた。脩を三春家の管理人で、お新の手紙を持つて調べに來たのだと知ると、二人は喜びながら脩を招じ入れ、去年の春働き手の父親に死なれ、一家の途方に暮れた話から仕始め、嘉三郎がそれにつけ入り、お新を誘惑した話、お新がとう／＼妊娠して了つた事、妊娠したと知ると、嘉三郎がだん／＼遠のき出した事、それから生れた子を里にやるまでの経緯、お新にはてんで寄りつかなくなつた事、後にも先にも二度に貫つた六十圓のほか、里子の扶持も一切出してくれず、女許りの世帯と見て多寡を括り、何一ツこちらのいふ事は取上げてくれぬ事、思ひ餘つて母親が牧山方へ懇へて行くと、誰の子か分らぬもの、世話は出来ぬの一點張で追拂はれた事、それから後は大體お新の手紙にあつた事を、事細かに敷衍して説明するのであつた。

お新母子が眞實を語つて居る事には、何の疑もなかつた。お新は嘉三郎に弄まれたものは、自分の

外にまだ二人もあると云つて、その話もしやうとしたが、脩は梅野から頼まれた事ではありながら、その上聞く必要はないと思つた。

それで脩はお新に關した話だけに満足し、なほ母子が嘉三郎に對する怨みの念に燃えて居るのを見て、彼等を慰め、母となり子となるのも何かの因縁で、嘉三郎とてやがては目覺める日も來やう。誰とてわが子の可愛くないものはないから、ゆくゆくはその子が、父の手許に引取られまいものでもない、子には何の罪があるではないから、出来るだけの事をして養育の途を立てるがよからう、自分も中に立つたからは、いづれ悪くは計らうまいと、母子を安心させて、歸つて來たのである。

脩は歸る途々考へたのであるが、お新の事を今直に梅野に復命するかどうか、彼に取つて當面の問題であつた。もしこの話だけをすぐ梅野に報告するとしたら、或はそれだけで済むかも知れないのだ。多分手切金でも三春家から出してやつて、やつぱり結婚式は行はれるといふ事にもなるだらう。雪路がそれを知つたところで、今の雪路の心理状態では、そんな事はどうでもいゝ問題であるかも知れない。

併し自分がお新に關した事だけを復命し、艶子と嘉三郎との關係を打明けなければ、それは決して三春家に忠實なものではあるまい。梅野の口ぶりで見ても、たゞこのお新問題なら兎に角、外にも係

り合の女がありはしないかと特にそれを案じて、取調を彼に託したのであるとすれば、その外は一切を隠して云はないといふ事は、いよく忠實な仕方ではない。そこで同時に艶子の事も梅野に告げたとしたらどうであらう。梅野はそれでも雪路さへ許すならとはもう云はぬに違ひない、雪路にしても、決してどうでもいゝ事とは見ないだらう。さうなれば波瀾が起らずには済まない。この結婚は多分は覆へされるだらう、その時に雪路はどんな考へを持つだらう。少くも自分に對しては、この結婚を妨げるため、自分が卑劣な探偵をしたのだとして、ますます自分を許さなくなるだらう。

それかと云つて、お新の事だけを差當り復命して置くといふ事も氣が進まぬ。のみならず彼の心の奥には、今徹底的に雪路を救はうとする考が、芽ぐみ始めて居るので、それならどうすればいゝといふ纏まつた思案は、出來ては居ないのであるが、兎に角今梅野にお新だけの事を復命して了ふといふ事は、假に艶子の事までも同時に打明けるとしても、さうした自分の根本的の考とそぐはないやうな氣がするので、梅野から四五日の猶豫を求めて居るのを幸ひ、自分の考が熟するまで、復命を見合はして置かうと考へたのである。

「お姉様」

滋は夜兄の許へ寝に歸る位で、日中大抵は母屋の方で過して居た。彼は最も素直に生立つた、無邪氣で、遠慮のない子なので、ますます三春一家の人達に可愛がられて居るのであつた。學課の復習なども、事務室で脩の傍でするよりは、母家の方で千秋と一緒にする事が多く、また千秋の復習なども、よく面倒を見てやるのである。千秋も滋と一緒にだと、いつまでも勉強して居るので、母や姉が世話をやく必要が、少しもなくなつたのである。

滋は今千秋の室で、千秋に水彩畫を描いてやつて居た。滋は繪が好きで、子供ながら器用に描くのである。

「まア、滋さんはほんとお上手ね。」と、母の梅野がそれを見て居るところへ、母を尋ねて來た雪路も、そこへ落ちついて、横坐りに坐りながら、滋の繪を見物し始めた。

「ほんとにあなたは器用だね。」

滋が繪筆を働らかして居る傍で、その繪を中心として、梅野も雪路も、ちよいく滋に話しかけて居

た。

「小母さん。」と、滋は繪を描きながら、俯むいたまゝで云つたので、

「はい。」と、梅野が答へた。

すると滋が顔を擧げて、

「いゝえ、若い方の小母さんです。」

「さうですか、小母さんが二人居たので、どつちか判らなかつた。」と、梅野は笑つた。

「この家はほんとうに小母さんが澤山あつて分らない。四人もあるんですもの。」と、滋が眞面目くさるので、梅野と雪路が吹出した。

「だつて四人もないわ、三人よ。……でも一人はお祖母さんだわ。」と、千秋が云つた。

「朱雀野の小母さんがあるぢやアないか。」と、滋が云つた。

「ぢや、滋さん。」と、千秋が「家の姉さんは姉さんと云つたらいゝわ、そしてお母さんはお母さん——」

「だつてをかしいな。」

「あなたの姉さんでもないものを姉さんていふのはおいやでせう。」と、雪路は笑つた。

「ぢや、お姉様つて云つてもいゝ？」
雪路はたゞ笑つて點頭いた。

「それでは小母さんが一人減つたな。」

「私をお母さんと仰しやれば、また一人減りますよ。」と、梅野が笑ふと、滋も極りがわるさうに笑つて、
「だつて小母さんは小母さんでもいゝや。」

「あら、それでは私は除ものね。」

「お母さんて云つてあげたらいゝわ。」と、千秋が眞面目な顔をして勸告した。

「ウム。」と、滋は繪筆をなすつた。

「あらどうなすつて？……折角よく出来たんぢやありませんか。」

「駄目だ。……。」と、笑つて、「みんなが見てるから……。」

「まア、それはわるかつたのね。濟ませんでした。」

「千いちやん、今度描き直してあげる。」

「それはさうと、滋さん、あなた、私に何か御用があつたのぢやアない？」と、雪路が滋の顔を覗き込んだ。

「ウム、何だつけな、もう忘れちやつた。」と、自分でも笑ひ出したので、みなも笑つた。

「滋さん、森で鞆かばんしませうか。」と、千秋が提議した。

「ウム、森へ行かう。小母さんも誘つて行かう。」と、滋は立上つた。

「小母さんて誰の事？」と、雪路は可愛く、滋を睨めた。

「あゝ、さうだつて、お姉様、あなたもいらつしやらない？」

「それならまゐりませう。」と、雪路も立上つた。

「あ、僕、練習本れんしゅうほん持つて行く。」と、滋は自分が持つて來てゐた佛蘭西語の讀本を取上げた。

千秋の室を出ると、三人は一緒に、森の鞆のあるところへ來た。この鞆は滋が來たので、例の興行の小舎がけの序に、森蔭のところへ作らしたものであつた。

「姉さん、乗らない。」

「僕、押してあげますよ。」

「私はあなたに押して貰はなくても、あなたより高く乗れますよ。」

「それぢやアお姉様、乗つて御覽なさい。」

「だつてだめよ、こんな着物ぢやア……。」と、笑つて、「いゝから、あなた達お乗りなさい、私、こゝで

見て居るわ。」

さう云つて、彼女は榻へ腰を卸した。滋は持つて居た讀本を榻の上へ投げ出して、千秋と一緒に鞆に乗つた。

二人の小兒等の睦まじく打興じて居る姿を見つめて居る中に、雪路の心は次第に暗くなつて來た。滋に姉と呼ばして見たところで、たゞ一瞬間の心やりに過ぎない、自分は何といふ愚ものだ。自分と嘉三郎と結婚して了へば、脩とていつまで三春家に止まつて居やうとは思はれぬ。また脩と毎日顔を合はせる事は、自分にも堪へられない事だ。……千秋がどんなに滋を慕つても、たゞこの夏だけの果敢ない友垣に終るのではないか。小兒等にはせめてその間を……と思ふ姉の心は、結局無慈悲な、残酷なものではあるまいか。……併し小兒達はどれほど親しんでも、その中には忘れる日が來やう、それは何の傷手をも、彼等の胸に残すものではあるまい。けれども自分は？ 自分のこの傷は？……

彼女は長い溜息を漏したが、その時何心なく自分の傍へ滋が置いて行つた、佛蘭西語の讀本を取上げて見た。それは殆ど無意識に取上げたのであつたが、その讀本の裏に書かれた羅馬字に目が移つた時、軽い驚きと怪しみを以てそれを見つめた。

そこには「カンロジ、シゲル」と、記されてあつたのである。

「タカミヤ」の代りに、なぜ「カンロジ」と記されてあるのか、雪路にはそれが分らなかつた。「カンロジ」は多分甘露寺であらうが、滋は甘露寺姓へ養子に行つたのであらうか。……兎に角それは滋に聞いて見れば分る事だらうと軽く考へたが、その中滋が來た日、母が道子刀自に向つて、生れは争はれぬものだと言葉などを思ひ出した。何か脩と刀自の間には、由縁がありさうに思はれて、不思議でならなかつたのに、滋を見た時の母の言葉は、それに暗示を與へるものゝやうに思はれる。また刀自が如何に脩を氣に入つて居ると云つて、滋まで、孫の來るやうに待構へて居た事も、腑に落ちない一つである。併し滋に聞いて見たら、何かの緒が得られるだらうと思はれたので、滋が鞆から下りて來るのを待つて、

「一寸、滋さん、こゝへいらつしやい。」

「なに、お姉様」と、滋はにこやかに雪路の前に立つた。

雪路は手にした佛語讀本を見せて、

「滋さん、この御本に羅馬字で、あなたのお名が書いてありますね。これ、あなたのお名でせう。」

「えゝ、さうです。」

「ぢや、あなた甘露寺滋といふの？」

滋は甘露寺の姓を名乗つてはいけなと云はれて居る事を思ひ出すと、ハツと當惑してもじくし
ながら、

「それは僕の名ですけども……」と、俯むいた。

「なぜ高宮さんと仰しやらないの？」

滋が俯むいたまゝ、黙つて居るので、雪路は不思議に思ひながら、

「あなたはその甘露寺といふ家へ養子にいらつしたんぢやアない？」

「さうぢやアありません。」

「ぢや、なぜお兄様は甘露寺と仰しやらないんです？」

「僕……僕、どういふ譯か知りません。」

「でも可笑しいわ。ほんとに滋さんは何にも知らない？」

「ウム、知りません。」

滋が全く何も知つてさうもないので、雪路は怪しみに打たれながら、

「あなた、朱雀野の伯母さんの事は、前から知つて居らつした？」

「いゝえ。」

「今度始めて御存知になつたの？……さうですか。でも伯母さんはお孫さんか何かのやうに、あなた
を待つて居らつしたんですよ。それはなぜでせうね。」

「僕、なぜか知りません。」

「でもお兄様は知つてらつしやるでせう。」

「どうだか分りません。」

「お兄様は伯母さんの事を、あなたに何とも仰しやらない？」

「ウム、何とも云ひません。」

雪路は滋からは、何にも引出せないと知つたが、疑問は深くなるばかりであつた。

朱雀野——甘露寺——この二つの姓の中にさへ、何かの聯絡がありさうにも思へるのである、母親
は何か知つて居るらしいから、母親に聞いて見やう、左もなければ道子刀自に不審を糺して見てもい
いのだ。さう考へて彼女は滋との話を打切つて了つた。

滋は雪路との話が済むと、

「千いちやん、事務所へ來ない？」

「行つてもいゝわ。」

「お姉様もいらつしやい。」

「私はこゝに居るわ、あなた方いつてらつしやい。……今日はお兄様、居らつしやるでせう。」

「ウム、居る。……居てもいいでせう。いらつしやい。」

「姉さん、いらつしやい。」

「だつて私が行くと、お兄様に叱られます。」

「ウム、お兄様、叱りなんかしないや。」

「ねえ、叱らないわ、滋さん。……だから姉さんもいらつしやい。」

「いやだわ。」と、雪路は笑つて動かなかった。

「お姉様の手をひつぱつて行かう、僕、こつちの手をひつぱるから、君、そつちの手をひつぱり玉へ。」

さう云つて滋と千秋が、右左から雪路の手を取つた。

雪路は引きずられるやうに立上つたが、

「そんなにひつぱらなくてもいいわよ、ぢや仕方がない、私も行つてあげます。」

「あゝ、嬉し！」と、滋が歌の調子のやうに叫ぶと、

「あゝ、嬉し！」と、千秋も真似をした。

が、森を抜けて、果樹園を抜けて、事務所近くまで来ると、雪路はそこに立留つて、

「こゝまで来てあげたらいいでせう。」

「いけない！ いけない！ お姉様、卑怯だ。来ると云つたんだから、来なくちやいやだ。」

「でもこゝまで来たら同じ事よ。」

「同じ事ぢやないわ、ねえ、滋さん。」

「ウム、また手をひつぱらう！」

二人はまた両方から雪路に縋つた。

雪路は笑ひながら、

「あなた方はほんとに仕方がない人達ね。行くからお放しなさい。」

「放さない。事務所まで放さない。千いちやん、放しちやいけないよ。」

二人はとうとう雪路を、事務所の應接室までひつぱつて来ると、そこで手を放して、

「萬歳！」と、滋が叫んだ。

「萬歳！」と、千秋も云つた。

「あなた方はとうとう私を、連れて来て了つたのね。」

滋は事務室の卓に凭たれたまゝ、考へに耽つて居たが、騒々しくなつたので、何事かと思つて居るところへどやんと三人が入つて來たのであつた。

「おゝ、お嬢さんですか。どうしたんです。」と、脩は立上つて三和土の間へ降りて來やうとした。

「いゝえ、さうして居らつして下さい。お邪魔でせうから、私、すぐあちへ行きます。滋さんと千いちやんが、二人で無理に私をひつぽつて來て了つたんですもの……。」

「あはゝゝ、さうですか。」と、脩はやはり降りて來て、「どうかおかけなすつて頂きます。」

「でもほんとにお邪魔でせう。」

「お兄様、邪魔になんかならないでせう。」

脩は笑つて、

「えゝ、なりませんとも。どうぞ御ゆつくり……。」

雪路は脩の勧めた椅子に着いて、

「割合にこゝは涼しいわね。」

「えゝ、風がよく通しますから……。」

雪路と脩の間には互に心にもない平凡な對話が、一三分の間換されて居た。

滋と千秋は二人で勝手な話をして居たが、滋が突然兄の方を見て、

「お兄様、今度牧場へ行く時、僕連れてつて下さい。」

「それは連れてつてやらん事もないが……。」

「滋さんは馬に乗つて見たいのでせう。」と、雪路が笑つて、「あなた、もう乗れますか。小馬に落されてばかり居るでせう。」

「僕、もう乗れますよ、お姉様。……ねえ、千いちやん、昨日僕、よく乗れたね。……？」

「どうかしら……？」

「姉さん、ほんとよ、滋さん、よく乗れたわ。」

「さうですか。でも重助に手綱を取つて貰つたんぢやない？」

「ウーム、手綱なんか取つて貰はないや。ほんとうですよ、お姉様。」

脩は二度までも出た弟の言葉を聞答めて、

「滋、お前はお姉様など、何です。……考へて物をお云ひなさい。」

「だつて……。」と、滋は顔を赤くした。

雪路もそれは自分が咎められたやうな気がしながら、

「高宮さん、勘忍して頂戴……私が悪いんですから……。」

脩は妙に胸を打たれて、

「お嬢さん、許して頂くのは私です。皆さんが滋をお愛し下さる御好意は、勿體ない事だと思つて居ます。……私は何も滋に禁じやうとはいたしません。たゞ小兒が自分の身分を忘れなければよいと思ふ許りです。」

「夏休みと云つても、すぐ過去つて了ふのですもの、その間何もかも、忘れさせてあける事は出来ませんの？」

脩はじつと雪路を見つめて居たが、いつか涙ぐんで、

「それがあなたの思召ならば、私はあなたの思召にまで逆らうとはいたしません。」

「難有う……。」と、雪路は淋しく云つた。

蝶螺堂

次の日の午後脩は俄かに牧場の方に、用事が出来たので、馬で出かけて行つた。用事の都合で手間取れ、大分日の傾きかけたころ、牧場を出て歸途を急いだ。が牧場を出て間もなく彼は、思ひがけなく馬上の雪路に出逢つたのである。脩は馬を駐めて、枝道から来る雪路を待合はせると、

「お嬢さん、どちらへいらしたのです。」

「どこつてこともなしに……を少し駈さして見たのよ、病氣から一度も乗出して見ませんでしたか
ら……。」

「さうでしたか、太郎のお供もなしでヤすか。」

「え、太郎は滋さんと千いちやんが、伯母さんのところへ連れて行きましたから……。」

「さうですか。……これからお歸りになるのでせう。」

「え、さうよ……少し遅くなるわね。」

「大して遅くもありません。ぢやお供いたします。」

二人は馬を並べて進んだが、雪路が別に急がうともしないので、滋はそれに歩調を合はせながら、静かに打たせて居る中、ふと右手の方に目をやつた雪路が、

「高宮さん、この向ひの方に、こんもりした小山が見えますね。その森の間に、小さな塔のやうなもの、先が見えて居ませう。」

雪路の指さす方を見ると、大分西に落ちかゝつた日を、背に受けて黒い輪廓を描いて居る森の上に、塔の先端がのぞいて居るのである。

「はア……なるほど見えます。お寺でもあるのですか。」

「あれは蠟螺堂よ。あなたも御存知なければ、いつて見ませうか。」

歸りの遅くなるのを案ずる雪路が、香氣な事を云出したと思つたが、素より辭する限りではないので、

「あなたがおいで下さるなれば喜んでお供いたしますが、併しお歸りがいよく遅くなつて、御迷惑では……。」

「いゝわ、遅くなつても……。」

「ではどうぞ……。」

蠟螺堂へ行くには小路へ入るので、雪路が先に立ち、脩がつゝいた。

「蠟螺堂といふのはどういふ譯なのですか。」

「中が丁度蠟螺の殻の様になつて居て、ぐる／＼廻ると、自然に上へ行けるやうになつて居るからよ。」

「それでは階段が螺旋形に頂上までついて居るのですね。外面は五重塔の低いやうなものですか。」

「え、よく多寶塔ツてあるでせう、ざつとあんな形よ。一寸この邊の名物なんですけども、誰も構はなくなつたもんですから、もう随分荒果て、居る筈よ。私、五六年上つた事ありませんけども……。」

「それはお寺の境内にでもあるのですか。」

「何んでも私などの知らない昔にはお寺があつたのよ。今は堂守の住む、小さな庵室のやうなものがあるばかりだわ。」

その中に二人はすぐ小山の下についた。それは併し小山といふよりは、丘といふ方が適して居る位で、山の形も天神山など、違つて、石塊などのない至つてなだらかなものであつた、この山の正面の畑中には、一間幅ほどの、草だらけになつた参詣道がついて居て、その兩側には櫻の古木や、松などが齒のぬけたやうに生えて居た。二人はそこで馬を下りて、その櫻の立木に馬を繋いだ上、山を上り始めた。その参詣道から頂上の古びた山門のところまで、一直線に、大分並びのわるくなつた、凹凸だらけの石

段がついて居るのである。

脩はその石段を上る間、天神山の石塊だらけの急な阪路を思つた。立石寺の長い磴道を思つた。立石寺には魔の淵の椿事があり、天神山には雪路の呪咀があつた。雪路と高いところへ登ると、きつと何かなくては濟まなかつた。蠓螺堂でも何事かわれ／＼を待受けて居るのではなからうか？——脩はそんな気がした。彼自身の内部にも、何かこの機会を過されぬやうな豫感が働いた。

石段を上り盡して山門を潜ると、廣場があつて、その正面の突當りに蠓螺堂があつた。山門と蠓螺堂と三角形をなして居る地點に、萱葺屋根に草が生え、柱の傾きかけて居る小さな庵室があつた。随分庵室や、蠓螺堂の周圍には草などが生えて居て、人ツ子一人居らず、すべてが荒寥そのもの、やうな光景であつた。

脩は雪路と共に、その荒果てた塔の上に登つて見るのかと思ふと、何となく詩人めいた感傷的の氣分が湧くのには微笑まれた。

蠓螺堂は垂木や廂などの外部に塗つた胡粉や、青や、赤やそんな色が、もう何百年の風雨に曝されたかのやうに、剥落して了つて、さすがに傾いて居ないけれども、いたく頹廢して居る趣が、却つて風情を添へるのではあつたが、それへ上る事はいくらか危険の感がせぬでもなかつた。

「上つても大丈夫ですか。」

「そりやア大丈夫だわ。」と、雪路は請合ふやうに云つた。

「堂守は居るでせうかね。……兎に角一寸行つて聞いて來ませう。」

脩は庵室の方へかけて行つて見たが、中に腰の曲つた老爺が一人居て、縁端へ出て來たが、大分耳が遠いらしく、脩のいふ事がさつぱり通じないのだ。婆が居ると分るのだが、留守だからといふのであつたが、併し別に用事があるでもなし、蠓螺堂へ上つても大丈夫だといふだけの事が、どうやら分つたので、脩は十錢紙幣三枚くれてやつて、庵室を出て來た。

急いで雪路に合さると、

「聲でちつとも要領を得ないんです。併し上つても大丈夫ださうです。」

「そりやア大丈夫よ。」と、雪路は笑つた。

堂の前へ來て見ると、見かけたほどに荒れても居ず、傾むいた柱とてもなく、上るのに危険を感じるやうな懸念がありさうには思はれなかつた。建築當時は相當に念を入れたものらしく、なか／＼頑丈な材木で組立てられてあり、下は石疊になつて、奥に阿彌陀様のやうなものが安置され、その前には色のあせた作り花などが塵埃塗れになつて居て、入口近く、手垢すれに禿ちよろけとなつたお賓頭盧

様などがあつた。

二人は中に入つて見たが、雪路は自分が小兒の頃はよく、この蠓蝶堂に上つて遊んだ事や、そのころは山門の傍の大師が流行つて、参詣人の絶えなかつた事などを話しながら、興ありげに先に立つて、薄暗く微臭い、例の螺旋形の狭い階段を登るのである。この階段の壁の方には三萬三千體あるといふ、小さな無細工な佛様が取つけられてあるのが半は失なり、残つて居るものも手足が抜け、箔が剥け、見る影もなくなつて居る上に、蜘蛛の巢までが張渡して居るのである。併し何となく神秘的の空氣の漂よつて居るやうな、さういふ薄暗い急な階段を、雪路から説明を聞きながら、殆ど摸索するやうに登つて行く事は決して興味のない事ではなかつた。

二人は頂上に登り盡して外廊に出た。大して高い建物ではないが、丘の上にあるので、かなりの眺望があつた。二人はまづ外廊を一周して見たが、堂の裏手の方の傾斜地には、杉と大竹藪が交錯して居て、さういふところによく見られるやうに、竹は太く見事に杉と高さを争ひながら、叢立つて居るのだ。今ではその竹藪がだん／＼境内に侵入し、塔とすれ／＼にまで蔓つて、外廊から手を出せば、こなたにしわつて居る竹の葉先に届く位であつた。

その杉と竹の林を外れたところに一寸した見晴しがあつた。やはり最上川の一部が視界に入つて、

天神山とよく似たやうな自然が展開するのであるが、視野はずつと狭く、取立て、いふほどの景色ではなかつた。がそれはどの點からも、決して脩を失望させはしなかつた。雪路にしてもまた景色を脩に見せやうとは思つてないらしく、

「涼しいでせう。」と、彼女はその涼しさだけを自慢するやうに云つた。

實際肌を吹掠める涼風だけは可なり汗ばんで居た二人に取つて、何とも云へぬ御馳走であつた。

雪路はそこから夕日に映えて居る村々や、丘などを指摘して、また説明を與へたり、いろ／＼の思ひ出を語つたりした。そして彼女は時間のたつ事などは、一切眼中に置いてないやうであつた。

夕日はいつか沈んで了つて、淡い夕焼が空に残つて居た。近くの山も蒼くかすみ、杉の葉ごしに十日方の月が浮いて見えた。

「涼しいから暫らく休んで居ませうか。」

雪路はさう云つて、階段から外廊への出口の闕のところへ腰を卸した。

もう遅くなつた事をすっかり忘れて了つたやうに、そこへ足を投出した雪路の胸には、何ものも融込むやうな柔かい瞬間があつた。

「は……。」と、その時脩の心は騒いだ。

螺旋の階段を登り始める時から、脩は異常の緊張を覚えて居たのである。何だかその不思議な階段の佛像に張渡された、蜘蛛の圍のやうなもので、彼の身體が雪路の方に巻きつけられて行くやうに、それがどうする事も出来ない彼自身よりも強い力で、引締められて居る事を感じるのである。同時に彼自身の内部に潜む強い慾求が、あらゆる彼の理性を超越して、働きかけやうとして居たのである。

彼は自分が今非常にデリケートな位置に立つて居る事を知つた。機會は今である——さういふ心の騒ぎが彼を壓迫した。雪路は徹底的に自分が救はなければならぬ！この女は有意か、無意か、その機會を今自分に、與へやうとして居るのではないか？

彼の心は激しく波打つた。……そしてモ一度躊躇した。

「あなた、おかけなさいな、かけられますわ。」と、雪路は優しく云つて、自分の傍にすれ／＼に席を與へやうとした。

「いや、結構です。」と、答へた彼の聲は怪しく震ひを帯んだ。

それが雪路の注意を惹いたらしく、彼女はふと脩と顔を見合はしたのであつたが、その瞬間彼女の頭髮から足の爪先まで、激しい戦慄が走つた。彼女は何ものをも變盡すやうな慾求に燃ゆる脩の眼を見たのである。それは魔の淵で脩が始めて戀を告白した時と、同じ性質の、更に熱を加へた眼光であ

つた。雪路は今まで隠して居た、偽つて居た脩の本心を、今ハッキリ見たのだと思つた。

彼女は脅えたやうに眼を落してあらぬ方を見たが、何とも知れない不安が彼女を襲つた。

脩は外廊の欄干に身を凭せて立つたまゝ、雪路を見下して居たが、云はうとする言葉は、咽喉にひつついたやうで、容易に彼の口から出なかつた。

それは實に息苦しい瞬間であつた。

突然雪路は立上ると、

「あなた、歸りませう、遅くなりますから……。」

雪路の言葉は冷たかつた。

「は……。」

彼が雪路を呼止めやうとする前に、雪路はもう身をかはして、大分暗くなつた階段を急ぎ足に降り始めた。

脩は空しく機會を逸しながら、その辯救はれたやうな氣さへして、黙々として雪路の後につゞいた。雪路は幻影に追はれながら、夢のやうに慌しく階段を降りた。幻影は血に燃ゆる彼女の若い心である。彼女は自分自身の危険を感じながら、その幻影から飽くまでも逃れやうと急いだ。

彼等が蝶螺の殻を降り盡して、舊の入口に面した時、異様の事實が、そこに彼等を待設けて居た。入る時に少しも思ひ設けなかつた、大きな狐格子の開扉が、外からちやんと締められて居るのである。「あなた、扉が締つて居ますよ。」と、雪路が色を變へて云つた。

「そんな事はありますまい、押したら開くでせう。」と、脩は無造作に答へて、扉を押開けやうと試みた。

併しそれは決して開きさうな事はなかつた。大きな錠が外から卸されてゐるのである。事實はこの蝶螺堂が夜間乞食の住家になつて居たところから、火を失する事を恐れ、堂守に毎夕扉を締めさせる事にしてあつたので、その堂守が聾の上に、健忘症であるところから、脩等が中に居るとも氣づかず、また疑つても見ずに、扉を締めて了つた譯であつた。

「誰ももう居ないと思つて、締めて了つたんでせう。……一ツ怒鳴つて見ませう。」

脩は當惑はしたが、その中にも軽い興味を感じた事は事實であつた。併し雪路の手前飽くまでも當惑を糺つて懸命に堂守を呼んで見た。雪路も聲を合はして呼んだけれども何の反響もなかつた。

「あなた、堂守は聾だと云つたんぢやありませんか。」と、雪路は批難するやうな調子で云つた。

雪路が明かに感情を害して居る事を知ると、兎に角出来るだけの手段は盡して見なければならぬ

と思ふので、

「併し婆さんが歸つて来たかも知れません。……なに、どうかかります。上から呼んで見ますから、お待ち下さい。」

さう云捨て、脩は、暗い階段をまた手探りに上り始めた。

彼は外廊へ出ると、そこから聲を張上げて呼立て、見た。凡そ六七分の間斷續的に呼んで見たが、風が向ひ風でもあるので、聾の老爺の耳に入りさうな響は決してなかつた。また此邊には人家もなく、従つて通行人のある筈もないので、いくら聲を噎して見ても、無効である事は彼にはよく分つて居た。雪路への言譯にさうして、六七分間も呼んで見たまで、はあつたが、併し彼は外廊に佇んで居る間に、そこまで葉先の届きさうになつて居る大竹を利用すれば、必らずしも下へ降りられない事はあるまいと考へついて、萬一の場合の覺悟を腹の中に極めたのである。

彼は人を呼ぶ事は斷念して階段を下り始めた、雪路がどうするだらう？ どんな態度で自分を迎へるだらう？ それは彼に取つて多少の懸念であつた事は云ふまでもない。併し同時にそれは二人の宿命なのだ、何かありさうに思はれた自分の豫感は的中したのだ、機會は決して逸しはしなかつたのだ。——さう思ふ事に彼の心臓は高鳴し始めた。

彼が階段を下盡して雪路の傍へ來ると、雪路は焦々しながら、蒼ざめて立つて居たが嘲るやうに、
「駄目でせう。」

「駄目です。……併しどうかありません。」

極めて平然として居る脩の顔に、淡い微笑の影さへ漂よつて居るのを見た雪路は、反撥されたやうに、

「駄目な事は始めからあなたに分つて居たんでせう。」

「え？ 何と仰しやるんです。」

「あなたは堂守にお金をやつて扉を締めさせたのだから。」

脩は雪路の顔を凝視しながら、

「お嬢さん、私が何のために、堂守に金をやつて締めますか。」

「分つてるぢやありませんか。私とあなたでこの蝶螺堂に一夜を過せば、私の名譽は失はれます。あなたは始めからそれを計畫してゐたのだから。あなたは牧山さんの手から私を奪はうとするのだから。」と、彼女は亢奮して云つた。

脩は再び雪路の顔を見つめた。雪路のこの思ひ設けぬ批難は、一切のものを燒盡す口火であつた。……

……脩の心は雪路と反對に、不思議なほど沈着になつた。彼は雪路の胸に鬱屈して居る、彼に對するあらゆるひざらひの事を、自分に云はせるのは今だと思つた。そして雪路を更に激させる事を豫期して云つた。

「さうです、お嬢さん、私は牧山さんの手からあなたを要求するのです。あなたは私のものです！」

脩がこんな大膽な事を云出さうとは、今度は雪路の思ひ設けぬところであつた。何だかその様子では、脩が腕力を用ひ兼ねないやうにさへ、彼女には思はれるのだ。それが今始めて知る赤裸々の脩だと彼女は思つた。つい今の先無條件でわが身を投げかけたいやうな氣のした瞬間さへあつた雪路の胸に、今は果して激しい反感が湧いた。

じつと脩を見返した彼女の眼は怒に輝いて、

「私は死んでもあなたのものにはなりません。暴行を加へるなら加へて御覽なさい！」

脩は極めて靜かに、

「お嬢さん、私はあなたの髪の毛一筋にも觸れません。私はたゞ血と涙のあるあなたの若いお心に懇へるだけです。」

雪路は石畳を小さな靴で踏ならしながら、

「私の心はこの石疊の通りです。一滴の涙もなければ、血もありません。」

「雪路さん！」と、彼は始めて名を呼んで、愛に燃ゆる眸子を据ゑながら、「私はこの石から血を出して御覽に入れます。涙を出して御覽に入れます。それはたしかに奇蹟です。奇蹟は今開かれます。私の言葉をお信じなさい。」

雪路はいよ／＼許すまじとするやうに、脣を見て、

「あなたはどこまで私を侮辱するのです。私はあなたにそんなに見縊られる女かどうか、今すぐお分りになるでせう。」

「お嬢さん、私は少しもあなたを侮辱しては居ません。雪路さんと申上てわるければ、暫らくお呼申す事を控へます。併し私はあなたを侮辱しても居ない通り、あなたを見縊つても居ません。たゞ私はあなたと私との間に、事實がどう展開しなければならぬかを知つて居るだけです。丁度あなたが私を愛するために、惱んでゐらつしやることを知つて居る通りに……。」

雪路の怒は頂點に達したやうに、聲を勵まして、

「高宮さん、私はあなたを愛しては居ません。あなたを愛する位なら、死を擇びます。」

「あなたはまだ御自分の心を偽はらうとなさるのですか、お嬢さん！」と、力のある語氣で、「私とあな

たとお互に愛し合つて居ながら、なほあなたが同じ愛に目覺る事の出来ないのは、あなたが御自分の富に累せられて、私を正しく見る事が出来ないからです。私はその點においてあなたを憐れみます、あなたの富を憐れみます。……お嬢さん、私が斷然あなたの愛を要求するのは、三春家のため、あなたのため、飽くまで忠實であらうとする私の理性と、あなたに對する私の純眞の愛が、それを命令するのです。」

雪路は激怒に震ひながら、

「三春家の名をこゝに用ふる事は許しません。あなたは三春家の裏切ものです。牧山さんの手から私を奪はうとするのは、私の富を奪はうとするのです。あなたの純眞の愛といふのは、今こそハッキリ私に分りました。私は今まであなたを疑ひながらも、なほあなたを信じようと努力してゐました。併し今といふ今始めて目覺めました。あなたが私の家へいらつしつて、お取になつた徑路は、明に分ります。あなたは母に取入るために、朱雀野の伯母さんに取入つたのです。母は果してあなたに籠絡されて了ひました。そこまではあなたの目的が順調に運ばれたのです。母は牧山さんの代りにあなたを迎へる決心までして了つたのです。併し私はそれを拒みました。そして牧山さんに進んで承諾を與へた事は、あなたも知つて居らつしやる通りです。あなたは最早尋常の手段で目的の達せられない事を

知つたところから、今日の機會を巧みに利用して、私の名譽を傷つけた上、牧山さんとの結婚を破壊しようとなすつたのです。何といふ恐ろしい方でせう。併しそれはあなたのなさりさうな事です。私はあなたが中村さんに何を仰しやつたか、また中村さんをどうしようとなすつたかも知つて居ます。私はあなたの脅迫を受けて、一晚この塔に居る位ならば、寧ろ舌を嚙切つて死んだがましです、私は死んでもあなたの犠牲にはなりません！」

脩は雪路が激するほど、ますます沈着いて、

「お嬢さん、あなたは何も舌を嚙切らなくても大丈夫です。私はこの塔を出ようと思へば、どんな事をしても出ます。そしてあなたの名譽を救ひます。併しその前にモ一度冷靜に返つて、私の申上ることをお聞下さい。私は中村さんがあなたに何を申上たか、大方は推測して居ます。それは私が何度か辯明を申上やうと考へながら態と控へて居た事です。そして同時にそれは、あなたも何度か、私からお聞糺しにならうとして、明らさまに口になさる事を憚つておるでになつた事です。……が私は今日こそ申上ます。私は自分とあなたの正しい愛のために、今日は如何なる障害物も、突破しやうと決心したのです。……併し私は中村さんの中傷に對して辯明する前に、私の露骨な要求を、あなたに知つて頂かなければなりません。私はモ一度あなたの怒を言して申上るのですが、私はあなたの想像して居ら

つしやるやうに、三春家を襲つて、その富を繼承しやうといふのではありません。あなたが一切のものを犠牲になすつて、一文の財産もおつけにならない赤裸々のまゝで、この赤貧な高宮脩の妻になつて頂く事を要求するものです。」

雪路は意外の言葉に驚かされながら、而も強い憤怒と憎惡をその色に見せて、

「それは嘘です。……そうして少しでも私の批難を外らさうとなさるので、それはあなたの卑劣な手段です。あなたの目的は私にはなくつて、三春家の財産にあるのです。あなたは牧山さんの方が極つて了つて、どうする事も出来なくなつた、め、私のこの赤裸々の身體を奪ひ出して、このまゝどこかへ連れて行かうとするのです。」と、激昂に慄へて云つた。

「お嬢さん、あなたが御自分の富のため、物を正しく見る事が出来ないと申上たのはそれです。私は決してあなたをこの場から誘拐しようとして試みるやうな無頼漢ではありません。私の心はあなたのお母さんがよく御承知です。いやあなたのお母さんよりも、朱雀野の大伯母がなほよく知つて居ます。」

——それはみんなあなたが籠絡して了つた人ではないか——さう云はうとしたが、朱雀野の大伯母と云つた言葉に雪路の心は怪しく騒いで、

「朱雀野の伯母さんの事をあなたは今何と仰しやつたのです。」

「朱雀野の大伯母といひました。道子刀自と私とは、同じ血統に繋がる身内のものですから……。」
雪路はわが耳を信ぜぬほどに驚いて、

「あなた、それはほんとの事を仰しやるのですか。あなたと伯母さんと、どうして血統が繋がつて、居らつしやるのです。」と、雪路の心はさうした場合にも、恐ろしい好奇心に燃え立つた。

「お嬢さん、この場合に私が何であなたを欺きませう。一切を明らかにする時が今来たのです。道子刀自と私の父とは、従姉弟同志だつたのです。」

「それはほんとうのですの？ ではもしやあなたは甘露寺と仰しやるのでは……？」と、雪路の調子は柔か味を帯びて来た。

脩は不思議さうに、

「あなたは どうしてそれを御存知なのです？」

「それは昨日滋さんの本を見て知つたのです。」

「さうですか、誰方からもお聞きになつたのではないのですね。……實は高宮は假の名で、甘露寺が私の本姓なのです。」

雪路には刀自の脩兄弟に對する態度が、始めて了解されたと思ふと、最早その話に何の疑を挟む餘

地もないと思つた。同時に彼女と脩との一切の關係が、がらりと變つて来たやうな慌たしさが、今彼女の胸を領し如めた。

彼女は殆ど狼狽に近い態度で、

「それではあなたは華族で居らつしやるのでは……？」

「お嬢さん。」と、脩は暖な調子で、「あなたは私の身の上話をお聞下さいますか。」

雪路は黙つて點頭いた。

「では一寸お待下さい。」

脩は片隅の方にあつた床几のやうな臺に眼を止めて、それを引きずり出して來ると、ハンケチで塵埃を拂つて、雪路の前に据ゑ、

「どうぞまづおかけになつて下さい。」

雪路は無言のまゝそこへ腰を卸した。脩はお賓頭廬さんの狭い臺座に、雪路と相對して、足を跨げるやうに踏張つて尻を据ゑた。

堂の中は殆ど暗くなつたが、淡い月の光が荒い狐格子を漏れて、雪路の眞白な横顔を照し出した。
「お嬢さん、詳細の事は別に申上ますが、甘露寺家は朱雀野家と同じ舊い京都の堂上華族でした。私

の父も子爵だつたのです。けれども父は事業に失敗して、破産を招いた結果、體面を重んじて、この一月爵位を返上すると共に、不幸にして病氣に襲はれ、二月に死亡したのですが、一切の財産を擧げて債主に提供した後ですから、私と弟とは昨日に變る無一物の身の上となつたのです。……それで私は自活の途を求めながら、就職難に苦しんで居る際、父の顧問辯護士金井博士から、こちらのお話があつたを幸、お世話を願つた次第ですが、併し私には父の遺言によつて、甘露寺家再興の重い責任を持つて居る身體ですから、自分の目的を果すまで、甘露寺の姓を祕して置きたいと考へ、博士にもお願ひして、母の高宮姓を名乗り、高宮脩となりまして、こちらへまるつた譯ですが、之は無論戸籍上の姓ではありません。朱雀野の隠居とは、こちらで始めて名乗つたのですが、これも私から頼んで身内のものである事を祕して居て貰ひましたので、私が隠居に取つたものでも何でも無い事は、あなたが明日にも隠居に一切を、お聞糺しになれば、明かになる事なのです。」と、脩は笑ひを帯んで云つて、一先彼の物語に段落をつけた。

雪路は自分の前に開かれた別天地に、どう應接してよいかも知れないやうに、殆ど茫然として脩と相對した。それは實際彼女の夢にも想像する事の出来ぬ意外な告白であつた。脩が道子刀自の再従弟であり、そして甘露寺子爵家の相續人であらうとは、何といふ驚くべき事實であらう！ 雪路が脩を

見て居た根本の思想は覆へされるのだ。今は新たな立脚地から彼を見なければならぬ……雪路の心は何とも知れない恐慌に襲はれるのである。

ふと彼女は母はきつと脩の素性を知つて居たに違ひないといふ考へが閃いた。

「あなた、母はあなたのお身の上を知つて居たのでせうか。」

「私にはどうとも分りません。朱雀野の隠居には、三春さんのどなたにも祕密にして貰ふやうに頼んであつたのですが、併しお母さんの私に對する態度から推測して、お母さんにだけは漏らされて居るのではないかとの疑も持つて居ります。」

「高宮さん。」と、雪路は眼を濕ませて、「あなたに對して持つた私の偏見を許して下さい。」

「お嬢さん、あなたがそれを仰しやるには、まだ早過ぎます。中村さんはあなたに何と云つたのです。まづそれをお聞かせ下さい。」

「はい。」と、雪路は慌てたやうに目を落して、「私は多分……欺かれて居たのです。」

「私はそれがどんな性質のものか、大方想像しては居ます。併し仰しやつて下さい。」

「中村さんはあなたから戀を仕かけられたやうに云つて居ました。」

「多分そんな事だつたでせう。併したゞそれだけではないでせう。」

「はい、あなたから戀を仕かけられたので、自分は獨身生活をする決心だから、結婚は出来ないとお断りすると、實はそれを見込んであなたに戀をするのだ、自分には妻と思ひ定めた女があるが、その女には少しも肉の感を感じて居ない、自分達は現代人として、お互に現在の生を享樂するため、あなたに共鳴して頂きたいのだ、肉の愛をあなたに求めるのだつて……。」

脩の全身は見る／＼怒に震へて、

「あの女はそんなひどい事をあなたに云つたのですか。それは全く反對です。その通りの事を云つて戀を仕かけられたのは私だつたのです。……そしてあなたはそれをお信じになつたのですか。」

雪路は黙つて恥るやうに俯むいた。

「さう伺へば私は辯明せずには居られません。あの日はあなたが朱雀野さんへいらつした日でした。私が榻に凭れて本を讀んで居るところへ、中村さんが一輪紅い薔薇の花を摘んで持つて來たのです。そして私がいらぬといふのを無理に、私の釦の穴へさして呉れて、突然私の手を握つたのです。それは實に巧妙な誘惑手段です。大抵の男ならその誘惑に落るでせう。」

さう云つて彼はその時艶子と彼との間に交された對話の概略を語り出した。

雪路の顔色はその話を聞いて居る中に、次第に蒼ざめて行つた。彼女は最早一點も脩の話を疑ふ隙

はないと思つた。今考へれば艶子の云つた事は、脩を陥れるものとして淺薄であり、また虚偽である事はあまりに明白であつた。自分は多少の疑惑を抱きながら、なほどうして艶子を信じたのだらう。艶子を信じた、めに、自分の運命は、定められて了つたのだ。……彼女は騒亂されるやうに悔恨に責められると共に、艶子に對する憎悪は制し切れないまで昂まるのである。

脩は語つて了ふと結んで云つた。……

「私はその時、正しいものは恐れるところが無いから、あなたの復讐を意としない、併し私自身はあなたの意志の如何に拘らず、あなたの友だと云残して立去つたのです。あの女は果して私に復讐したのです。」

「中村さんはそればかりか、あなたがもしこの事を私に云へば、牧山さんとあなたと醜關係があると云ひふらすと云つて、中村さんを脅したと云つて居ました。」

脩は且怒り且呆れながら、

「そんな事まで云つたのですか、問ふに落ちず語るに落ちるとはその事です。」

雪路は怪しんでその言葉を聞いたが、別にそれについては何にも云はず、

「ですけども、なぜあなたはそれを辯明して下さらなかつたのです？」と、言外に多大の怨をこめて

云つた。

「お嬢さん、それは私があなたを愛するために、出来なかつたのです。」

雪路は惱ましげに顔を伏せたが「でも……」と、何か云はうとして口籠つた。

「私はその時まであなたの幸福は、牧山さんと結婚なさるにあると信じて居たのです。」

雪路は説明を求めらるやうに顔を擧げて脩を見た。

「中村さんが私をあなたに中傷した四五日後の事です。私はお母さんから御相談を受けました。そのころあなたは深い煩悶に落ちておるでになりました。それは中村さんの中傷のためであつたと信じますが、お母さんはそれを別の意味に取つて居らつしたのです。」

「え？……」

「それはあなたが私を戀して居らつしやるためだと、お取違ひになつたのです。」

雪路は顔を染めながら、

「そして母は何をあなたに御相談申上たのです。」

「いふまでもなくあなたの結婚問題です。御自分は牧山さんに對し、不満足に思つて居らつしやるので、私の腹藏のない意見を聞かしてくれと仰しやるのです。私はその際ほゞお極りになつて居る御縁

談を、今更動かす必要があらうとも思はず、牧山さんを御養子にお迎へになる事が、三春家のため、またあなたのためであらうと信じて居ましたから、私は牧山さんの長所と思はれる點を擧げてお勧めし、最早お迷ひにならぬ方がよい事を申上たのですが、お母さんの思召は、あなたもお察しになつた通り、牧山さんの縁談を中止して、私をお迎へになる御希望であつたのです。それで私が牧山さんをお勧めした事には、御不満足で、結局あなたの愛が、牧山さんにならぬ事を仰しやつて、この縁組の不幸に終る事を御懸念になりますから、私は愛といふものが必ずしも幸福の必要條件でない事を申上げ、この世に絶対の自由のない以上、人間は家のため、人のため、或は社會のため、多少自分を犠牲にする覺悟がなくてはならぬ、その犠牲を人に強ふるのはよくないが、自ら決心する事は貴とい事だ、私はお嬢さんにたしかにその決心があると信じます、また私自身の場合を申上ぐれば、假にその人のためには、時と場合により、身命を擲つほどの愛人があるとしても、自分の家のため、決心のため、それが兩立しない場合には、屑よく自分の愛を犠牲にする考へで居る、それは人間が、それらの本分を盡す上において、致し方のない悲劇であると申上げたのです。それだけの事を申上ますと、遺がにお母さんはお悟りになりました、再び何事も私には仰しやいませんでしたが、併しこの問題については、朱雀野の隠居も、中間に立つて居りますから、その方の事も申上なければ、意味が徹底しません。お

母さんは隠居には最もよく御意中をお打明になつて居りますが、私を牧山さんの代りに、お迎へになるといふ事については、絶対に不可能である事を、隠居も申上て居りますので、お母さんはそれならお嬢さんを私に下すつてもいゝとまで仰しやつて居らつしやるのです。それもこれもみなあなたを深くお愛しになる餘りの事ですが、私は始めから隠居にも申して居りまして、妻の財産で家を興したと云はれるやうな結婚はしない、といふ決心をして居る際ですから、それも私はお断りをしたのです。お嬢さん、私は以上顛末をあなたに申上る考へは、毛頭なかつたのですが、今これを申上るのは、何も自分の心を衒ふためでもなければ、またあなたに對して、何の野心もなかつた事を辯明するためでもなく、たゞそれを申上て置かなければ、私が中村さんの中傷に對し、あなたに辯明しなかつた事が、徹底しないからです。」

それを聞いて居る中、雪路は次第に穴へでも隠れたいやうな氣持に襲はれるのである。脩の彼女に對し、三春家に對し、はた彼自身に對して取つた行動は、直に正義そのものであるやうにさへ思はれる。その脩に對し、自分の抱いて居た偏見は、眞に許されない事だと考へると、彼は自責の念に恥ぢて、脩の顔を仰ぐ事さへ出来ないのである。

「お嬢さん、それだけ申上ればお分りになります。あなたが中村さんの毒舌に苦悶して居らつしや

るのを見ながら、何の辯明をも試みなかつたのは、あなたと牧山さんの結婚を、成立させたい私の微意だつたのです。私がもし辯明を試みたとしたら、あなたの感情がどう動くか、それは私にあまりに明白な問題だつたのです。」と、彼は微笑を雪路の顔に投げた。

雪路はさつと顔を赧めたが、すぐ舊の蒼白さに返つて、

「でもあなたが、今仰しやつて下さるよりは、その時仰しやつて下されば、私はまだ救はれたではありませんか。」

「それではお嬢さん、今は遅いと仰しやるのですか。……さうしてあなたは私の矛盾を、お責めになるのでせう。」

雪路は黙つて點頭いた。

「お嬢さん、その矛盾は私の罪ではありません。お聞きなさい、私は今あなたに驚くべき事を申上るかも知れません。」脩は立上つて、雪路の方に屈みながら、「牧山さんと中村さんとは通じて居ます。」

雪路の顔色は見る間に變つて、

「え……？ それはほんとうですか。」

「あなたの御病氣中を利用して、二人の密會は盛んに行はれました。私は牧山さんをお母さんにお勸

めした責任もありますし、かたぐ、牧山さんに反省を求めると考へて、一度牧山さんと中村さんに別々に忠言を試みたのです。牧山さんには、その前にも懇々お話しして置いた事もあつたので、私の誠意は知つて居て下さるものですから、私のその忠言に對しては、非常に恐縮なすつて、必ず中村さんとは關係を斷つと誓はれたのです。私はそれで實際に反省されるならばと、それを希望して居たのですが、お嬢さん、その希望は見事に裏切られました。二人はその後も相變らず密會をして居ります。私はこの事を申上るのは非常に苦痛です。たゞそれだけに止めて詳しい事を申上ませんが、重助からお聞きになれば、一切の事がお分りになります。」

雪路は憤怒の爲に戦慄した。嘉三郎に對して、何の愛がなかつたとしても、彼が自分の名に加へた侮辱は忍ぶべからざる事であつた。同時に艶子が自分の信頼を裏切つて、假にも良人と約した男を誘惑した事は、これまた斷じて許さるべき事ではない。二人に對する制裁は當然加へられなければならぬ。嘉三郎に自分の名を與へられぬ事はいふ迄もない——

「お嬢さん、そればかりではありません。三四日前奥様のところへ、お新といふ隣村の娘から、手紙がまるつたのです。その娘は牧山さんに弄ばれて、子まで産落したが、養育費も出してくれないので、奥様に懇へると云つて來たので、奥様からの御依頼で、私が取調べてまゐりました。」

「それも事實だつたのですか。」と、雪路は呆れた。けれどもそれは嘉三郎と艶子との場合と違つた。第三者に對するやうな態度で、それを云つたのである。

「その通りの事實でした。」

「でお母さんは何と云ひました？」

「いや、實はまだ御報告申してないので、牧山さんと中村さんの事もお母さんはまだ御存知はありません。私がそれを一緒に御報告申上るとすれば、その結果は分つて居りますから、わざと差控へて居つたのです。」

雪路はそれを認めるやうに首肯した。その時脩は彼女の美しい大きい眼が、久しい間見る事の出来なかつた活々とした光澤に訝ゆるのを見た。それは光明と希望の新たに蘇生つた復活の眸子であり、同時に云知れぬ暖たかさと、柔らかさが、熱望と感謝に融けこむ眼光であつた。

「お嬢さん。」と、脩は更に一步雪路に近づいて、「私はすべてを申上りました。私が牧山さんに期待したすべては裏切られたのです。此上牧山さんから期待する何ものもありません。あなたは天神山で生きながら墳墓に入るのだと仰しやいました。誰もあなたを救ふものもなければ、またあなたが救ひを求めものもないと仰しやいました。私は其時なほあなたが牧山さんとの結婚によつて、救はれるものと

信じ、且つ祈つて居つたのです。併し今はすべてその信念は覆へされました。あなたを救ふものは、私の外にない事を明かに知つたのです。あなたも今こそ快よく私の救ひをお求めになるでせう。あなたがなほ世の中に、純潔の愛のある事をお知りになるには、少しも遅い事はありません。」と、脩の調子には次第に熱を加へて来て、自分の魂を吹込むやうに雪路を凝視しながら、「私が既に婚約まで結ばれた牧山さんの手から、あなたを奪ふといふ事は私としても、あなたとしても、世間的に許されない事かも知れません、そのために受ける批難ならば、私は如何なる批難も甘受します。併しお嬢さん、少くも私の愛は純潔です。私は神の前でもそれを誇ります。私の心は今何ものをも焼盡すまでに燃えてゐます。私は今日まであらゆる努力を以て、その愛を壓迫して來ました。……矢はもう弦を離れたのです。如何なるものもそれを止める力はありません。あなたは私のものです！ この上あなたを人のものとする事が、どうして出來ます？ 雪路さん、答へて下さい、然か否か、その外の言葉は何にもありません。」

それは實際何ものをも焼盡す熾烈な愛の言葉であつた。その烈々の焰は雪路の心をも焼盡さうとして居る。彼女の全身は同じ血潮に燃え、且つ顛へた。

「高宮さん！ 私も……私もそれは同じ事です、もしあなたが私を許して下さいならば……。」

「雪路さん！」

二人同時に奏でた愛の階調は、その瞬間に張裂けんばかりの高潮に達した。脩が一切を忘れて雪路を抱擁しようとする時、雪路は自からその身を脩に投げかけた。

脩の強い力に抱きしめられた時、雪路は自分の持つ一切を擧げて男に任せる、處女の誇りと幸福に震へた。小禽の和毛のやうに柔らかく、春のやうに暖い零圍氣が、解けるやうに二人を包んだ。地上のあらゆる歡喜、あらゆる幸福は、その刹那に彼等の上にある事を、二人は感じた。

「雪路さん、それではあなたは私の妻になつて下さるのですね。」と、脩はやゝ暫らくして囁やいた。

「え、」と、雪路は男の胸に顔を埋めたまゝ、答へた。

「あなたの家も財産も捨て、……？」

「そんなものは最早私を引きとめる、何の力もありません。」

「難有う！」と、彼は抱擁から雪路を離して、その手を取つた。

二人の固く握り合つた手は火のやうに熱してゐた。

「お母さんは御迷惑なさるでせう。併し結局は喜んで下さるでせう。」

「え、きつと喜んでくれます。」